

茨城県教育財団文化財調査報告第173集

国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線

道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 2

津賀城跡

平成 13 年 3 月

茨城県潮来土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第173集

国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線
道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 2

つ
津 賀 城 跡

平成 13 年 3月

茨城県潮来土木事務所
財団法人 茨城県教育財団



古墳時代の住居跡



第17号住居跡出土遺物

序

茨城県は、長期的な展望のもとに、県土の基盤整備を行っております。道路網につきましても、ゆとりある社会の実現をめざして、快適な道路の整備を進めております。

北浦周辺の地域は、太平洋沿岸部と県北・県西地方、さらには北関東全域とを結ぶ位置にあり、今後さらなる交通量の増加が見込まれる地域であります。

このため茨城県は、北浦周辺地域における交通網の整備の一環として、一般県道荒井麻生線の道路改良工事を実施することとしました。その道路改良工事地内に津賀城跡、西平遺跡、五安遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成8・10年度には西平遺跡、五安遺跡の発掘調査を実施し、ついで平成12年1月から3月まで津賀城跡の発掘調査を実施いたしました。その成果の一部は、既に「国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書1」として刊行いたしました。

本書は、津賀城跡の調査成果を収録したものであります。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史の理解、教育・文化的の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県から賜りました多大なる御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、鹿嶋市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成13年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤 佳郎

例　　言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成11年度に発掘調査を実施した、茨城県鹿嶋市津賀1393-4ほかに所在する津賀城跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成12年1月4日～平成12年3月31日
整理 平成12年7月1日～平成12年12月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、調査第一課第2班長田所則夫、主任調査員川村満博、同藤田哲也、同飯島一生が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理課長川井正一の指揮のもと、主任調査員飯島一生が担当した。
- 5 発掘調査及び整理に際し御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡　例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅷ区系座標に準拠し、X = +4,040m, Y = +67,680mの交点を基準点（A 1 a1）とした。この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。
- 2 遺構・遺物・土層に使用した記号は、次のとおりである。
- 遺構　■ 住居跡 - S I 土坑 - S K 溝 - S D 土壘 - S A 整地層 - S
△ 遺物　● 土器 - P 土製品 - D P 石器・石製品 - Q 金属製品 - M 拓本記録土器 - T P 実測記録 - R
■ 土層　搅乱 - K
- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

■ 粘土・埴材 ■ 烧土・赤彩 ■ 内面黒色処理 ■ 繊維土器

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は300分の1、遺構は60分の1、または80分の1に縮尺して掲載した。
(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。

- 6 遺物観察表の記載方法は次の通りである。

- (1) 土器の計測値の表示は、口径 - A 器高 - B 底径 - C 高台径 - D 高台高 - E とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は〔 〕を付して示した。
(2) 備考の欄は、残存率、及びその他必要と思われる事項を記した。

- 7 「主軸」は、炉を持つ住居の場合は炉の中心と入り口を結んだ軸線を、その他の遺構については、長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N - 10° - E, N - 10° - W)。

抄 錄

ふりがな	こほきんきゅうちほうどうせいひじぎおいつばんけんどうあらいあそせんどうろかくゆうこうじちないまいぞうぶんかさいちょうさほこうくは							
書名	国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 2							
副書名	津賀城跡							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財團文化財調査報告							
シリーズ番号	第173集							
著者名	飯島一生							
編集機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2001(平成13)年3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	標高	調査期間	調査面積	調査原因
津賀城跡	茨城県鹿嶼市		36度	140度	34	20000104		国補緊急地方 道路整備事業 一般県道荒井 麻生線道路改 良工事に伴う 事前調査。
	大字津賀 1393-4ほか	08222-26	02分	35分	~	~	5,500m ²	
			02秒	10秒	35m	20000331		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
津賀城跡	集落跡	古 墳	竪穴住居跡 17軒	土師器(壺・甕・ 堵・高壺・壺・瓶) 須恵器(罐)	古墳時代の集落跡及 び中・近世の城跡・ 墓域。調査した土塁			
	城跡・ 墓域	中・近世	土塁 2基 土坑 62基 溝 4条	土師器(小皿) 土師質土器(小皿、 内耳鍋片) 陶器(小皿)	の北西およそ150m には津賀城の主郭と されている平場が現 存する。			
	その他	旧石器 縄文		尖頭器 縄文土器片				

目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

挿図目次、表目次、写真図版目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序の検討	9
第3節 遺構と遺物	10
1 弥生時代の遺構と遺物	10
(1) 土 坑	10
2 古墳時代の遺構と遺物	11
(1) 壓穴住居跡	11
(2) 土 坑	60
3 中・近世の遺構と遺物	62
(1) 土 堆	63
(2) 土 坑	67
4 その他の遺構	77
(1) 土 坑	77
(2) 溝	83
5 津賀城跡遺構一覧表	83
6 遺構外出土遺物	85
第4節 まとめ	88

挿図目次

第1図 津賀城跡周辺遺跡分布図	4	第35図 第14号住居跡出土遺物実測図(2)	50
第2図 津賀城跡調査区設定図	8	第36図 第15号住居跡実測図	52
第3図 基本土層図	9	第37図 第15号住居跡・出土遺物実測図	53
第4図 第110号土坑実測図	10	第38図 第16号住居跡出土遺物実測図	54
第5図 第110号土坑出土遺物実測図	10	第39図 第16号住居跡実測図	55
第6図 第1号住居跡実測図	12	第40図 第17号住居跡・出土遺物実測図	56
第7図 第1号住居跡出土遺物実測図	13	第41図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)	57
第8図 第2号住居跡実測図	15	第42図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)	58
第9図 第2号住居跡出土遺物実測図	16	第43図 第17号住居跡出土遺物実測図(3)	59
第10図 第3号住居跡実測図	18	第44図 第101号土坑実測図	60
第11図 第3号住居跡出土遺物実測図	19	第45図 第101号土坑出土遺物実測図	61
第12図 第4号住居跡実測図	21	第46図 第116号土坑実測図	62
第13図 第4号住居跡・出土遺物実測図	22	第47図 第116号土坑出土遺物実測図	62
第14図 第5号住居跡実測図	24	第48図 第1号土壘実測図	64
第15図 第5号住居跡出土遺物実測図	25	第49図 第1号土壘土層断面図	65
第16図 第6号住居跡・出土遺物実測図	27	第50図 第1号土壘・出土遺物実測図	66
第17図 第7号住居跡実測図	29	第51図 第2号土壘土層断面図	67
第18図 第7号住居跡・出土遺物実測図	30	第52図 第78号土坑実測図	67
第19図 第7号住居跡出土遺物実測図	31	第53図 第104号土坑実測図	68
第20図 第8号住居跡・出土遺物実測図	32	第54図 第125号土坑実測図	68
第21図 第8号住居跡出土遺物実測図	33	第55図 第107・108号土坑実測図	69
第22図 第9号住居跡実測図	35	第56図 第109号土坑実測図	70
第23図 第9号住居跡・出土遺物実測図	36	第57図 第114号土坑実測図	70
第24図 第10号住居跡・出土遺物実測図	37	第58図 第18号土坑・出土遺物実測図	71
第25図 第10号住居跡出土遺物実測図	38	第59図 第27号土坑・出土遺物実測図	72
第26図 第11号住居跡実測図	39	第60図 第33・34号土坑実測図	73
第27図 第11号住居跡・出土遺物実測図	40	第61図 第33号土坑出土遺物実測図	73
第28図 第12号住居跡出土遺物実測図	41	第62図 第34号土坑出土遺物実測図	74
第29図 第12号住居跡実測図	42	第63図 第122号土坑・出土遺物実測図	74
第30図 第13号住居跡実測図	44	第64図 粘土貼土坑(1)	75
第31図 第13号住居跡・出土遺物実測図	45	第65図 粘土貼土坑(2)	76
第32図 第14号住居跡実測図	47	第66図 その他の土坑(1)	77
第33図 第14号住居跡・出土遺物実測図	48	第67図 その他の土坑(2)	78
第34図 第14号住居跡出土遺物実測図(1)	49	第68図 その他の土坑(3)	79

第69図 その他の土坑(4)	80	第73図 遺構外出土遺物実測図(2)	86
第70図 その他の土坑(5)	81	第74図 遺構外出土遺物実測図(3)	87
第71図 第1～4号溝土層断面図	83	第75図 津賀城縄張り図	90
第72図 遺構外出土遺物実測図(1)	85		

表 目 次

表1 津賀城跡周辺遺跡一覧表	5
表2 住居跡一覧表	83
表3 粘土貼土坑一覧表	84
表4 土坑一覧表	84

写真図版目次

P L 1 第1号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡 完堀, 第3号住居跡遺物出土状況	P L 8 第1・2・3・4号住居跡出土遺物
P L 2 第4号住居跡遺物出土状況, 第7号住居跡 遺物出土状況, 第7号住居跡完堀	P L 9 第3・4・5・6・7・8号住居跡出土遺物
P L 3 第7・11・12・13・14号住居跡完堀, 第11 号住居跡完堀, 第12号住居跡完堀	P L 10 第8・9号住居跡出土遺物
P L 4 第13号住居跡竪土層断面, 第13号住居跡完 堀, 第14号住居跡遺物出土状況	P L 11 第10・11・12・13号住居跡出土遺物
P L 5 第14号住居跡完堀, 第17号住居跡遺物出土 状況, 土坑確認状況	P L 12 第14号住居跡出土遺物
P L 6 第18号土坑遺物出土状況, 第33号土坑遺物 出土状況, 第109号土坑完堀	P L 13 第17号住居跡出土遺物
P L 7 第1号土基出入口施設確認状況, 第1号土 基北側土層断面, 第2号土基土層断面	P L 14 第13・17号住居跡出土遺物, 第18・27・33 号土坑出土遺物, 第1号土基出土遺物, 遺 構外出土遺物
	P L 15 第17号住居跡出土土製支脚, 第110号土坑出 土遺物, 遺構外出土遺物(縄文・弥生土器 片)
	P L 16 住居跡・土坑および遺構外出土遺物(石 品・石製品・土製品・古錢)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、鹿嶋市津賀地区において国補緊急地方道路整備事業を進めている。

平成5年9月16日、茨城県潮来土木事務所は、大野村（平成7年9月、鹿島町と合併して鹿嶋市となった）教育委員会あてに、一般県道荒井麻生線建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。それを受けて、大野村教育委員会と茨城県教育委員会は、一般県道荒井麻生線建設事業の取り扱いについて協議を行い、同年11月17日に事業地内の現地踏査を行った。その結果、茨城県教育委員会は、大野村教育委員会に対し、事業地内に津賀城跡、西平遺跡、五安遺跡⁽¹⁾が所在する旨を茨城県潮来土木事務所に回答するように通知した。回答を受けた茨城県潮来土木事務所は、茨城県教育委員会あてに津賀城跡の取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は、茨城県潮来土木事務所と協議を重ね、現状保存が困難であることから、平成11年3月26日、茨城県潮来土木事務所に対し、津賀城跡について記録保存のための発掘調査を実施するよう回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財團を紹介した。

茨城県潮来土木事務所と茨城県教育財團は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成12年1月4日から同年3月31日にかけて、津賀城跡の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

津賀城跡の発掘調査は、平成12年1月4日から平成12年3月31日までの3ヶ月間実施した。以下、調査の経緯について、その概要を記述する。

1月 初旬に発掘調査を開始するための調査器材の搬入、補助員雇用事務等の諸準備を行った。同時に津賀城の縄張りを確認するために、主郭周辺部分及び今回調査する土星周辺を踏査した。すでに調査区北西部にあった丘陵地と調査区南部の丘陵地は、大規模な土取り工事のために削平されていた。調査する土星は、事前調査及び伐開のために重機が進入したことにより、中央部が削平されており「コ」の字を2つ併せたような形になっていた。踏査の結果、新たに調査区北部に隣接する傾斜地に縦堀とそれに伴う土星が現存すること、調査区南部に平場や曲輪が現存することが分かった。したがって、津賀城の縄張りは予想以上に大きく、今回調査する土星とその周辺も津賀城の一部として調査を進めることとした。6日からは補助員を投入し、土星を中心とした現況の記録写真の撮影と測量をするために調査区域の清掃と伐開作業に取りかかった。同時に土捨て場になる西部から人力と重機による表土除去作業及び遺構確認作業も開始した。18日には、清掃・伐開作業が終了したため、土星を中心とした現況の写真を撮影し、その後は土星を含めた周辺の測量を行った。土星の西部は調査区域外であるため、測量のみの調査とした。土星の規模は、南北約40m、東西約35m、高さは2mほどで四隅が高くなっている、西側では土星が内側に崩れた様子が観察できた。東側中央部は、やや窪んだ形状になっており、出入り口の可能性があると考え、測量と航空写真撮影後は、掘り込んで土層を観察することとした。また、土星の南部・北部・東部に土層観察面を設定し、土星の構築方法等を観察することとした。

一方、遺構確認作業は、上面に土師器片（古墳時代後期）が散乱するものの、遺構の平面形が確認で

きず遅れ気味になっていた。テストピットや試掘による土層観察の結果、土塁南部の平坦部は、大きく土が動かされていることが分かった。この層は、住居跡の覆土の上に位置することから土塁構築の際に動かされた層である可能性も考え「整地層」としてその範囲を捉えることとした。このため古墳時代の遺構の確認は、平場等の中世の遺構確認のために設定したトレンチ（南北1本、東西4本）の土層から、「整地層」を取り除きながら進めることとした。その結果、土塁南部の平坦部に住居跡14軒、溝1条、土坑10基を確認した。南端部の5～7軒の重複部分と平面形が不明なものについては、さらにトレンチを設定し、覆土を確認しながら調査することとした。土塁内には粘土貼り土坑を含めおよそ40基の土坑が確認され、これらはその形状や出土遺物から中世から近世にかけての墓塚の可能性が高いと考えられた。

下旬には、南側の土塁に設定した土層観察面の下層から1m×0.4mほどの石棺の蓋石（雲母片岩）が3点露出した。この時点で土塁の下に古墳が存在した可能性も含めて調査を進めることとした。残された調査期間と遺構数を考慮すると、調査体制の見直しが必要となった。

2月 調査は、土坑を含めた土塁の調査と住居跡の調査に分けて進めることとした。土塁内からは掘立柱建物跡等の遺構は検出できなかった。遺物はわずかに土師器片や陶器片が出土したが、中世の遺構に間違づけられるような五輪塔などの石製品の出土は見られなかった。

住居跡の調査は、トレンチで覆土を確認しながら進めたために、時間のかかる作業となった。中世の土木工事の際に動かされた層とした「S層」は、南は第11号住居跡付近まで、東は台地の端部まで広がることがわかった。住居跡の掘り込みは、上部がその工事の際に削平されたために、遺物の多くは細片で出土した。住居の時期は、出土遺物から判断するといすれも古墳時代後期初頭と考えられた。また、石棺の蓋石は、周辺の調査と土層の観察から土塁構築の際に埋められたものであることが分かった。下旬には、土塁内の調査がほぼ終了し、土塁北部の平場と土坑の調査に取りかかった。

3月 土塁北部の平場調査のためにトレンチを入れたところ、土木工事により動かされた平坦な層が2層検出され、土塁北部にも平場が形成されていたことが分かった。さらにこの層の下層からは、住居跡が1軒検出された。

中旬以降は、おもに住居跡の調査を中心に進め、同時に周辺部の地形や縱堀、曲輪の実測を進めた。23日に航空写真撮影を実施した後、土塁東側中央部の出入り口の可能性がある窪んだ部分の調査に入った。窪んだ部分を掘り込んだところ最下層から硬化面が検出され、当初想定したとおり出入り口部と確認できた。下旬には、補足調査を含めすべての遺構調査を終了した。最後に調査区域内の安全対策を施し、現場事務所を撤収した。

註

- 西平遺跡と五安遺跡は、財團法人茨城県教育財團により平成8年度と10年度に発掘調査され、平成11年度に報告書が刊行されている。
- 茨城県教育財團「国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書1 西平遺跡・五安遺跡」「茨城県教育財團文化財調査報告」第165集 2000年

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

津賀城跡は、鹿嶋市大字津賀1393-4ほかに所在し、北浦を望む鹿島台地西端の縁辺部に立地する。

遺跡が立地する台地は鹿島台地と呼ばれ、東部は太平洋、西部は北浦に挟まれて南北に延びている。標高40m前後の洪積台地である。北端は那珂川、南端は利根川で標高は南部になるにつれ低くなる。太平洋側は、ところどころで海食崖がみられ、南部には海岸砂丘が発達している。当遺跡の立地する周辺は、北浦の浸食により谷津が台地に細長く樹枝状に入り組む様相を示している。台地端部から低地へは急傾斜地になっており、谷津から広がる低地は、そのまま北浦湖岸低地へと続いている。当遺跡が立地する台地端部の標高は約30m、眼下に広がる低地は標高1~2mほどである。

地質は、成田層（砂層・砂疊層・シルト層）、常緑粘土層、さらに25~3mの厚さの関東ローム層の順に堆積している。台地上において、一般に耕作土となる黒色土の堆積はほとんど見られず、ロームの上層には褐色を呈する砂質の堆積土が見られる。

第2節 歴史的環境

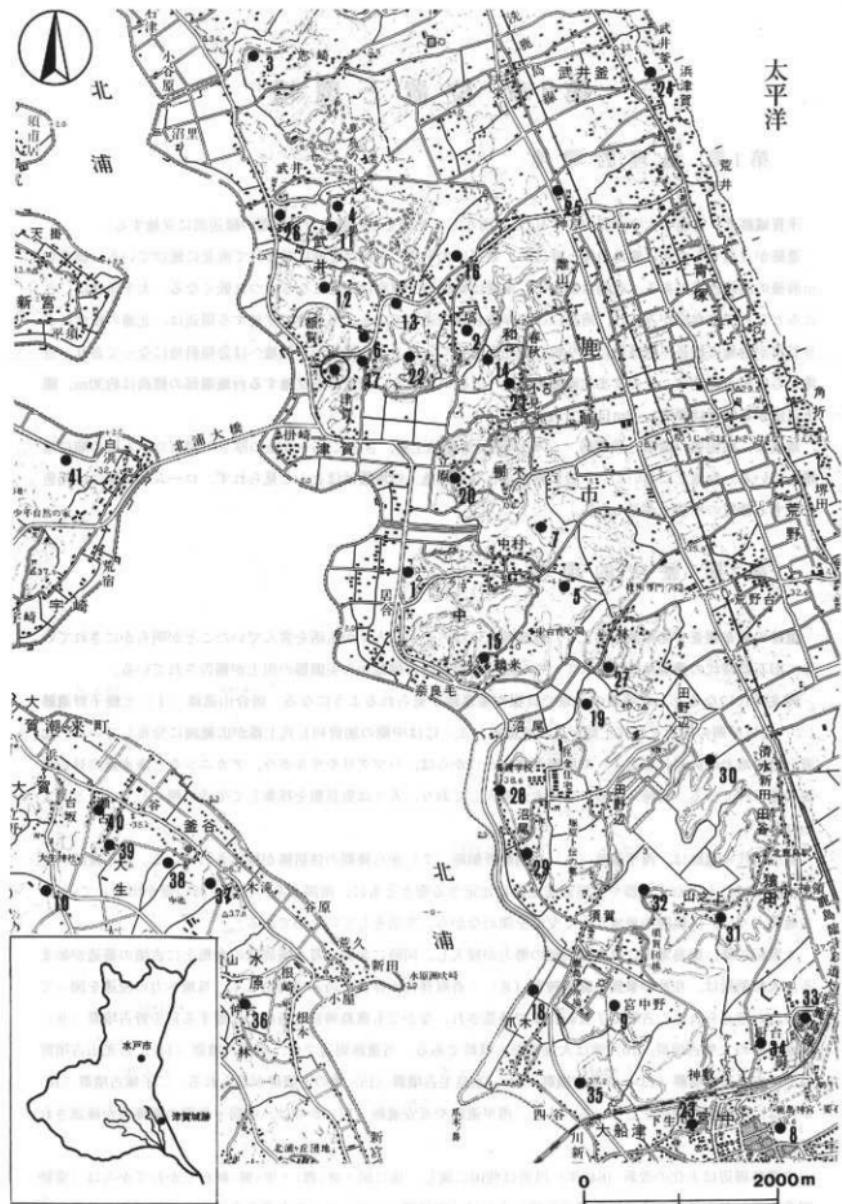
遺跡の分布調査や発掘調査により、鹿島地方には古くから人々が生活を営んでいたことが明らかにされている。旧石器時代の遺構は確認されていないが、志崎地区の畠地から尖頭器の出土が報告されている。

縄文時代になると、北浦側の台地で貝塚や集落跡が見られるようになる。居合山遺跡（1）と蛭子野遺跡（2）には早期の田戸下層式土器が、孤崎遺跡（3）には中期の加曾利E式土器が広範囲に分布している。北浦沿岸台地上の武井貝塚（4）や原畠遺跡（5）からは、ハマグリやサルボウ、アカニシなど海水産の貝が多数確認されている。当時、北浦には海水が侵入しており、人々は魚貝類を採集して生活の糧としていたと考えられる。

弥生時代の遺跡は、西平遺跡（6）や明地野館跡（7）から後期の住居跡が検出されている。西平遺跡の住居跡からは、十王台式土器や上稻吉式土器に比定される壺とともに、南関東系の特徴を持つ甕が出土している。当地の人々は、広範囲の地域と広く交流を深めながら、生活をしていたのである。

4世紀以降、鹿島地方には大和朝廷の勢力が侵入し、同時に北浦・霞ヶ浦周辺の台地上に古墳の築造が始まる。大和朝廷は、在地の豪族と鹿島神宮（8）・香取神宮の存在を巧みに利用して、当地へ力の浸透を図っていったと考えられる。古墳は7世紀代まで築造され、なかでも鹿島神宮北西部に位置する宮中野古墳群（9）、北浦西岸の大生古墳群（10）等は大規模な古墳群である。当遺跡周辺では、橋掛古墳群（11）、日光山古墳群（12）、志々山古墳群（13）、春秋古墳群（14）、奈良毛古墳群（15）等の古墳群が見られる。二子塚古墳群（16）からは、円筒埴輪が出土している。また、西平遺跡や五安遺跡（17）からは、中期~後期の集落跡が確認されている。

当遺跡周辺は大化の改新（645年）以前は仲国に属し、後に国・評（郡）・里（郷）制がしかれてからは「常陸国香島評」さらに「常陸國鹿島郡高家郷」または「中村郷」に属していたと考えられる。発掘調査の結果、神野向遺跡は、鹿島郡衙跡とされている。遺跡からは、大漁・掘立柱建物跡とそれらを囲む回廊等の遺構が検出



第1図 津賀城跡周辺遺跡分布図

表1 津賀城跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世
◎	津賀城跡			○	○			21	春秋館跡						○
1	居合山遺跡	○	○					22	塙館跡						○
2	蛭子野遺跡		○	○				23	鹿島城跡				○	○	○
3	狐崎遺跡	○	○	○				24	武井釜製塩跡						○
4	武井貝塚	○						25	鹿島神宮北1の鳥居						○
5	原畠遺跡	○						26	武井城跡						○
6	西平遺跡	○	○	○	○	○	○	27	林中城						○
7	明地野館跡		○	○	○			28	塙原古墳群				○		
8	鹿島神宮							29	鬼塙館跡						○
9	宮中野古墳群			○				30	沼尾神社						
10	大生古墳群			○				31	坂戸神社						
11	橋掛古墳群			○				32	竜会城跡						○
12	日光山古墳群			○				33	伏見遺跡	○					
13	志々山古墳群			○				34	厨台遺跡群	○	○	○	○	○	
14	春秋古墳群			○				35	大塚辺田横穴群						○
15	奈良毛古墳群			○				36	中台古墳群				○		
16	二子塙古墳群			○				37	田ノ森古墳群				○		
17	五安遺跡			○	○	○		38	釜谷古墳群				○		
18	鹿島湖岸北部条里遺跡		○	○	○	○		39	新城跡						○
19	林城跡					○		40	鳳凰城跡						○
20	立原城跡					○		41	於山古墳				○		

され、さらに炭化米、須恵器、軒丸瓦、丸・平瓦、腰帶具などの遺物が出土した。なかでも「鹿嶋郡厨」「鹿嶋」「厨」と記された墨書き土器の出土は、神野向遺跡が鹿島郡衙跡であることを裏付ける資料である。また、奈良正倉院に納められた綾布の中に「常陸國鹿嶋郡高家郷・・・」と記されている綾布が現存している。これは綾が、郷から郡、国府を通して中央に納められたという事実を示すものである。さらに、昭和40年代の農地

基盤整備事業が実施される前は、北浦湖岸の水田地帯には条里創造構の痕跡があったとされる。現在でも北浦東岸低地には、鹿島海岸北部条里遺跡（18）として、登録されている地区がある。これら郡衙の存在、調布の貢送、条里の存在は、律令の制定後、当地が中央の政治体系の中に確実に組み込まれていたことを示すものであり、地方のくらしはもとより、地方と国家との関係を考える上でも重要な資料である。

当時、鹿島神宮は常陸國一の宮として人々の信仰を集めるとともに、東夷征伐に関わる武運の神として、さらには征伐の拠点として朝廷より確固たる地位を与えられ、勢力を拡大していった。さらに、鹿島神宮が藤原（中臣）氏とつながりが深いことも、その一因となっている。

鎌倉時代以降、武運の神である鹿島神宮は、武家との結びつきを深める。源頼朝は土着の豪族である大株平氏系の鹿島氏を惣大行事に任じ、さらに鹿島神宮に社領を寄進している。このような行為の背景には、人心に大きな影響力を持つ神社を味方にすることにより人望を集めようとする武家と、社領の安堵とさらなる地位の向上を図ろうとする鹿島神官側のそれぞれの思惑があったためと考えられる。当時、当地において勢力をふるっていた豪族は、鹿島氏である。鹿島氏は畠田氏（畠田城）、林氏（林城（19））、立原氏（立原城（20））、春秋氏（春秋城（21））等と分家し、それぞれが鹿島一族として鹿島台地に城を築き、勢力を伸ばしていった。塙氏（塙館（22））などはさらにその分家とされている。

当地において中世以降の人々の暮らしぶりは、文献に散見することができる。それによると、北浦・霞ヶ浦湖岸には多くの津（港）が作られ、なかでも潮来や延方、鹿島の大船津、奈羅毛などの津は、互いに結びつき水上交通の要衝となっていた。これら水運の扱い手の多くは、海夫とよばれる漁民であり鹿島神宮・香取神宮の支配のもとにあった。また、津の知行者には大株氏系の名が見え、豪族の領民支配の一端がうかがわれる。

戦国期になると、鹿島氏一族は内紛を続けるようになり、次第に衰退していった。天正19年（1591年）豊臣秀吉と結びついた佐竹氏により、鹿島城（23）が攻略されるに至り、鹿島氏は滅亡した。この際、鹿島台地上に所在した鹿島一族の小城もほとんどが廃城になっている。津賀城もこの時点で廃城になったと考えられる。

徳川家康により江戸に幕府が開かれ、佐竹氏が秋田に移封されると常陸國の大部分は水戸徳川家をはじめ諸代、旗本の所有となり、鹿島地方も旗本の知行地や鹿島神宮の社領となった。江戸時代の文献には、当地が北浦の氾濫や飢饉などの自然災害にたびたび襲われたという記述が見られる。北浦湖岸の人々は、低地の水田地帯で水耕や北浦で漁業を営んで生活し、砂丘地帯が広がる台地東部の人々は、おもに太平洋を漁場とする漁業や製塩業等を営んで生活していたのである。

参考文献

- ・大山年次、蜂須紀夫 「茨城県 地学のガイド」 コロナ社 1977年
- ・蜂須紀夫、大森昌衛 「茨城の地質をめぐって」 著地書館 1979年
- ・大野村史編さん委員会 「大野村史」 大野村教育委員会 1983年
- ・鹿島町史編さん委員会 「鹿島町史 第一巻」 鹿島町教育委員会 1972年
- ・潮来町史編さん委員会 「潮来町史」 潮来町教育委員会 1996年
- ・茨城県立歴史館 「茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代」 茨城県 1992年
- ・茨城県史編さん中世史部会 「茨城県史料 中世編I」 茨城県 1970年
- ・池邊彌 「和名類聚抄郡都里驛名考證」 吉川弘文館 1981年
- ・中山信名 「新編常陸國誌」 善書房 復刻版 1964年
- ・鹿島町教育委員会 「神野向遺跡II」「鹿島の文化財第24集」 1982年

- ・鹿島町教育委員会 「神野向遺跡IV」「鹿島の文化財第36集」 1984年
- ・鹿島町教育委員会 「鹿島湖岸北部条里遺跡V」「鹿島の文化財第48集」 1985年
- ・鹿島町教育委員会 「神野向遺跡VI」「鹿島の文化財第54集」 1987年
- ・鹿島町教育委員会 「鹿島湖岸北部条里遺跡VII」「鹿島の文化財第67集」 1989年
- ・茨城県教育財団 「国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書1 西平遺跡 五安遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第165集 2000年



第2図 津賀城跡調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

津賀城跡は、鹿嶋市の北西部に位置し、北浦を望む標高35~37mの台地の縁辺部に立地している。調査区域は、津賀城の主郭から南東へ200m、標高33~35mの台地の縁辺部にあたる。調査範囲は、南北約160m×東西約35mの長方形で、面積5,500m²である。なお、調査区域の北側は、五安遺跡と隣接している。

今回の調査によって、竪穴住居跡17軒、土坑62基、溝4条、土塁2基が確認された。竪穴住居跡からは、土師器や須恵器、土製品（土玉）、鉄製品（刀子）等の遺物が出土した。出土遺物から、いずれの住居跡も古墳時代後期のものである。また、検出された土坑の中には、火葬施設や方形竪穴状遺構、墓坑などが確認されている。土塁は東西約40m、南北約35m、高さ2mほどで、繩張りから津賀城と何らかの関連を持つ遺構である可能性が高い。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に21箱出土している。遺物の大部分は、住居跡から出土した土師器、須恵器（壺、甕、瓶など）である。その他の遺物として、繩文土器片、弥生土器片、紡錘車、支脚、砥石、石製模造品、陶器などが出土している。

第2節 基本層序の検討

調査区内（D3e6区）にテストピットを掘り、基本土層を観察した（第3図）。第1層は、表土と耕作土層で、暗褐色をしていて、厚さは5~20cmである。

第2層は、表土とソフトロームの間層で、褐色をしている。層厚は10~40cmである。

第3層は、褐色をしたソフトローム層である。層厚は10~30cmである。

第4層は、暗褐色をしたハードローム層である。層厚は5~20cmの黒色帶である。

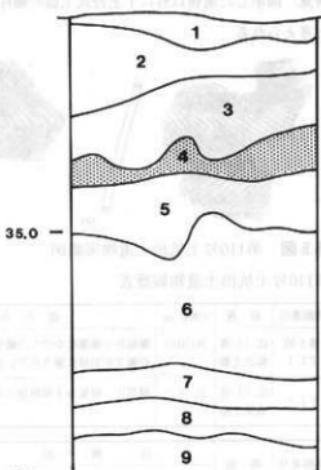
第5層は、明褐色をしたハードローム層である。層厚は10~30cmである。

第6層は、明褐色をしたハードローム層で粘土粒子を極少量含んでいる。層厚は20~40cmほどである。

第7層は、黄褐色をしたハードローム層である。層厚は20cmほどである。

第8層は、オリーブ褐色をした層で、粘土粒子を少量含んでいる。層厚は10cmほどである。

第9層は、淡黄色をした層で常緑粘土層である。なお、遺構は、2層上面で確認した。



第3図 基本土層図

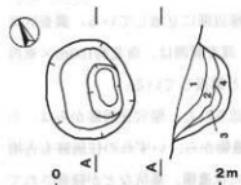
第3節 遺構と遺物

県立の査定 章 6 楽

1 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で、弥生時代の遺構は土坑1基が確認された。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

(1) 土坑



第4図 第110号土坑実測図

第110号土坑（第4図）

位置 調査区の中央部、C 3 h2区。
確認状況 第1号土塁の土層断面観察中に検出された。土壌構築際に、上部と北東部の一部は削平されたと考えられる。

重複関係 本跡の上位に第1号土塁が構築されていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸1.27m、短軸1.07mの楕円形である。

主軸方向 N - 15° - E

壁面 壁高は75cmで、緩やかに立ち上がる。

底面 凹凸があり、軟質である。

覆土 4層からなる。下層に粘土粒子や小砾、焼土が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 埋 色 ローム粒子少量

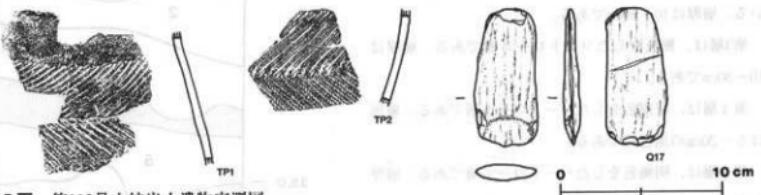
2 埋 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

3 埋 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

4 埋 色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・小砾少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量

遺物 弥生土器片11点、石製品（磨製石斧）1点が出土している。第5図TP1は壺形土器の頸部から胴部にかけての破片、TP2は壺形土器の胴部片、Q17は磨製石斧である。いずれも覆土下層から出土している。

所見 図示した遺物以外に十王台式土器の細片（頸部片）が出土していることから、時期は弥生時代後期後葉と考えられる。



第5図 第110号土坑出土遺物実測図

第110号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	動土・色調・焼成	備考
第5図 TP 1	広口壺 弥生土器	B(10.0)	頸部から胴部にかけての破片。頸部無文。胴部には附加条1種附加2条の縦文が羽状に施されている。	長石、赤色粒子 にぶい黄褐色、普通	5%、外面焼付着 P L 15
TP 2	広口壺 弥生土器	B(6.2)	胴部片。附加条1種附加2条の縦文が羽状に施されている。	長石 にぶい橙色、普通	5% P L 15

図版番号	種別	計測値				石質	現存率	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第5図Q17	磨製石斧	(8.4)	(3.9)	1.1	55.1	砂岩	98%	P L 16

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、古墳時代の遺構は竪穴住居跡17軒、土坑2基が確認された。これらの住居跡や土坑が確認された土星南側の調査区中央部には、広範囲にわたり薄い整地層が確認された。住居跡は、この整地層の下位から検出されている。整地層は、土層断面図中に「S層」として表示した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第6図）

位置 調査区の中央部、D 3 c2区。

重複関係 南西コーナー部を第101号土坑に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸5.80m、短軸5.50mの方形である。

主軸方向 N-50°-E

壁 壁高は20~30cmで、外傾して立ち上がる。東壁は整地により削平されている。

床 ローム質で若干の起伏が見られる。底の南側を中心に硬く踏みしめられた面がある。北壁中央部の壁から床面にかけて火熱を受け赤変している。東部の床面は、攪乱を受けている。

窓 北壁中央部からやや西寄りに位置し、壁を30cmほど掘り込み構築されている。袖部は砂粒と土を混ぜて作られている。天井部と東袖の一部は、整地により削平されている。規模は焚口部から煙道部までの長さ160cm、袖部最大幅150cmである。燃焼部は長径70cm、短径40cm、住居の主軸方向に長い楕円形で床面から5cmほど窪み、火熱を受け赤変している。

土層解説

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 1 にぶい褐色 | ローム粒子・砂粒・白色粘土粒子中量、燒土粒子少量 |
| 2 にぶい赤褐色 | ローム粒子・砂粒・白色粘土粒子・燒土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 3 赤褐色 | 燒土小ブロック・燒土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 赤褐色 | 燒土小ブロック・燒土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 赤褐色 | 燒土小ブロック・燒土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量 |

ピット 5か所（P 1～P 5）。P 1～P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1は径60cmの円形で、深さ80cmである。P 2～P 4は長径35~48cm、短径28~32cmの椭円形である。P 2の深さは55cm、P 3・P 4の深さは30cmである。P 1～P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 5は径20cmの円形、深さ33cmで南壁寄りの中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと思われる。

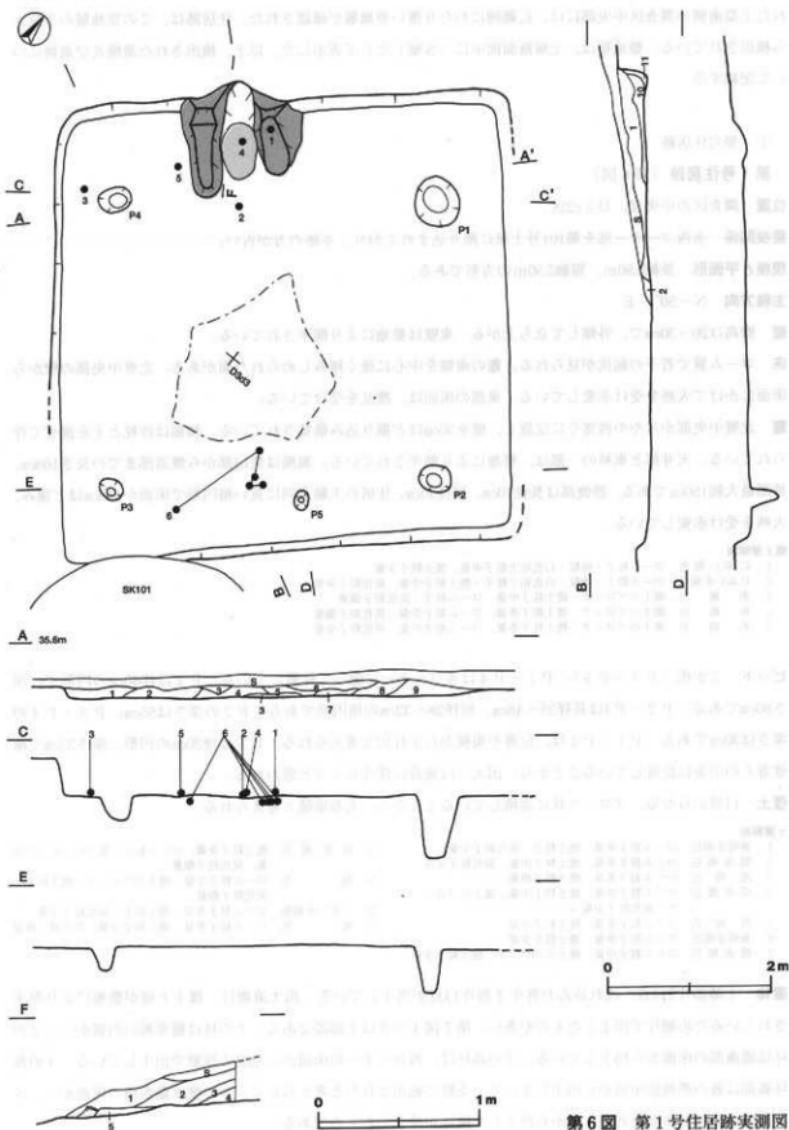
覆土 11層からなる。ブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

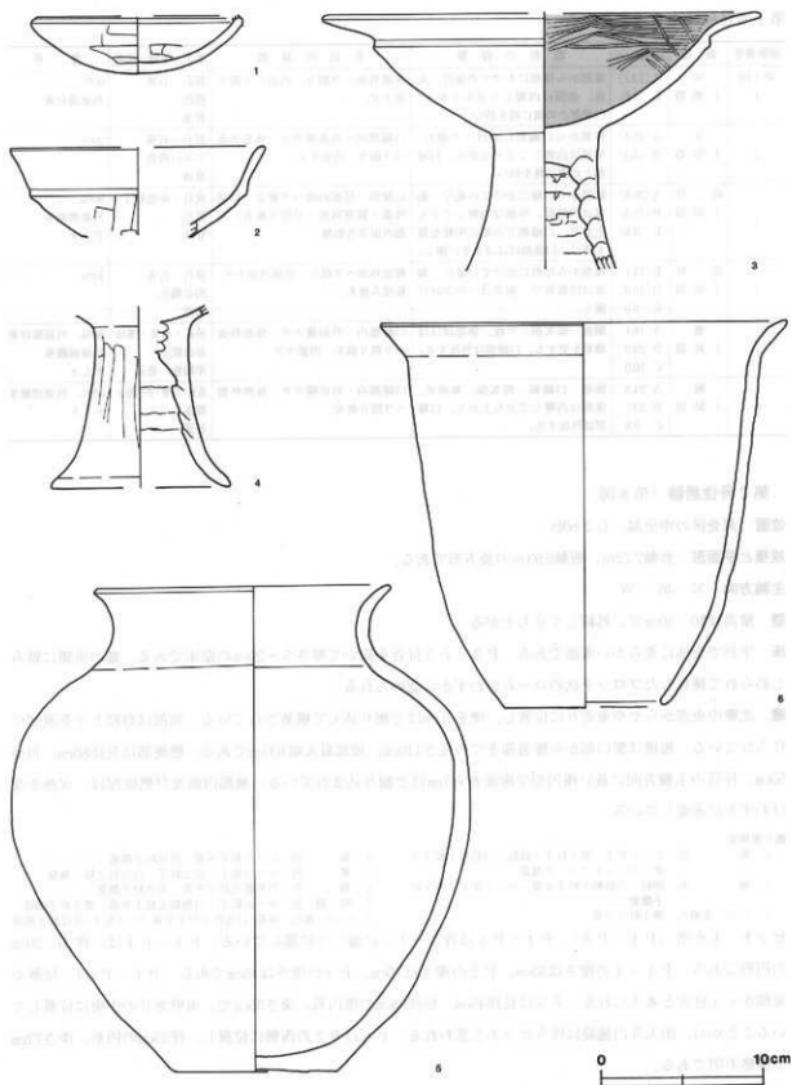
- | | | | |
|---------|-------------------------------|-----------|-------------------------------|
| 1 板崎赤褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子少量 | 8 墓赤褐色 | 燒土粒子多量、ローム粒子・燒土小ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 墓赤褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子中量、炭化粒子少量 | 9 赤褐色 | ローム粒子少量、燒土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 墓褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子微量 | 10 にぶい赤褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 墓赤褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子中量、燒土小ブロック・炭化粒子微量 | 11 赤褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 墓褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子少量 | | |
| 6 桶暗赤褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子少量 | | |
| 7 墓赤褐色 | ローム粒子中量、燒土小ブロック・燒土粒子少量 | | |

遺物 土師器片214点、流れ込んだ弥生土器片14点が出土している。出土遺物は、覆土上層が整地により削平されているため細片で出土したものが多い。第7図1~6は土師器である。1の壺は窓東袖の内側から、2の壺は窓南部の床面から出土している。3の高杯は、西コーナーの床面から逆位の状態で出土している。4の高杯脚部は窓の燃焼部中央から出土している。支脚に転用されたと考えられる。5の壺は窓西側の床面から、6の瓶は中央部と南壁付近の床面から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。竪は北壁中央部より西側に片寄って位置している。北壁中央部の壁や床面が火熱を受け赤変していることから、竪が移築された可能性がある。



第6図 第1号住居跡実測図



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

国版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	环 土 鍋 器	A [13.2] B (2.9)	底部から体部にかけての破片。丸底。体部は内縁して立ち上がり、口縁部との境に後を持つ。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ削り後ナデ。	長石・石英 橙色 普通	60% 外面焼付着
2	环 土 鍋 器	A [15.8] B (5.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内縁して立ち上がり、口縁部との境に後を持つ。	口縁部内・外側削りナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英 に赤い橙色 普通	20%
3	高 环 土 鍋 器	A [26.6] B [15.8] E (8.6)	脚部から口縁にかけての破片。脚部は円筒状。脚部は内縁して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な後を持つ。口縁部はほぼ水平に聞く。	口縁部・环部内面ヘラ磨き。环部外面・脚部外側ヘラ削り直有。环部内面黒色処理。	長石・赤色粒子 橙色 普通	80% 外面削離多 P L 8
4	高 环 土 鍋 器	B (11.1) D [10.9] E 9.0	脚部から环部にかけての破片。脚部は円筒状で、脚部はハの字状に開く。	脚部外側ヘラ削り。脚部内面ナデ。脚部内面研磨直有。	長石・石英 明赤褐色 普通	10%
5	壳 土 鍋 器	A 18.1 B 29.9 C 10.0	脚部一部欠損。平底。体部はほぼ球形を呈する。口縁部は外反する。	口縁部内・外側削りナデ。体部外面ヘラ削り直有、内面ナデ。	長石・石英・紫母 赤色粒子 赤褐色、普通	80%、外面焼付着 外面削離多 P L 8
6	瓶 土 鍋 器	A 24.8 B 23.7 C 9.8	体部・口縁一部欠損。無底式。体部は内縁して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外側削りナデ。体部外面ヘラ削り直有。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	80%，外面削離多 P L 8

第2号住居跡（第8図）

位置 調査区の中央部、D 2 b0区。

規模と平面形 長軸7.72m、短軸6.93mの長方形である。

主軸方向 N - 46° - W

壁 壁高は10~30cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で全体に柔らかい床面である。P 3・P 5付近を除いて厚さ5~20cmの貼床である。窓の南側に踏みしめられて硬化したブロック状のロームがわずかに認められる。

窓 北壁中央部からやや東寄りに位置し、窓を5cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と土を混ぜて作られている。規模は焚口部から煙道部までの長さ110cm、袖部最大幅100cmである。燃焼部は長径80cm、短径50cm、住居の主軸方向に長い梢円形で床面から7cmほど掘り込まれている。袖部内面及び燃焼部は、火熱を受けわずかに赤変している。

窓層解説

1 無	色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒・白色粘土粒子少 量、ローム小プロック微量	4 梅	色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 無	色	砂粒・白色粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒 子微量	6 梅	色	白色粘土粒子中量、炭化粒子微量
3 に赤い褐褐色	色	焼土粒子中量	7 明 梅	色	ローム粒子・白色粘土粒子少量、焼土粒子微量

ピット 6か所 (P 1~P 6)。P 1~P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1~P 4は、径20~30cm

の円形である。P 1~4の深さは55cm、P 2の深さは70cm、P 3の深さは45cmである。P 1~P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 5は長径45cm、短径38cmの梢円形、深さ35cmで、南壁寄りの中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと思われる。P 6はP 2の西側に位置し、径35cmの円形、深さ72cmで性格不明である。

覆土 5層からなる。上層は整地により削平されている。壁際にレンズ状の堆積が見られることから、自然堆積と考えられる。なお、6層は貼床の層である。

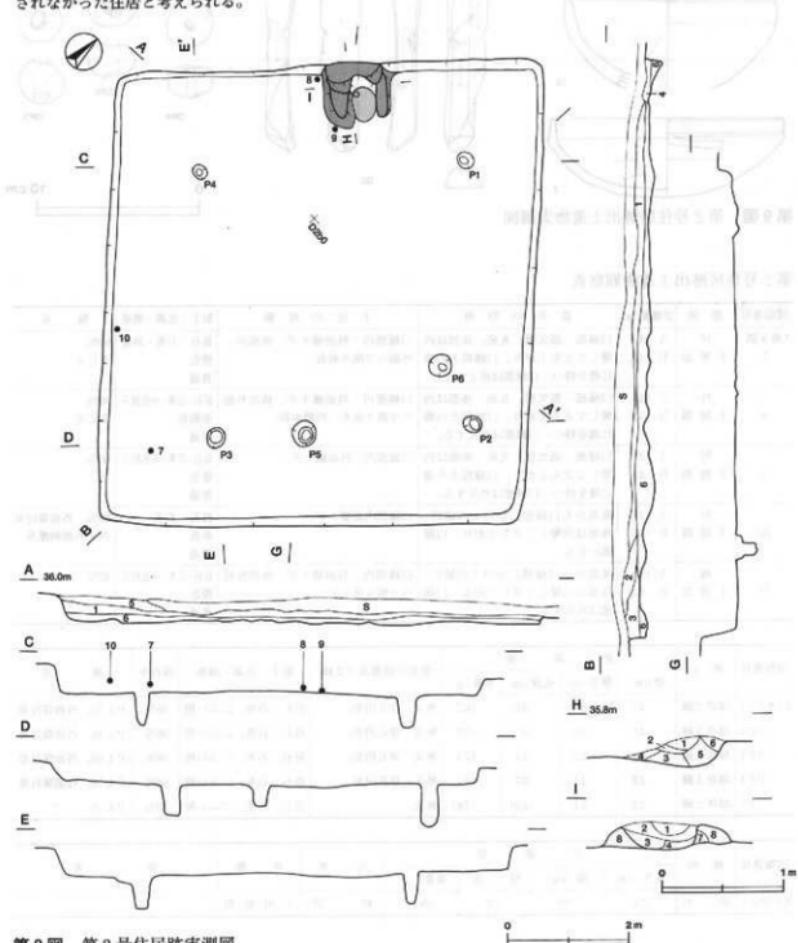
土層解説

1 單	梅	色	ローム小プロック・粒子中量	3 梅	色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
2 單	梅	色	ローム小プロック・粒子中量、焼土粒子・炭化粒 子少量	4 梅	色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

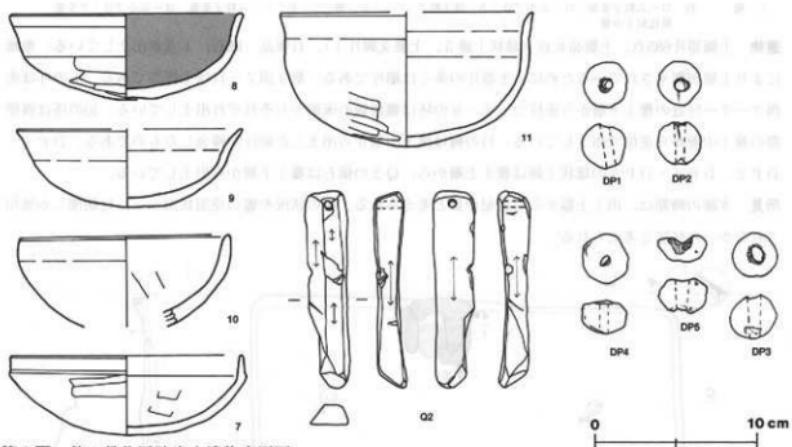
5 捺 色 ローム粒子多量、ローム小プロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片685点、土製品6点（球状土錐5、土製支脚片1）、石製品（砥石）1点が出土している。整地により上層が削平されているために、土器片の多くは細片である。第9図7～11は土師器である。7の壺は南西コーナー付近の覆土下層から正位で、8・9の壺は竈西側の床面からそれぞれ出土している。10の壺は西壁際の覆土中層から逆位で出土している。11の楕は覆土中層から出土した細片が接合したものである。D P 1・D P 2・D P 4・D P 5の球状土錐は覆土上層から、Q 2の砥石は覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。床の状況や竈の使用状況から、短期間しか使用されなかった住居と考えられる。



第8図 第2号住居跡実測図



第9図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 7	環 土師器	A 14.1 B 4.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に斜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り痕有。	長石・石英・砂粒 橙色 普通	90% P L 8
8	環 土師器	A 14.4 B 5.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に斜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側 ヘラ削り痕有。内面赤影。	長石・石英・赤色粒子 赤褐色 普通	90% P L 8
9	環 土師器	A [13.7] B 4.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に斜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	50%
10	環 土師器	A 12.8 B (5.5)	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内面横ナデ。	長石・石英 赤色 普通	60%、外側焼付着 内・外側剥離多
11	楕 土師器	A [15.4] B 8.2	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内側して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側 ヘラ削り後ナデ。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	40%

図版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第9図DP1	球状土錐	2.7	2.8	0.6	18.2	無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16、外側焼付着
DP2	球状土錐	2.6	2.6	0.7	15.2	無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16、外側焼付着
DP3	球状土錐	2.8	2.7	1.1	17.1	無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16、外側焼付着
DP4	球状土錐	2.8	2.1	0.7	14.7	無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16、外側焼付着
DP5	球状土錐	2.9	2.1	(1.0)	(7.6)	無文。	長石・石英、にぶい橙	45%	P L 16

図版番号	種別	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第9図Q 2	砥石	12.0	2.9	2.0	69.1	砂岩	4面使用	

第3号住居跡（第10図）

位置 調査区の中央部、D 3e1区。

重複関係 南西部で第5号住居跡を掘り込んでいる。また、北東コーナーの南側を第113号土坑に、北西コーナー部を第114号土坑に、南壁を第116号土坑と第1号溝に、北部床面を第111・112・115号土坑に掘り込まれている。したがって、本跡は第5号住居跡より新しく、第1号溝およびいずれの土坑よりも古い。

規模と平面形 長軸8.66m、短軸7.57mの長方形である。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は15~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅16cm、深さ6~8cmほどの規模を持ち、全周している。断面形はU字状をしている。

床 平坦である。炉の周辺に踏みしめられた硬化面が、ピットの内側まで広がっている。中央部の硬化面は、周辺部よりもわずかに高まっている。

炉 中央部やや北寄りに位置する。炉全体を第112号土坑に炉床まで掘り込まれており、火熱を受けて赤変した部分がわずかに認められる。

ピット 7か所（P 1~P 7）。P 1~P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1~P 3は径40cmの円形、P 4は径20cmの円形で、深さはいずれも80cmである。P 4は第114号土坑の底面から検出されている。P 1~P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 5は径37cmの円形、深さ25cm、P 6は径40cmの円形、深さ25cmである。P 5はP 1とP 2の間から、P 6はP 3とP 4の間から検出されていることから、柱穴の可能性がある。P 7は南西コーナー壁際にあり、径40cmの円形、深さ23cmである。性格は不明である。

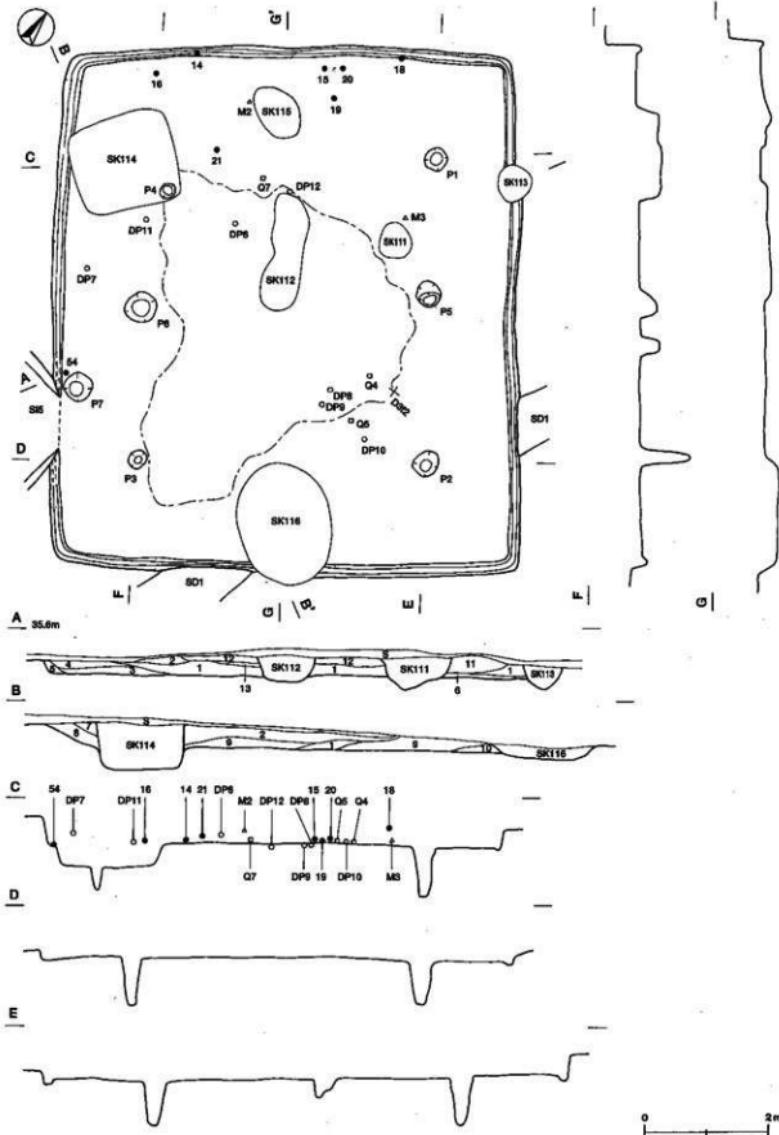
覆土 13層からなる。上層は整地により削平されている。1~10層は、レンズ状に堆積していることから自然堆積である。11~13層は黒褐色を呈し、人為的な縛まりが見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

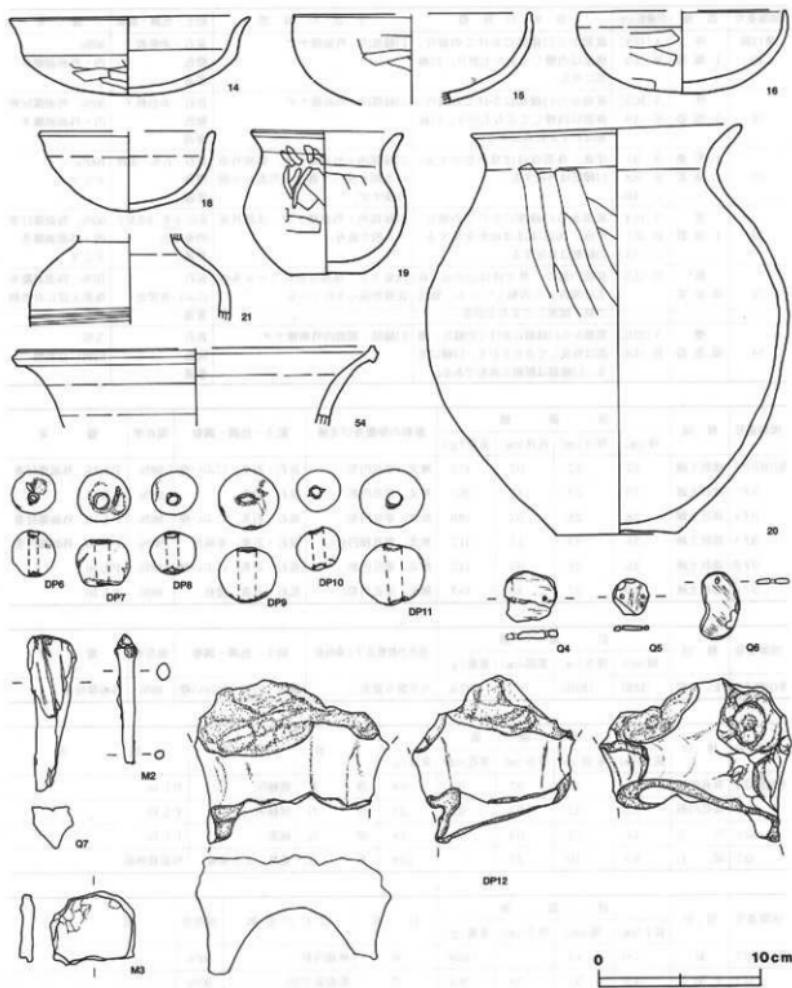
1 極	色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 極	色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 極	色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量	9 極	色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 極	色 ローム小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	10 極	色 ローム粒子・炭化粒子少量
4 極	色 ローム粒子少量	11 極	暗 細色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
5 極	色 ローム粒子・焼土粒子少量	12 暗 細色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
6 極	色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	13 暗 細色	ローム粒子少量、縛まり有
7 極	色 ローム粒子微量		ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量、縛まり有

遺物 土師器片1,174点、須恵器1点、土製品7点（球状土錐6、土製支脚片1）、石製品（砾石）1点、石製模造品（双孔円盤）2点、不明鉄製品2点が出土している。整地により上層が削平されているため、土器片の多くは細片である。第11図14~16、18~20は土師器、21・54は須恵器である。14~16の壺と20の甕は北壁際の床面から、18の壺は北壁際の覆土中層から、それぞれ出土している。19の小形甕は北壁寄りの床面から横位で出土している。21の甕はP 4北側の覆土下層から、54の甕はP 7北側の床面からそれぞれ出土している。D P 6~D P 11は球状土錐、D P 12は土製支脚片である。D P 6は西部の覆土下層から、D P 7・D P 11は西部の覆土下層から、D P 8・D P 9・D P 10はQ 4・Q 5の双孔円盤とともにP 2西側の床面から出土している。D P 12の土製支脚片は炉跡北部の床面から、Q 7の砥石とM 2の鉄釘は北壁中央寄りの床面から、M 3の鉄製品はP 2西側の床面からそれぞれ出土している。Q 6の勾玉は、覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第10図 第3号住居跡実測図



第11図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 14	坏 土 鏽 器	A 1.47 B 4.7	口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	長石・石英・砂粒 橙色 普通	70%、外面焼付着 内・外面剥離多 P L 8
15	坏 土 鏽 器	A [14.6] B (5.5)	底部から口縁部にかけての底片。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側ヘラ削り直す。	長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	40% 内・外面剥離多

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11回 16	环 土器	A [12.8] B 5.0	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内側して立ち上がり。口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・赤色粒子 橙色 普通	40% 内・外面剥離多
18	环 土器	A [10.5] B 4.9	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内側して立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・赤色粒子 橙色 普通	50%、外面剥付着 内・外面剥離多
19	小形 土器	A 9.1 B 8.8 C 4.6	平底。体部はほぼ球形を呈する。 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側 ヘラ削り痕へラ磨き、内面ヘラ削 り後ナデ。	長石・石英・雲母 橙色 普通	100% P L 9
20	裏 土器	A 16.4 B 25.1 C 7.3	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部はほぼ球形を呈する。 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側 ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	60%、外面剥付着 内・外面剥離多 P L 8
21	黑 須恵器	B (5.5)	体部の破片。最大径は12.5cm。基 底部から内傾していき、腹部 で強く屈曲して立ち上がる。	内面ナデ。体部中位に5~6本の 沈線が施されている。	長石 にぶい黄橙色 普通	10%、外面剥離多 体部上位に自然釉 P L 9
54	黑 須恵器	A [22.0] B (4.8)	腹部から口縁部にかけての破片。腹 部は外反して立ち上がり。口縁部に至 る。口縁部は断面三角形である。	口縁部・腹部内外面横ナデ。	長石 灰色 普通	5% 内面に自然釉

図版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第11回DP 6	球状土器	2.7	2.7	0.7	17.5	無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16、外面剥付着
DP 7	球状土器	3.3	2.8	1.0	26.7	無文。穿孔円形。	長石、橙色	98%	P L 16
DP 8	球状土器	2.8	2.6	0.7	18.0	無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16、外面剥付着
DP 9	球状土器	3.6	3.3	1.1	41.7	無文。穿孔楕円形。	長石・石英、赤褐色	98%	P L 16、外面剥付着
DP 10	球状土器	2.6	2.6	0.7	14.7	無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16
DP 11	球状土器	4.0	3.7	1.0	45.7	無文。穿孔円形。	長石・石英、橙色	98%	P L 16

図版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		幅(cm)	厚さ(cm)	基部(cm)	重量(g)				
第11回DP 12	支脚	(12.0)	(10.0)	—	637.6	ヘラ削り痕有。	長石・石英、にぶい橙	98%	外面剥付着

図版番号	種別	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	穿孔(cm)			
第11回Q 4	双孔円板	3.1	3.2	0.5	0.2	6.8	滑石	暗緑灰 P L 16
Q 5	双孔円板	2.2	2.2	0.3	0.2	2.1	滑石	暗緑灰 P L 16
Q 6	勾玉	4.1	2.5	0.4	0.2	7.8	滑石	緑黒 P L 16
Q 7	砥石	9.5	3.0	2.7	—	70.9	砂岩	被熱により赤変。 外面被熱痕

図版番号	種別	計測値				材質	器形の特徴	現存率	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第11回M 2	鉢	(7.8)	1.4	—	(16.9)	鐵	断面円形。	80%	
M 3	不明品	(4.5)	5.2	0.8	(58.0)	鐵	断面長方形。	90%	

第4号住居跡（第12・13回）

位置 調査区の中央部, D 2 e9区。

重複関係 東北コーナー部を第109号土坑に、中央部を第130・131号土坑に掘り込まれていることから、いずれの土坑よりも古い。

規模と平面形 長軸5.22m、短軸4.95mの方形である。

主軸方向 N - 26° - W

壁 壁高は17~30cmで、外傾して立ち上がる。

床 凹凸である。南側のピット周辺に踏みしめられた硬化面が広がっている。

竈 北壁中央部に位置している。袖部は砂粒と土を混ぜて作られている。天井部は整地により削平され、さらに中央部は擾乱され遺存していないため煙道部は確認できない。規模は焚口部から北壁までの長さ90cm、袖部最大幅90cmである。燃焼部は径35cmほどの円形で床面から3cmほど窪み、火熱を受け赤変している。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P4は各コーナーに偏って位置している。P1~P4は径28~43cmの円形、深さ55~69cmである。P1~P4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P5は径28cmの円形、深さ25cmで、南壁寄りの中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと思われる。

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

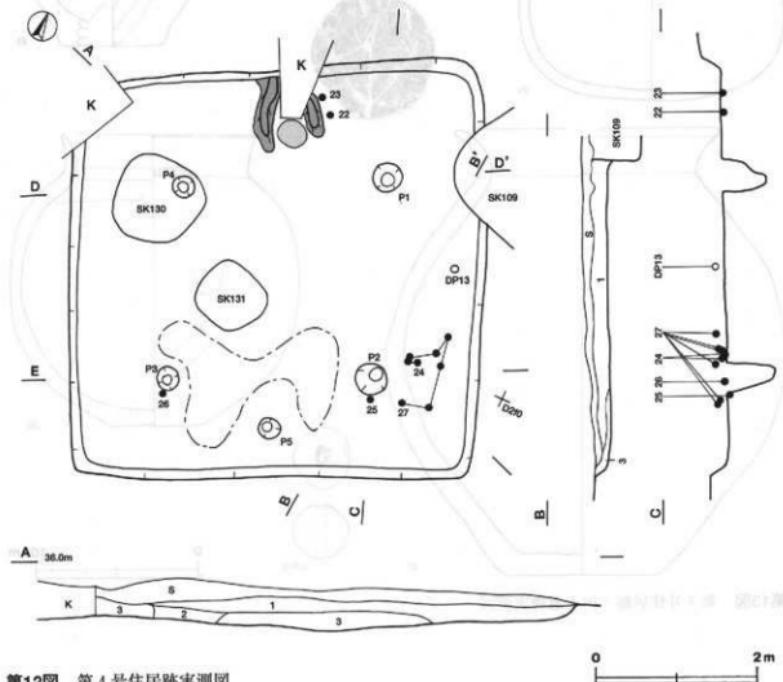
土器解説

- | | | | |
|---|-------|---------|---------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量 | 燒土粒子微量 |
| 2 | にぶい褐色 | ローム粒子少量 | 燒土粒子・白色粘土粒子微量 |

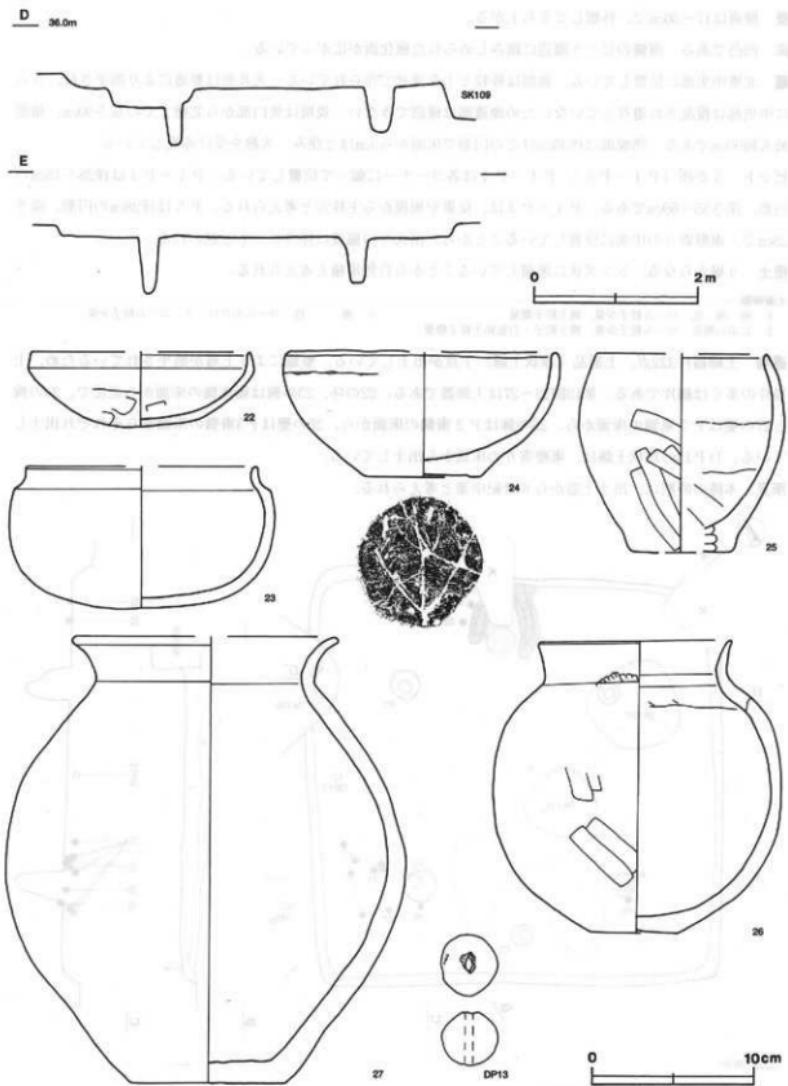
- | | | |
|---|----|------------------|
| 3 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
|---|----|------------------|

遺物 土器片322点、土製品(球状土錐)1点が出土している。整地により上層が削平されているため、土器片の多くは細片である。第13図22~27は土器器である。22の壺、23の楕、24の楕と27の壺はP2東側の床面から、25の鉢はP2南側の床面から、26の壺はP3南側の床面からそれぞれ出土している。D P13の球状土錐は、東壁寄りの床面から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第12図 第4号住居跡実測図



第13図 第4号住居跡・出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13回 22	环 土器	A [13.4] B 4.6	底部から口縁部にかけての破片。 丸底。体部は内厚して立ち上がり, 口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部内外 面ヘラ削り後ナギ。	長石・赤色粒子 橙色 普通	70%, 外面焼付量 PL 8
23	碗 土器	A [14.0] B 8.7	底部から口縁部にかけての破片。 平底。 体部は内厚して立ち上がり, 口縁部と 底に縁を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナギ。底部ヘラ 削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	60%, 外面焼付量 内・外面剥離量 PL 9
24	碗 土器	A [16.2] B 7.6 C 7.1	底部から口縁部にかけての破片。 平底。 体部は内厚して立ち上がり, 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナギ。体部内外 面ヘラ削り痕有。底部木葉底。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	内・外面剥離量 PL 9
25	鉢 土器	A [10.4] B 12.2 C [6.4]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。 体部は内厚して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナギ。体部外側 ヘラ削り痕有。	長石・石英・紫母 赤色粒子 橙色, 普通	45%, 外面焼付量 内・外面剥離量
26	甕 土器	A 11.8 B 17.9 C 5.4	口縁部一部欠損。平底。体部はほ ぼ球形を呈する。口縁部はわずか に外反する。	口縁部内・外面および体部外側ハ ケ調整後。ナギ。	長石・石英・紫母 赤色粒子 橙色, 普通	100% PL 9
27	甕 土器	A [16.0] B 27.5 C 9.2	底部から口縁部にかけての破片。 平底。 体部はほぼ球形を呈する。 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナギ。	長石・石英・紫母 赤色粒子, 黄褐色 普通	60%, 外面焼付量 内・外面剥離量 PL 9

図版番号	種別	計測値			器形の特徴及び文様無し。	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)				
第13回D 21	球状土錠	3.6	3.3	1.1	40.2	穿孔梢円形。	長石・赤色粒子, 赤褐色	98%

第5号住居跡（第14図）

位置調査 区の中央部, D 2 g0区。

重複関係 東北コーナー部を第3号住居に、南西コーナー部を第121号土坑に、中央部を東西に第1号溝に掘り込まれている。したがって、本跡は第3号住居跡、第121号土坑、第1号溝よりも古い。

規模と平面形 一辺5.25mの方形である。

主軸方向 N - 10° - E

壁 壁高は5~25cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。炉の周辺を中心に踏みしめられた硬化面が広がっている。

炉 中央部やや北寄りに位置する。炉床面は長径60cm、短径28cm、住居の主軸方向に長い梢円形で床面から4cmほど隆起し、火熱を受け赤変している。

炉土層解説 1 層 色 赤化粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所（P 1～P 7）。P 1・3は径28cmの円形、深さはP 1が68cm、P 3が93cmである。P 2は長径38cm、短径30cmの梢円形、深さ43cmである。P 1～P 3は位置や規模から柱穴と考えられる。P 4は径40cmの円形、深さ25cm、P 5は長径38cm、短径28cmの円形、深さ55cmである。P 4は南壁寄りの中央付近に位置することから、出入り口施設に伴うピットの可能性がある。P 5の性格は不明である。

覆土 2層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

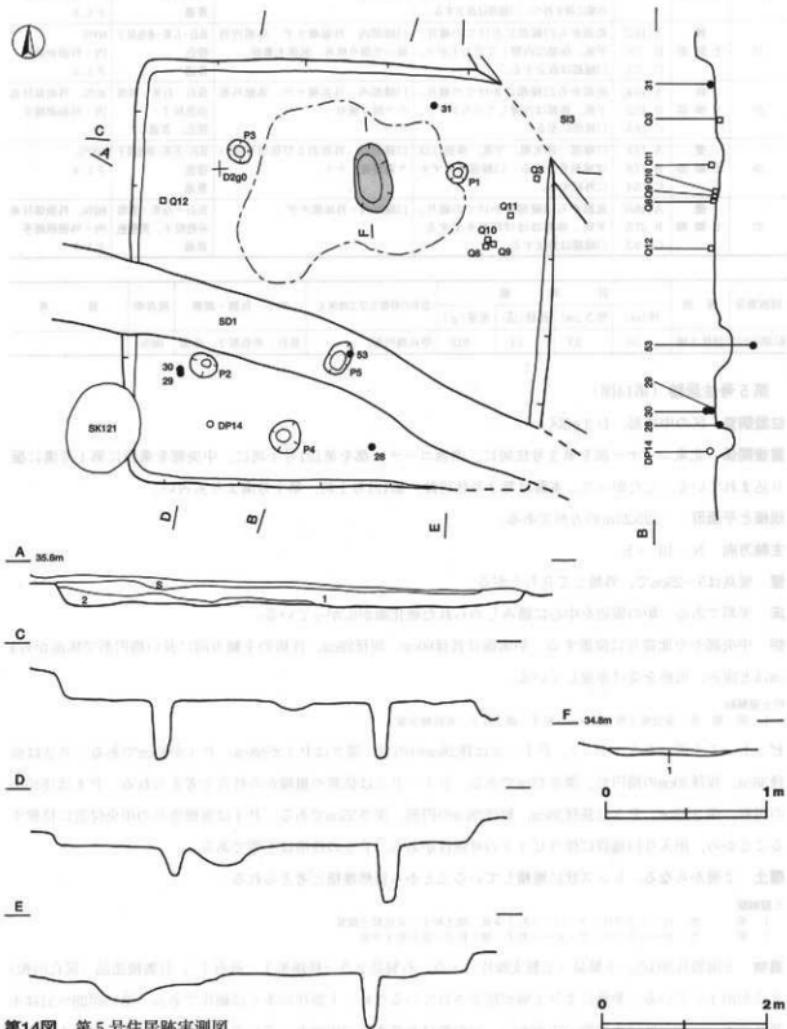
土層解説 1 层 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 层 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

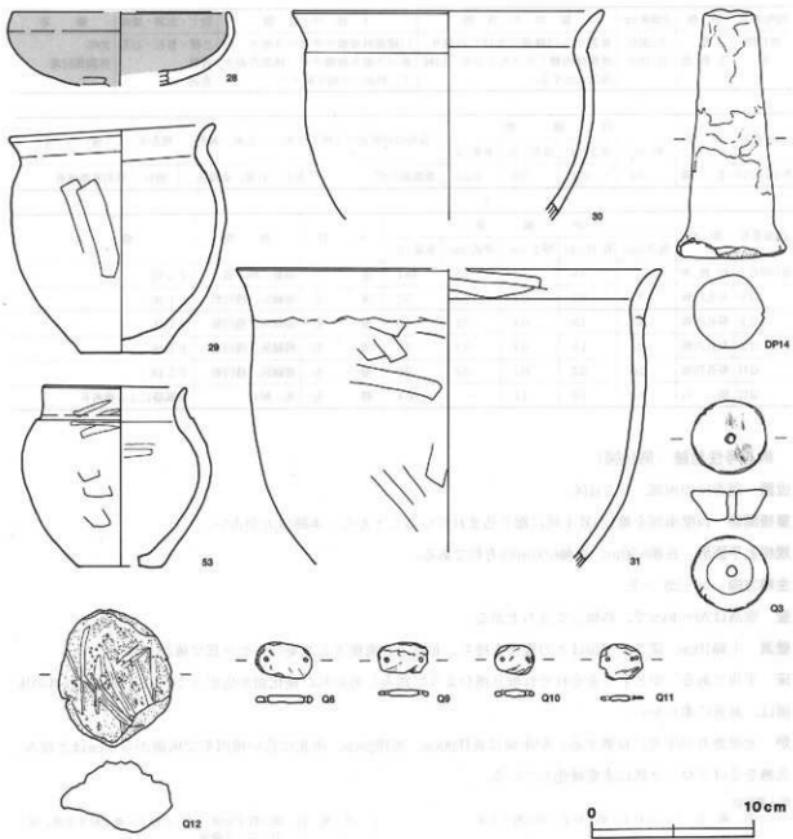
遺物 土器片303点、土製品（土製支脚片）1点、石製品2点（紡錘車1、磁石1）、石製模造品（双孔円板）4点が出土している。整地により上層が削平されているため、土器片の多くは細片である。第15回28~31は土器片である。28の環は南壁際の床面から、31の瓶は北壁寄りの床面からそれぞれ出土している。29の小形甕と

30の甕は入子になって、DP14の支脚とともに南西コーナー付近の覆土下層から出土している。53の小形甕はP5中から逆位の状態で出土している。Q12の砥石は西壁寄りの床面から、Q3の筋鉤車、Q8～Q11の双孔円板は炉と東壁の間の床面下からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。第3号住居跡と重複関係にあるが、遺物からそれほどの時期差はないと考えられる。



第14図 第5号住居跡実測図



第15図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 28	壺 土器	A [13.3] B (4.5)	底部から口縁部にかけての破片。 丸底。体部は内擣して立ち上がり、 口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。体部内・外面赤彩。	長石・石英 橙色 普通	30% 内・外面剥離多
29	小形甕 土器	A 12.5 B 13.7 C 5.0	体部・口縁一部欠損。体部は内 擣して立ち上がり、口縁部は外反 する。	口縁部内面横ナデ。	長石・石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	90% 内・外面剥離多 P L 9
30	甕 土器	A 18.9 B (12.8)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内擣して立ち上がり、口縁 部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	40%、外面剥離有 内・外面剥離多
33	小形甕 土器	A 8.7 B 11.5 C 5.0	平底。体部は内擣気味に立ち上 がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き。内面ヘ ラ削り後擦ナデ。体部内面ナデ、外側 ヘラ削り後擦ナデ。底面焼成後穿孔。	小標・長石・石英 灰褐色 普通	100% P L 9

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴		手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
			A(26.0)	B(18.2)			
第15図 31	瓶 土瓶器		体部から口縁部にかけての突起。 体部は内側して立ち上がり、口様部は外反する。		口縁部外面削り後ハラ磨き、内面ハラ削り後横ナガ。体部内面ナゲ、外側ハラ削り後ナガ。	小窓・長石・石英 橙色 普通	20% 外面漆付着

図版番号	種別	計測値			器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		幅(m)	高さ(cm)	基部(cm)				
第15図DP14	支脚	4.4	15.3	6.6	433.5	基部面平坦。	長石・石英、赤褐色	98% 外面被熱痕有

図版番号	種別	計測値					石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	穿孔(cm)	重量(g)			
第15図Q3	纺錐車	—	4.6	1.8	0.6	48.1	滑石	側面に削り痕。	P L16
Q8	双孔円板	3.5	2.0	0.4	0.2	5.7	滑石	暗緑灰、椎円形	P L16
Q9	双孔円板	3.1	1.9	0.4	0.2	4.0	滑石	暗緑灰、椎円形	P L16
Q10	双孔円板	2.4	1.8	0.4	0.2	3.0	滑石	暗緑灰、椎円形	P L16
Q11	双孔円板	2.6	2.2	0.4	0.2	3.5	滑石	暗緑灰、椎円形	P L16
Q12	底石	8.4	7.0	4.1	—	66.8	輕石	灰、輕石	金属器による擦痕有

第6号住居跡（第16図）

位置 調査区の南部, D 3 j1区。

重複関係 西壁南部を第125号土坑に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸6.50m, 短軸6.00mの方形である。

主軸方向 N - 28° - E

壁 壁高は20~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10cm, 深さ6~7cmほどの規模を持ち、北壁下・東壁下と北東コーナー一部で確認された。

床 平坦である。炉とP5をそれぞれ取り囲むように踏みしめられた硬化面が広がっている。硬化面以外の床面は、非常に柔らかい。

炉 北壁寄りの中央に位置する。炉床面は長径90cm, 短径55cm, 南北に長い椎円形で床面から5cmほど窪み、火熱を受けブロック状に赤変硬化している。

炉土層解説
1 晴褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・燒土粒子少量、燒土小ブロック微量

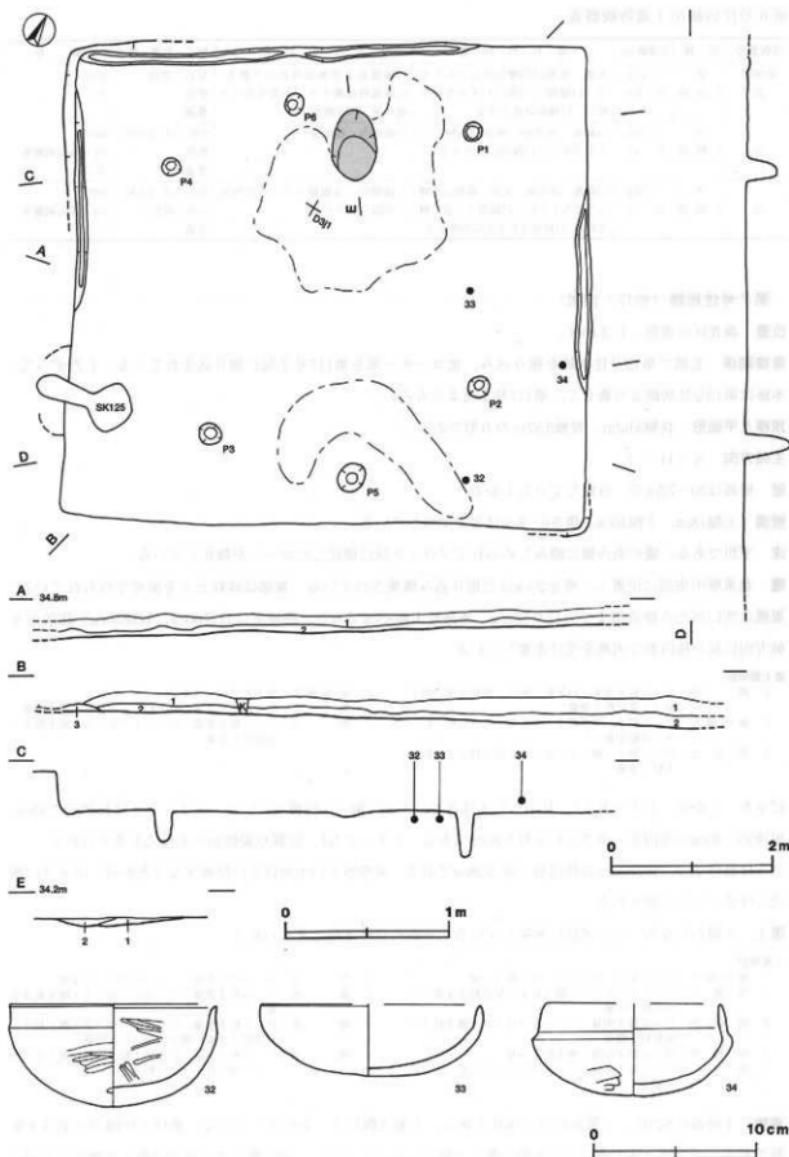
ピット 6か所(P1~P6)。P1~P4は各コーナーに偏って位置し、いずれも径25cmの円形である。深さはP1が54cm, P2が37cm, P3が57cm, P4が40cmである。P1~P4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P5は径33cmの円形、深さ34cmで南壁寄りの中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと思われる。P6は径23cmの円形、深さ66cmで北壁と炉の中間に位置している。性格は不明である。

覆土 3層からなる。水平に堆積し、人為的な締まりもないことから自然堆積と考えられる。

土層解説
1 桃色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 桃色 ローム小ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量
3 桃色 ローム粒子多量

遺物 土師器片78点が出土している。第16図32~34は土師器である。32の坏は南東コーナー寄りの床面から逆位で、33の坏は東壁寄りの床面から正位で、34の坏は東壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第16図 第6号住居跡・出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

出典番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16号 32	壺 土師器	A 12.7 B 6.3	丸底。体部は内縁丸味に立ち上がり、口縁部との境にわずかな棱を持つ。口縁部は直立する。	口縁部および体部内面へラ磨き。 口縁部外面横ナデ、体部外面へラ磨り後、ヘラ磨き。	長石・雲母 橙色 普通	95% P L 9
33	壺 土師器	A [13.5] B 4.4	口縁部一部欠損。体部は内縁して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	60% 内・外面剥離多 P L 9
34	壺 土師器	A [10.8] B 5.6	口縁部一部欠損。丸底。体部は内縁して立ち上がり、口縁部との境に後を持つ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外表面へラ磨り後ナデ。	長石・石英・赤色粒子 に赤い褐色 普通	60% 内・外面剥離多

第7号住居跡（第17・18図）

位置 調査区の南部、E 2 c6区。

重複関係 北部で第13号住居跡を掘り込み、北コーナー部を第117号土坑に掘り込まれている。したがって、本跡は第13号住居跡より新しく、第117号土坑よりも古い。

規模と平面形 長軸5.62m、短軸5.52mの方形である。

主軸方向 N-41°-E

壁 壁高は30~72cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅18cm、下幅10cm、深さ6~8cmほどで全周している。

床 平坦である。竈の南西側に踏みしめられてブロック状に硬化したロームが散在している。

竈 北東壁中央部に位置し、壁を20cmほど掘り込み構築されている。袖部は砂粒と土を混ぜて作られている。規模は焚口部から煙道部までの長さ120cm、袖部最大幅85cmである。燃焼部は長径60cm、短径50cm、住居の主軸方向に長い梢円形で火熱を受け赤変している。

竈土層解説

1	褐 色	ローム粒子多量、白色粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	暗 赤 褐 色	焼土大ブロック多量
2	極 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒少量	5	褐 色	ローム粒子多量、焼土粒子・白色粘土粒子少量
3	黒 褐 色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・白色粘土粒子少量	6	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所（P 1～P 5）。P 1～P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1～P 4は長径65~80cm、短径35~40cmの梢円形、深さはいずれも80cmである。P 1～P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。

P 5は長径35cm、短径25cmの梢円形、深さ28cmである。南壁寄りの中央付近に位置することから、出入り口施設に伴うピットと思われる。

覆土 9層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

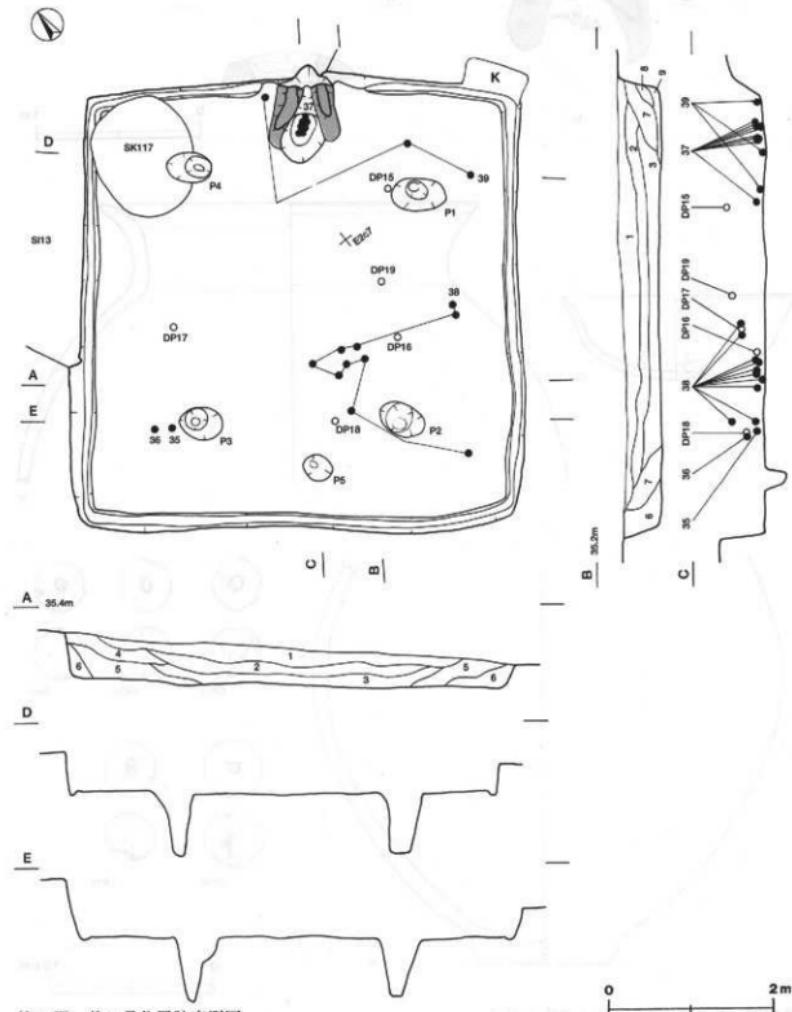
土層解説

1	板 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
2	黑 褐 色	ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子少量	7	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
3	暗 褐 色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
4	暗 褐 色	ローム粒子中量、焼土粒子少量	9	褐 色	ローム粒子多量、白色粘土粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量			

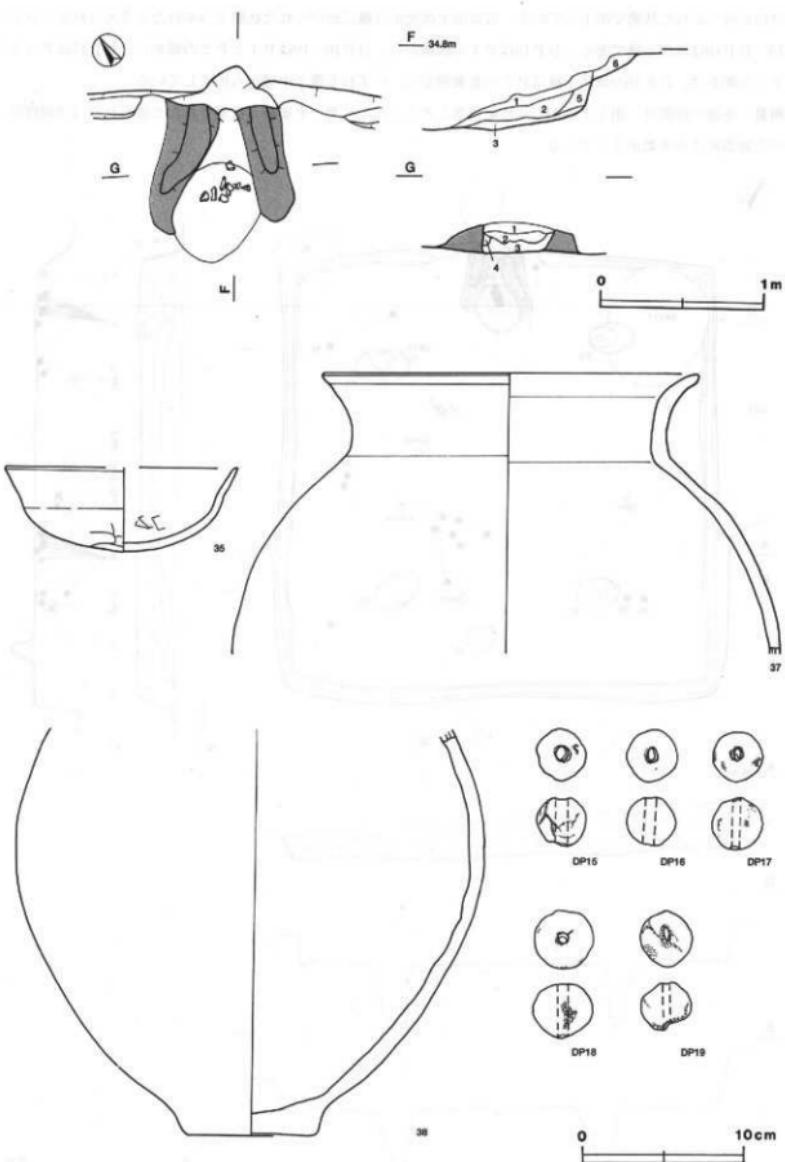
遺物 土師器片823点、土製品6点（球状土錘5、土製支脚片1）が出土している。第18・19図35~39は土師器である。35の壺と36の甕はP 3西側の覆土下層から出土している。38の甕はP 2周辺の覆土下層から中層にかけて、39の甕は東コーナーから竈にかけての床面から出土した細片が接合したものである。37の甕は竈の掛

け口からつぶれた状態で出土している。37は出土状況から竈にかけられた状態でつぶれたと考えられる。D P 15～D P 19は球状土錐である。D P 15はP 1の西側から、D P 16・19はP 1とP 2の間から、D P 17はP 3とP 4の間から、D P 18の球状土錐はP 5の北東側から、いずれも覆土中層から出土している。

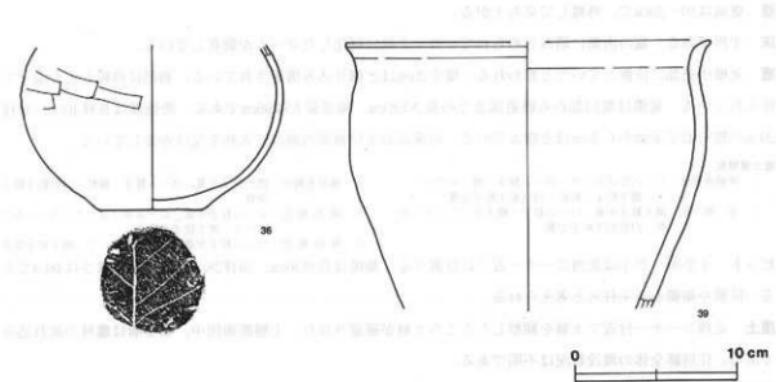
所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。覆土上層から投棄されたと思われるほどの同時期の土師器細片が多数出土している。



第17図 第7号住居跡実測図



第18図 第7号住居跡・出土遺物実測図



第19図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

団版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 35	壺 土器	A[14.1] B 5.1	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境にわずかな棱を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面削ナデ。	長石・石英・赤色粒子 褐色 普通	60% 内・外面剥離多 P L 9
第19図 36	甕 土器	B(10.1) C 6.2	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内凹して立ち上がる。	体部内・外面ヘラ削り後ナデ。	長石・石英・雲母 赤褐色 普通	45% 外面剥付有 P L 9
第18図 37	甕 土器	A 22.8 B(17.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内凹して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 ヘラ削り痕有。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	30%、外面剥付有 内・外面剥離多
38	甕 土器	B(25.1) C 7.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内凹して立ち上がる。	体部外ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	40%、外面剥付有 内・外面剥離多
第19図 39	瓶 土器	A[22.4] B(16.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内凹して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 ヘラ削り痕有。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	30%、外面剥付有 内・外面剥離多

団版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
DPI5	球状土錐	3.0	2.9	0.9	22.5	無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16、煤付有
DPI6	球状土錐	3.0	2.9	0.9	25.1	無文。穿孔円形。	長石、にぶい褐色	98%	P L 16
DPI7	球状土錐	3.1	3.2	0.8	27.8	無文。穿孔椭円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	P L 16
DPI8	球状土錐	3.6	3.4	0.6	39.6	無文。穿孔円形。	長石・赤褐色	98%	P L 16
DPI9	球状土錐	3.2	2.9	0.4	24.2	穿孔椭円形。	長石・石英、赤褐色	98%	P L 16

第8号住居跡（第20図）

位置 調査区の中央部、C 3 i3区。

重複関係 第1号土壙構築の際に東部に覆土上層が削平されていることから、第1号土壙よりも古い。

規模と平面形 確認できた規模は南北3.74m、東西3.05mで平面形は不明である。

主軸方向 N -45° - W

壁 壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。竈の南側に踏みしめられてブロック状に硬化したロームが散在している。

竈 北壁中央部に位置していたと思われる。壁を20cmほど掘り込み構築されている。袖部は砂粒と土を混ぜて作られている。規模は火口部から煙道部までの長さ120cm、袖部最大幅95cmである。燃焼部は長径40cm、短径20cmの楕円形で床面から5cmほど窪んでいる。火床面および袖部内面は、火熱を受け赤変している。

竈層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------------|---------|----------------------------------|
| 1 極暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック | 3 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・砂粒・白色粘土粒子少量 |
| 2 赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・砂粒・白色粘土粒子少量 | 4 暗赤褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量 |
| 5 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量 | | |

ピット 1か所。P 1は北西コーナー近くに位置する。規模は長径36cm、短径28cmの楕円形、深さは48cmである。位置や規模から主柱穴と考えられる。

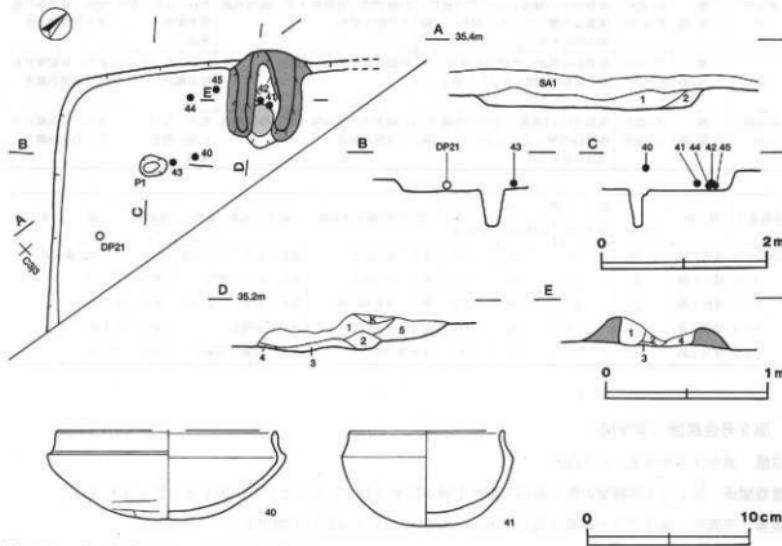
覆土 北西コーナー付近で土層を観察したところ2層が確認された。土層断面図中、第2層は竈材の流れ込みである。住居跡全体の埋没状況は不明である。

土層解説

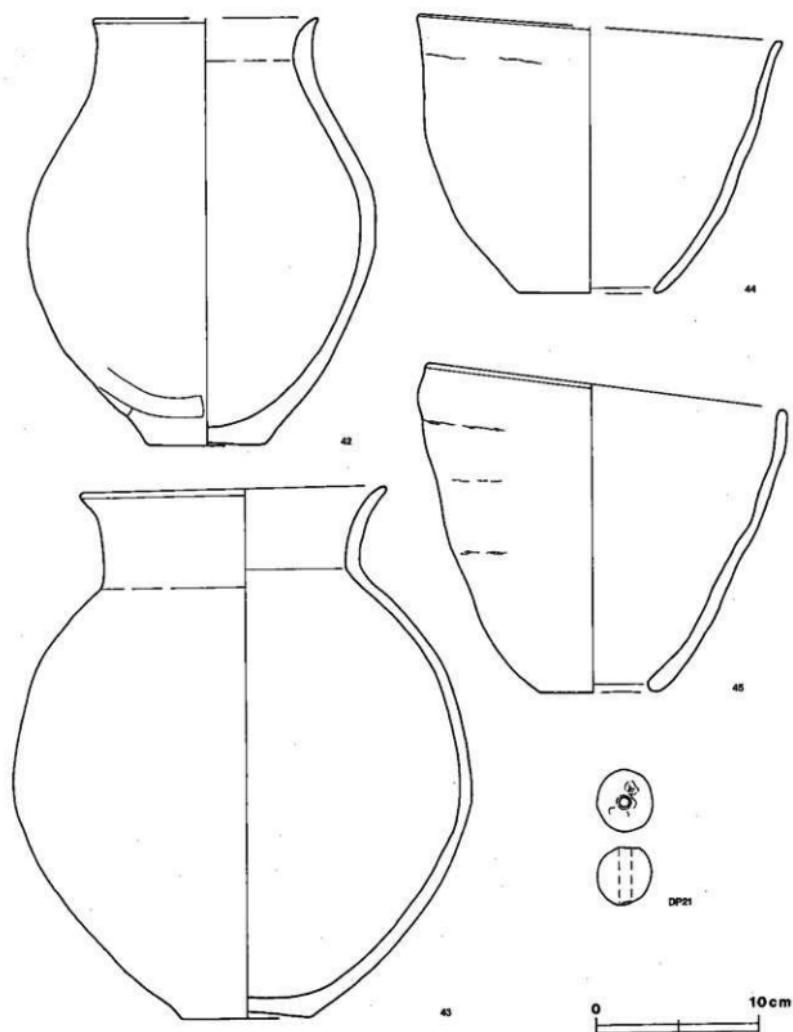
- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量 | 2 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・白色粘土粒子多量、ローム粒子少量 |
|-------|-------------------------|-------|-------------------------------|

遺物 土師器片159点、土製品(球状土錐)1点が出土している。第20・21図40~45は土師器である。40の壺は竈南側の覆土中層から、43の壺は竈南側の覆土下層から、41の碗、42の壺は竈の掛け口付近からそれぞれ出土している。44・45の瓶は、いずれもつぶれた状態で竈西袖西側の覆土下層から、D P 21の球状土錐はP 1南東側の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第20図 第8号住居跡・出土遺物実測図



第21図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 40	环 土器	A [13.4] B 5.5	底部から口縁部にかけての破片。丸底。 体部は内凹して立ち上がり、口縁部と の境に窪を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	美石・石英・赤色粒子 褐色 普通	70% 内・外面剥離多 P L 10

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20回 41	輪 土 師 器	A 9.4 B 5.8	体部・口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	90% 内・外面剥離多 P L 9
		A [13.6] B 26.3 C 7.1	口縁部一部欠損。平底。体部はほぼ球形を呈する。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英 にぶい褐色 普通	80%、外面剥付着 内・外面剥離多 P L 10
第21回 42	甕 土 師 器	A 18.5 B 32.8 C 8.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部はほぼ球形を呈する。口縁部は直立し、端部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英 橙色 普通	40%、外面剥付着 内・外面剥離多 P L 10
		A [22.3] B 17.3 C 8.7	底部から口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部に至る。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	70%、外面剥付着 内・外面剥離多 P L 10
第22回 45	甕 土 師 器	A [21.8] B 20.4 C 7.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	80%、外面剥付着 内・外面剥離多 P L 10

図版番号	種別	計測値			器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)				
第21回DPL	球状土瓶	3.4	3.5	0.8	40.9	無文。穿孔円形。	長石、橙色	98%

第9号住居跡（第22・23回）

位置 調査区の中央部、D 2 h7区。

規模と平面形 長軸5.84m、短軸5.76mの方形である。

主軸方向 N -26° - W

壁 壁高は18~35cmで、外傾して立ち上がる。

床 ローム質で平坦である。竈の南側に硬く踏みしめられた面がある。南部床面には、炭化物が散在している。

竈 北壁中央部に位置し、壁を12cmほど掘り込み構築されている。袖部は砂粒と土を混ぜて作られている。天井部の一部は、整地により削平されている。規模は焚口部から煙道部までの長さ60cm、袖部最大幅90cmである。

燃焼部は長径55cm、短径28cm、住居の主軸方向に長い楕円形で床面から12cmほど窪んでいる。袖内面および火床面は、火熱を受け赤変している。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、砂粒・白色粘土粒子微量	3 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・砂粒少量、燒土粒子・白色粘土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、燒土中ブロック・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子・砂粒・白色粘土粒子微量

ピット 5か所（P 1～P 5）。P 1～P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1は長径31cm、短径25cmの円形、深さ41cmである。P 2～P 4は径20~32cmの円形である。深さはP 2が63cm、P 3が85cm、P 4が32cmである。P 1～P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 5は径28cmの円形、深さ22cmで南壁寄りの中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと思われる。

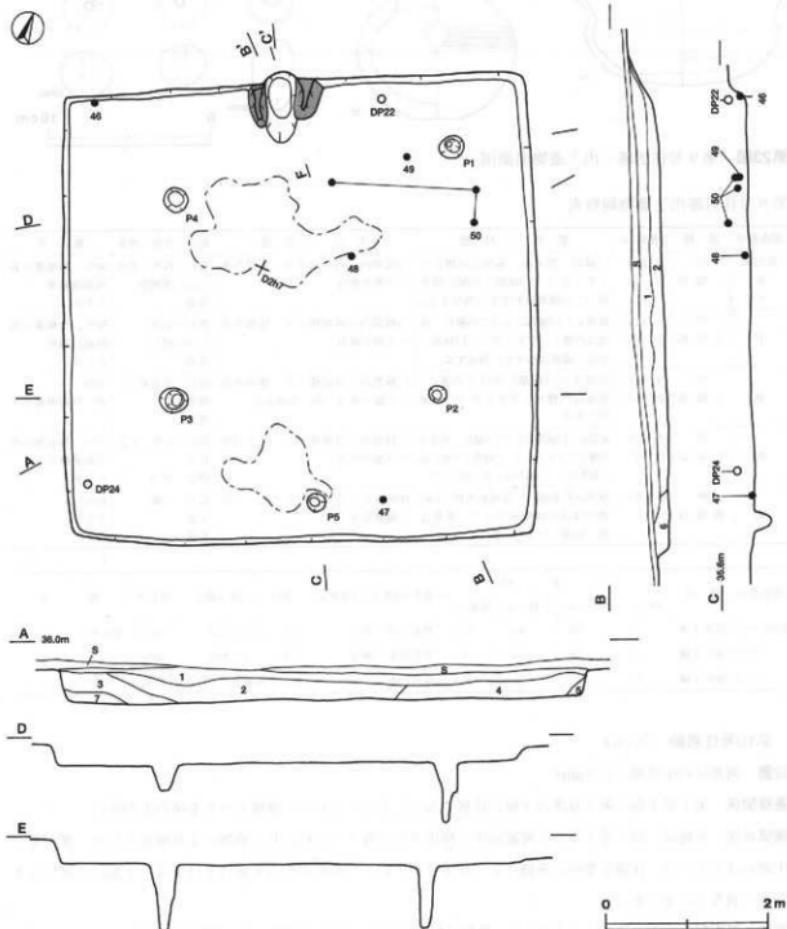
覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

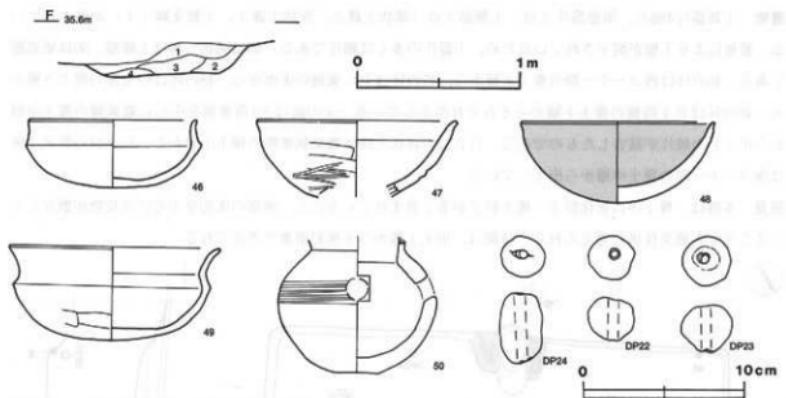
1 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量	5 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化物・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量	6 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子多量、炭化物少量、燒土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・燒土粒子少量、燒土小ブロック微量
4 暗褐色	ローム粒子多量、燒土粒子中量、燒土小ブロック・炭化粒子少量		

遺物 土師器片498点、須恵器片5点、土製品4点（球状土錘2、管状土錘1、土製支脚片1）が出土している。整地により上層が削平されているため、土器片の多くは細片である。第23図46～49は土師器、50は須恵器である。46の壊は西コーナー際の覆土下層から、47の壊はP5東側の床面から、48の壊は中央部の覆土下層から、49の壊はP1西側の覆土下層からそれぞれ出土している。50の壊はP1南東側を中心に竈東側の覆土中層から出土した破片が接合したものである。DP22の球状土錘は竈東側壁際の覆土上層から、DP24の管状土錘は南コーナー際の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、覆土中に炭化粒子・焼土粒子が多く含まれていること、南部の床面を中心に炭化物が散在していることから焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第22図 第9号住居跡実測図



第23図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 46	環土師器	A 10.3 B 4.1	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり。口縁部との境に棱を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハラ削り痕有。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	90%、外面煤付着 外面剥離多 P L 10
	環土師器	A 12.2 B (4.6)	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハラ削り痕有。	長石・石英 にぶい橙色 普通	80%、外面煤付着 外圓に擦痕 P L 10
48	環土師器	A 11.8 B 5.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり。口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハラ削り痕有。内・外面赤影。	長石・赤色粒子 橙色 普通	50% 内・外面剥離多
	環土師器	A 12.9 B 5.7	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり。口縁部に強いたれを持つ。口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハラ削り痕有。	長石・石英・赤色 粒子 橙色、普通	70%、外面煤付着 外面剥離多 P L 10
50	造須恵器	B (8.3)	底部から体部。体部最大径6cm。体部はほぼ球形を呈する。頭部は強く屈曲して立ち上がる。	体部外面上位ナデ。中央部・下位に調整痕有。	長石・小確 灰色 普通	40% P L 10

図版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様無し	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第24図DP22	球状土錐	2.8	2.6	0.6	17.8	穿孔円形。無文。	長石、にぶい橙色	98%	煤付着
DP23	球状土錐	3.0	2.8	0.6	24.2	穿孔円形。無文。	長石、にぶい橙色	98%	
DP24	管状土錐	2.7	4.3	0.7	27.4	穿孔円形。	長石、赤褐色	98%	

第10号住居跡（第24図）

位置 調査区の中央部、C 3 a6区。

重複関係 第1号土壙と第4号溝の下位に位置することから、これらの遺構よりも本跡の方が古い。

確認状況 本跡は、第1号土壙の土層断面中に検出された覆土とそれに共う遺物により確認された。覆土及び床面のほとんどは、伐開作業時に重機により削平されていた。中央部から北側にかけては、上部に土壙と大木があり調査不可能であった。

規模と平面形 床面の痕跡から南北6.60m程度と推定される。東西の規模と平面形は不明である。

壁 北東コーナー部付近は、第4号溝に掘り込まれていた。壁高は20cmである。

床 P1・P2の北側に硬化面が確認された。

ピット 3か所 (P1～P3)。P1～P3はいずれも径28～30cmの円形である。深さはP1・P2が30cm、P3が46cmである。これらは規模や形状から、主柱穴と考えられる。

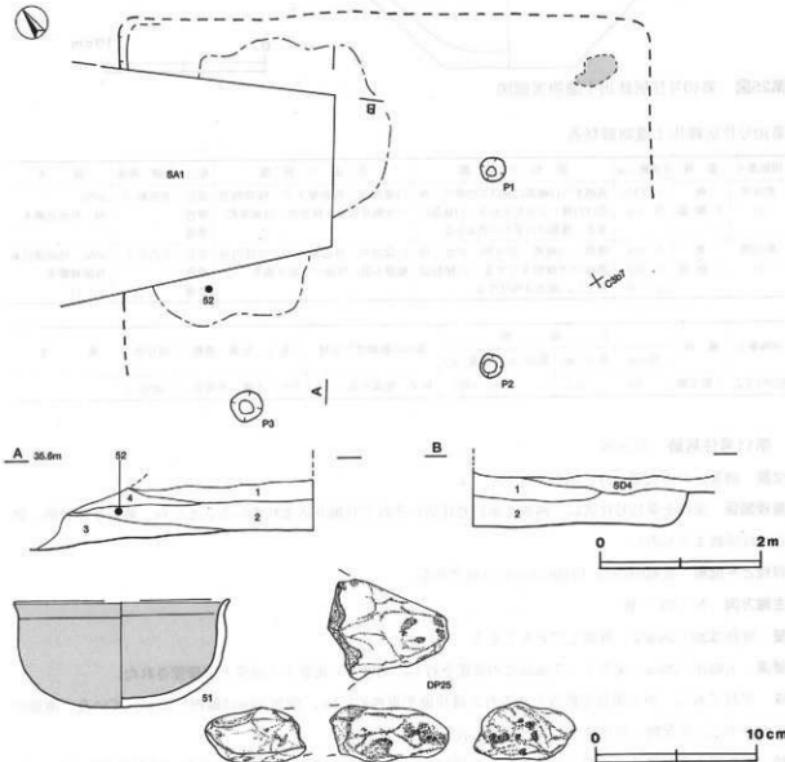
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

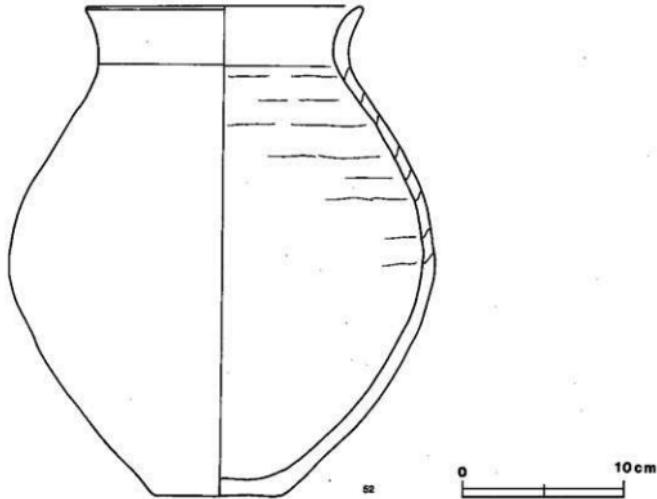
1	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量	3	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、旋上小ブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化物・炭化粒子微量	4	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量

遺物 土師器片54点、土製品(不明土製品)1点が出土している。第24・25図51・52は土師器である。52の壺はP3北側の覆土下層からつぶれた状態で出土している。51の壺は覆土中層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。竈あるいは炉は、ピットの位置や硬化面の範囲から土塁の下位に位置すると考えられる。



第24図 第10号住居跡・出土遺物実測図



第25図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考		
第24図 51	瓶 土器	A [13.0] B .66	底部から口縁部にかけての破片。体部は内側で立ち上がり、口縁部に至る。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り痕有。体部内・外面赤彩。	長石・赤色粒子 橙色 普通	50% 内・外面剥離多		
第25図 52	壺 土器	A 16.8 B 30.3 C .76	体部・口縁部一部欠損。平底。体部はほぼ球形を呈する。口縁部は直立し、端部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面輪樫み痕。外面ヘラ削り痕有。	長石・赤色粒子 橙色 普通	80%、外面剥離多 P.L.II		
図版番号	種別	計測値			器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
第24図D 25	土質支脚	7.4	6.2	—	100.0 無文。焼成不良。	長石・小颗粒、赤褐色	98%	

第11号住居跡（第26図）

位置 調査区の中央部, D 2 i8区。

重複関係 南部を第12号住居に、西部を第14号住居にそれぞれ掘り込まれていることから、第12号住居跡、第14号住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸6.60m、短軸6.50mの方形である。

主軸方向 N - 25° - W

壁溝 壁高は20~28cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅16~20cm、深さ4~7cmほどの規模を持ち、北壁下・東壁下・西壁下で確認された。

床 平坦である。炉の周辺を踏みしめられた硬化面が東西約1.2m、南北70cmの範囲で広がっている。南部の床面を中心に炭化物、炭化粒子、焼土粒子が散乱している。

炉 中央部の北壁寄りに位置する。炉床は長径52cm、短径32cm、住居の主軸方向に長い梢円形で床面から4cm

ほど窪み、火熱を受けたロームがブロック状に赤変している。

炉土層解説

1 暗赤褐色	ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	2 間	色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
--------	-----------------------------	-----	---	----------------

ピット 4か所 (P 1～P 4)。P 1～P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1～P 3は径30cmの円形である。深さはP 1・P 3が55cm、P 2が45cmである。P 4は径47cmの円形、深さ54cmである。P 1～P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。

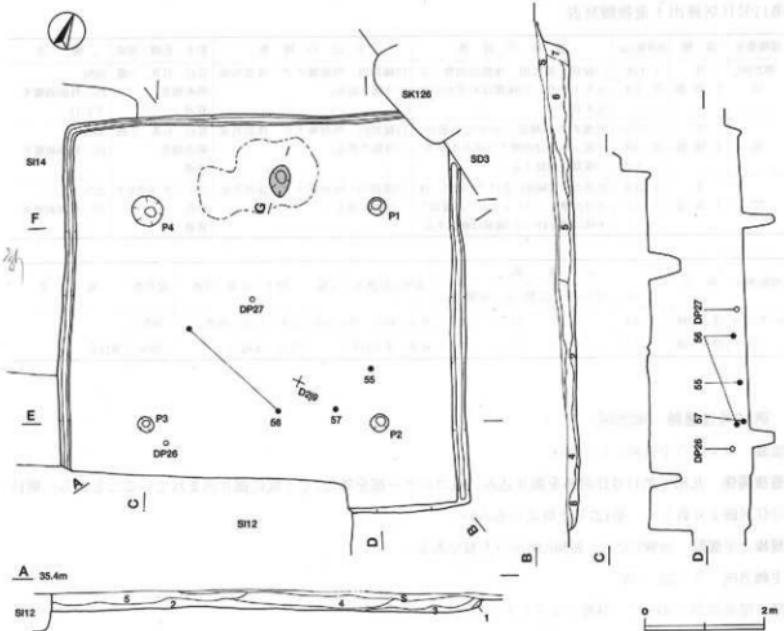
覆土 8層からなる。上層は整地により削平されている。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

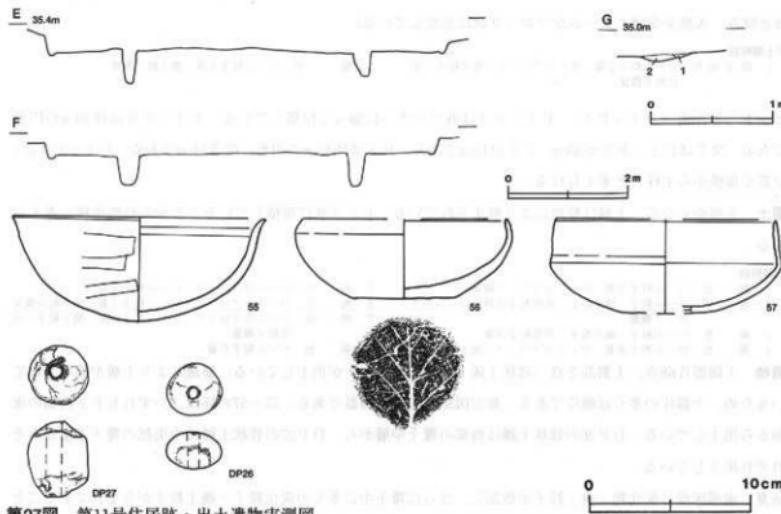
1 褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量	5 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量	6 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量	8 褐色	ローム粒子少量

遺物 土師器片68点、土製品2点(球状土錐1、管状土錐1)が出土している。整地により上層が削平されているため、土器片の多くは細片である。第27図55～57は土師器である。55～57の壺は、いずれもP 2西側の床面から出土している。D P 26の球状土錐は西部の覆土中層から、D P 27の管状土錐は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 南部床面に炭化物、焼土粒子が散乱し、さらに覆土中に多くの炭化粒子・焼土粒子が含まれていることから焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第26図 第11号住居跡実測図



第27図 第11号住居跡・出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

国版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 55	壺 土師器	A 15.6 B 6.4	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・小塵 明赤褐色 普通	95% 内・外面剥離多 P L 11
56	壺 土師器	A [12.5] B 4.9 C 6.0	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・小塵 明赤褐色 普通	50% 内・外面剥離多
57	壺 土師器	A [13.4] B 5.7	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、口縁部と の境に縦を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	20% 内・外面剥離多

国版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第27図DP25 DP27	球状土器 管状土器	3.4 3.7	2.4 4.7	0.7 1.0	20.8 57.5	無文。扁平。穿孔円形。 無文。穿孔円形。	長石、にぶい橙色 長石、赤褐色	98% 98%	焼付着

第12号住居跡（第29図）

位置 調査区の中央部、E 2 a8区。

重複関係 北部で第11号住居跡を掘り込み、東コーナー部を第127号土坑に掘り込まれていることから、第11号住居跡より新しく、第127号土坑よりも古い。

規模と平面形 長軸7.32m、短軸6.86mの方形である。

主軸方向 N-22°-W

壁 壁高は20~50cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅18cm、深さ6cmほどの規模を持ち、南壁中央部を除いて巡っている。断面形はU字状である。

床 平坦である。中央部が搅乱されており、炉は検出されなかった。搅乱部分にわずかな焼土が散在している。
ピット 5か所 (P 1～P 5)。P 1～P 4は各コーナーに偏って位置する。P 1は径33cmの円形、深さ55cm、
 P 2は径38cmの円形、深さ68cm、P 3は径35cmの円形、深さ87cmである。P 4は長径40cm、短径30cmの楕円形、
 深さ66cmである。P 1～P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 5は長径50cm、短径35cmの楕円形、
 深さ80cmである。南壁寄りの中央付近に位置することから、出入り口施設に伴うピットと思われる。

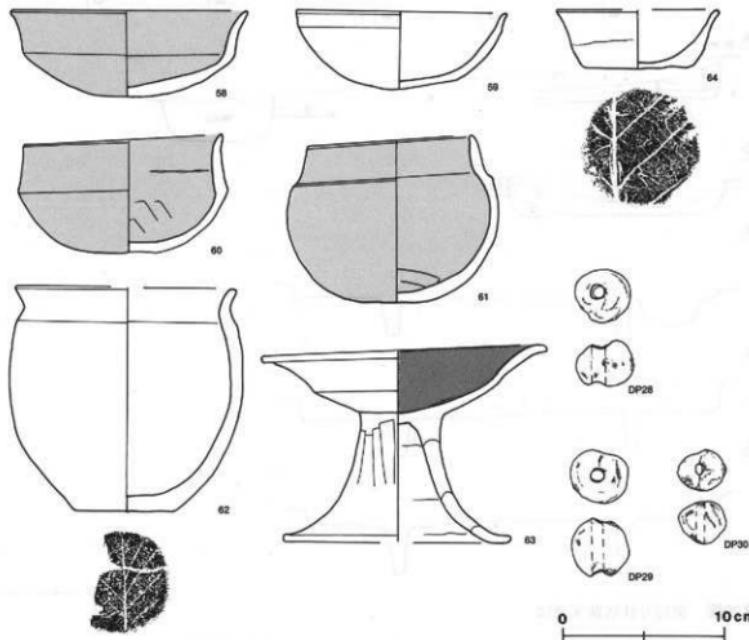
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

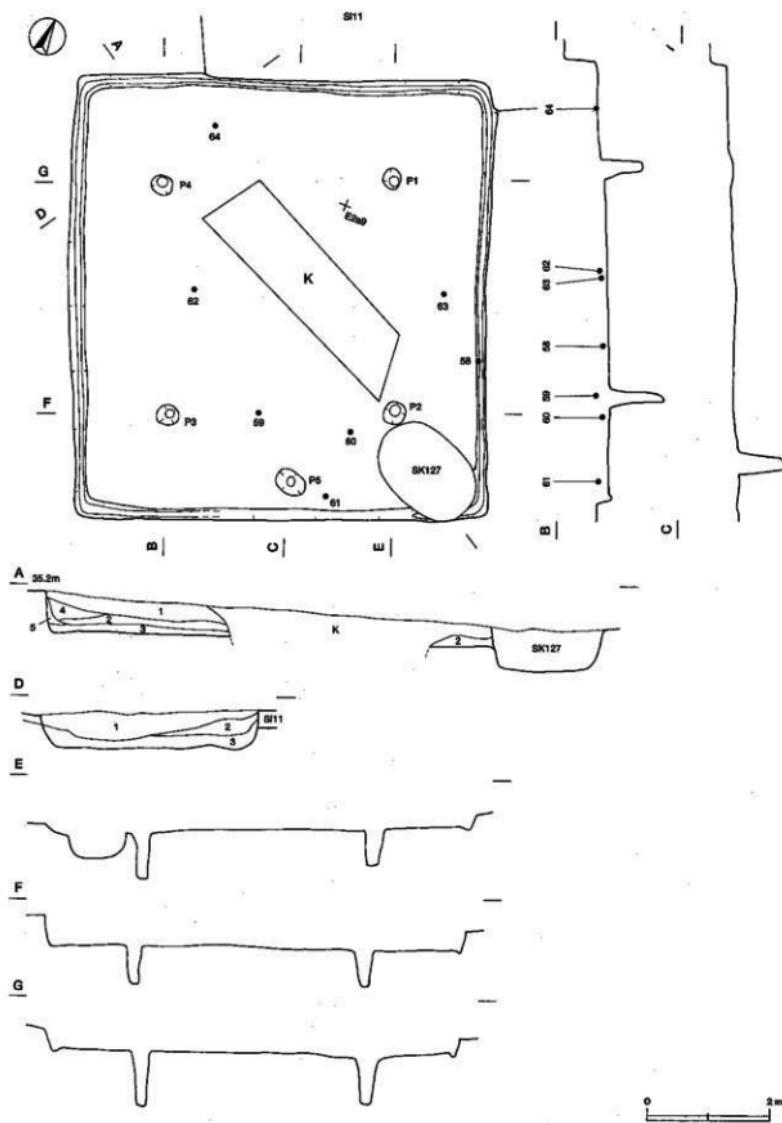
1 褐	色 ローム粒子少量、洗土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐	色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
2 褐	色 ローム粒子少量、洗土粒子微量	5 褐	色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
3 褐	色 ローム小ブロック・ローム粒子少量		

遺物 土師器片683点、土製品4点（球状土錘3、不明土製品1）が出土している。第28図58～64は土師器である。58の壺は東壁中央部の壁際から、63の高壺は東壁寄りの中央部から、いずれも覆土下層から出土している。59の壺、60・61の碗はいずれも南部の床面から出土している。62の小形壺は中央部の床面から、64は手捏土器で、北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。D P 28～D P 30の球状土錘は、いずれも覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。窓が検出されなかったこと、床面中央部の搅乱部分周辺にわずかな焼土が散在していることから、炉を持った住居であったと考えられる。



第28図 第12号住居跡出土遺物実測図



第29図 第12号住居跡実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

団版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28回 58	坏 土師器	A 14.5 B 5.3	口縁部一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤影。	長石・石英 明赤褐色 良好	95% 内・外面剥離多 P L 11
59	坏 土師器	A 13.0 B 4.7	底部から口縁部にかけての被片。体部は内側して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 明赤褐色 普通	70% 内・外面剥離多
60	坏 土師器	A 12.2 B 7.2	体部・口縁部一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱を持つ。口縁部は直立し、端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤影。	長石・石英 明赤褐色 良好	95% 内・外面剥離多 P L 11
61	陶 土師器	A 10.1 B 10.2 C 3.6	体部・口縁部一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱を持つ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤影。	長石・石英 明赤褐色 良好	95% 内・外面剥離多 P L 11
62	小形陶 土師器	A [13.2] B 13.6 C 6.1	底部から口縁部にかけての被片。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	50% 内・外面剥離多
63	高坏 土師器	A 17.6 B 12.2 D [13.8] E 7.8	脚部から坏部にかけての被片。脚部は円筒状で、裾部は八の字形に開く。D [13.8] 坏部は内側して立ち上がり、中位に後を持つ。口縁部は大きく外反する。	脚部外面ヘラ削り。坏部内面黒色處理。	長石・石英 橙色 普通	60% 内・外面剥離多 P L 11
64	手捏 土師器	A [9.8] B 3.6 C 7.0	底部から口縁部にかけての被片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部外側ナデ。底部木薙痕。	長石・赤色粒子 橙色 普通	70%

団版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・調査	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第28回DP28	球状土錐	3.5	2.8	0.8	27.3	無文。穿孔円形。	長石・赤褐色	98%	
DP29	球状土錐	3.6	3.6	0.8	35.8	無文。穿孔円形。	長石・赤褐色	98%	
DP30	球状土錐	2.5	2.9	0.5	15.5	無文。穿孔円形。	長石・赤褐色	98%	焼付着

第13号住居跡（第30・31回）

位置 調査区の南部、E 2 a6区。

重複関係 南部を第7号住居に、東部を第14号住居に掘り込まれていることから、いずれの住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸7.66m、短軸7.43mの方形である。

主軸方向 N - 18° - W

壁 磚高は40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅16~18cm、深さ6cmほどで全周すると思われる。断面形はU字型である。

床 凹凸である。竈の南側と中央部に高まりを持った硬化面がある。

竈 北壁中央部に位置し、壁を25cmほど掘り込み構築されている。袖部は砂粒と土を混ぜて作られている。規模は焚口部から煙道部までの長さ140cm、袖部最大幅100cmである。煙道部は長径100cm、短径55cm、住居の主軸方向に長い梢円形で火熱を受け赤変している。

出土解説

1 楠 色	ローム小ブロック少量、白色粘土粒子微量	7 灰 色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化 粒子少量
2 にぶい 黄褐色	白色粘土粒子多量、ローム粒子少量	8 楠 色	ローム粒子中量
3 灰 褐 色	ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック・ 炭化粒子微量	9 楠 色	白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 明 褐 色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量	10 楠 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5 赤 褐 色	焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子微量	11 茶 赤 褐 色	ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・ 焼土粒子微量

ビット 4か所 (P 1～P 4)。P 1～P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1・P 2・P 4は長径35～42cm、短径28～32cmの楕円形、深さはP 1が60cm、P 2が64cm、P 4が75cmである。P 3は長径50cm、短径35cmの楕円形、深さ80cmである。P 1～P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。

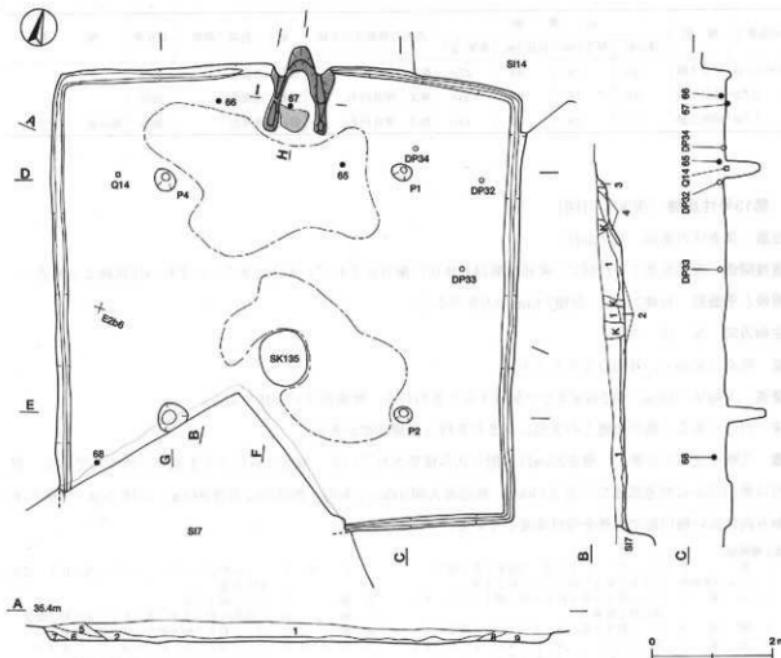
覆土 9層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

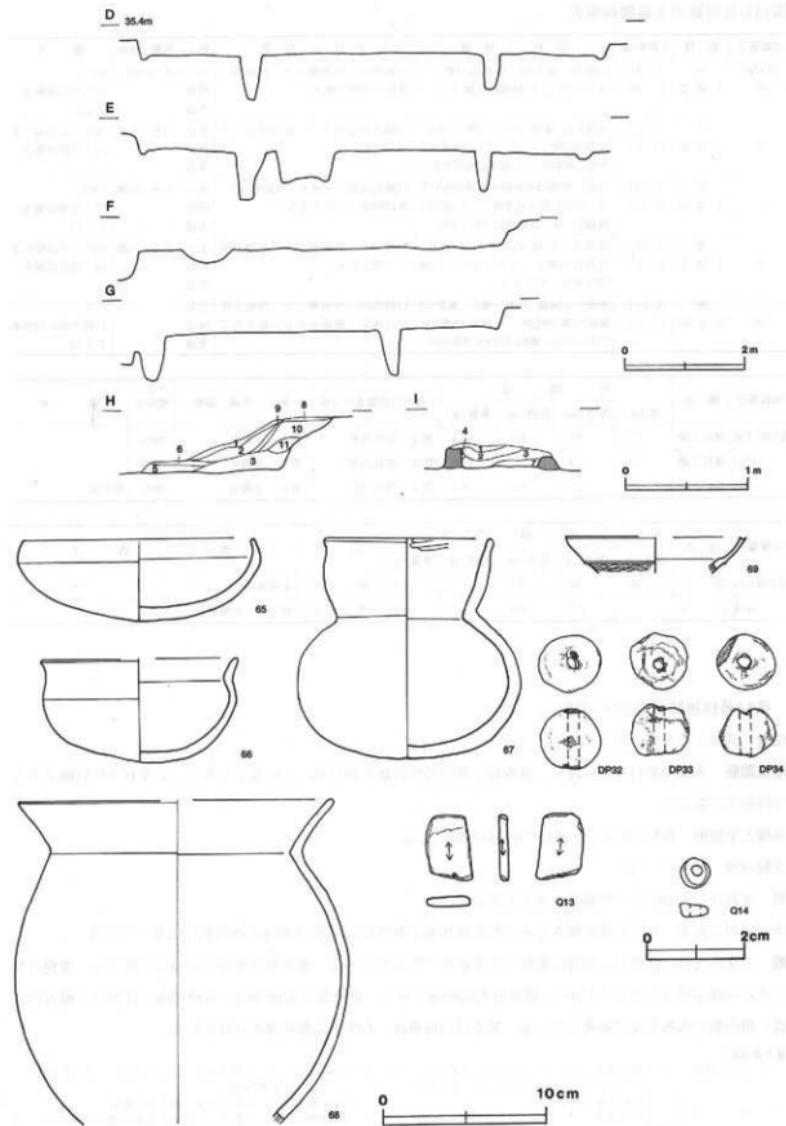
1	褐	色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子 子・炭化粒子微量	6	褐	色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量	
2	暗	褐	色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・ 炭化粒子少量	7	褐	色	ローム粒子多量
3	褐	色	炭化粒子少量	8	暗	褐	色	焼土粒子多量、ローム粒子少量、ローム小ブロッ ク・炭化粒子少量、焼土小ブロック微量
4	にぶい褐色	色	ローム粒子・焼土粒子・小礫少量	9	褐	色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、ロー ム小ブロック微量	
5	褐	色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量					

遺物 土師器片456点、須恵器2点、土製品(球状土錐)3点、石製品(砥石)1点、石製模造品(白玉)1点が出土している。第31号65～68は土師器、69は須恵器である。65の壺は竈東袖の南側、66の壺は竈西袖の西側から、いずれも床面から出土している。67の壺は竈の燃焼部から逆位で出土している。68の壺は南西コーナー一部の覆土下層から出土している。69は壺の口縁部片で、覆土下層から出土した破片が接合したものである。D P32～D P34は球状土錐で、いずれも北東コーナー部付近の覆土下層から出土している。Q14の白玉はP 4西側の床面から、Q13の砥石は覆土上層から、それぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第30図 第13号住跡実測図



第31図 第13号住居跡・出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 65	壺 土師器	A 14.0 B 4.9	口縁部一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	90% 内・外面剥離多 P L 11
66	壺 土師器	A [12.0] B 6.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部と之の接続部を持つ。口縁部は外傾する。	口縁部外側横ナデ。体部外側ヘラ削り痕有。	長石・石英・小塊 橙色 普通	90%，外面剥付着 内・外面剥離多 P L 11
67	壺 土師器	A 10.1 B 13.5	丸底。体部はやや扁平な球形を呈する。中位に最大径を持つ。口縁部は外傾した後、直線的に立ち上がる。	口縁部内面ヘラ磨き、外側横ナデ。体部外側ヘラ削り痕有。	長石・石英・小塊 橙色 普通	100% 内・外面剥離多 P L 11
68	壺 土師器	A [19.1] B [19.7]	体部から口縁部にかけての破片。底部は内側して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側 ヘラ削り痕有。	長石・石英・小塊 橙色 普通	60%，外面剥付着 内・外面剥離多 P L 11
69	壺 灰陶器	A [11.1] B (2.3)	頭部から口縁部にかけての破片。頭部と口縁部との境に接続部を持つ。口縁部は内側斜め張りとの構造を持つ。頭部は内側斜め張りとの構造を持つ。頭部は内側斜め張りの構造を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。頭部上位には横模様の握持波状文が施されている。	長石 灰色 普通	5% 口縁内面に自然釉 P L 14

図版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第31図D P32	球状土錠	3.7	3.5	0.7	45.4	無文。穿孔円形。	長石・赤褐色	98%	
D P33	球状土錠	3.5	3.0	0.7	37.8	無文。穿孔円形。	長石・赤褐色	98%	
D P34	球状土錠	3.5	2.7	0.7	31.7	無文。穿孔円形。	長石・赤褐色	98%	剥付着

図版番号	種別	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)			
第31図Q13	砾石	4.0	3.0	0.7	—	11.5	砂岩	4面使用
Q14	白玉	—	0.7	0.3	0.2	0.1	滑石	綠灰，上面擦削

第14号住居跡（第32・33図）

位置 調査区の南部, D 2 j7区。

重複関係 東部で第11号住居跡を、南西部で第13号住居跡を掘り込んでいることから、いずれの住居跡よりも本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸5.80m, 短軸4.80mの長方形である。

主軸方向 N - 17° - W

壁 壁高は12~28cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。P 5 北側に踏みしめられた硬化面が長径1.1m, 短径30cmの楕円形に広がっている。

竈 北壁中央部に位置し、袖部は砂粒と土を混ぜて作られている。煙道部は壁外へ25cmほど延びる。規模は焚口部から煙道部までの長さ110cm, 袖部最大幅85cmである。燃焼部は長径60cm, 短径45cm, 住居の主軸方向に長い楕円形で火熱を受け赤変している。焚き口の南側は、わずかに掘り窪められている。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|---|---|-------|----------------------------------|
| 1 | に赤い褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・砂粒中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・燒土粒子・白色粘土粒子少量 | 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子・砂粒少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子 | 5 | 褐色 | ローム粒子少量、燒土粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子 | 6 | 極暗赤褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、燒土小ブロック・砂粒・白色粘土粒子微量 |

ピット 5か所 (P 1 ~ P 5)。P 1 ~ P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1 ~ P 4は径35~38cmの

円形、深さはP 1・P 4が85cm、P 2が56cm、P 3が75cmである。P 1～P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 5は長径40cm、短径27cmの楕円形、深さ76cmである。南壁寄りの中央付近に位置することから、出入り口施設に伴うピットと思われる。

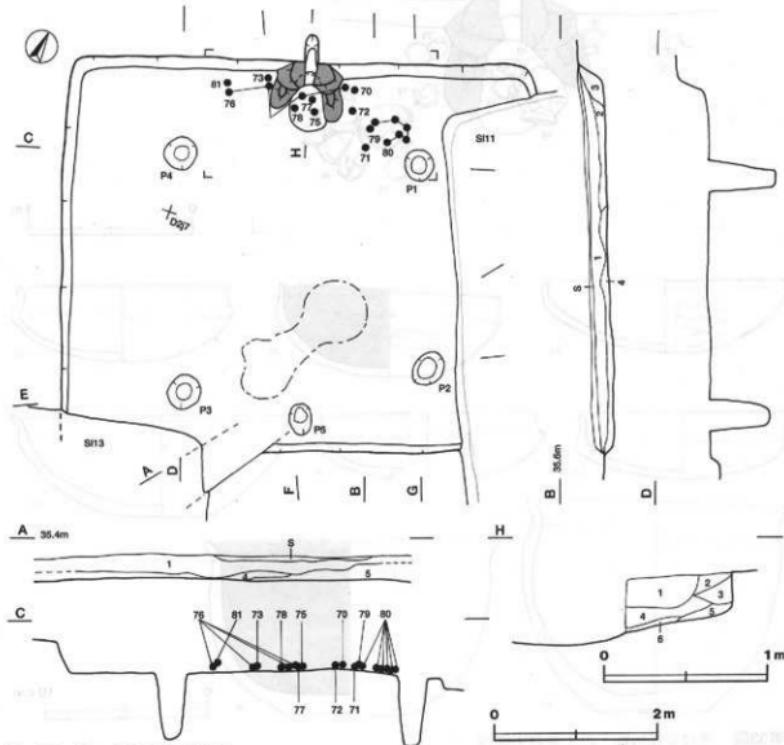
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

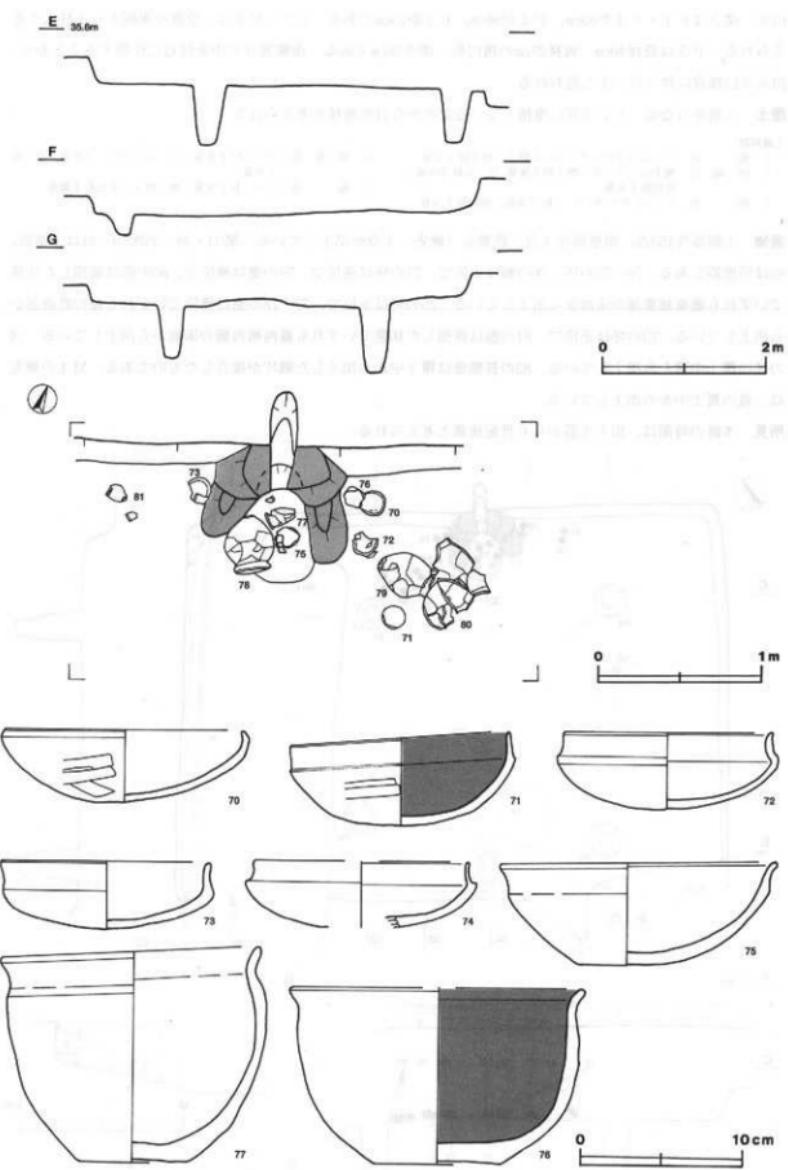
1 無 色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	4 砂 濃 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
2 砂 濃 色	焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量	5 砂 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 砂 色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量		

遺物 土師器片153点、須恵器片4点、鉄製品（鍔先）1点が出土している。第33・34・35図70～81は土師器、82は須恵器である。70・72の壺は正位で、71の壺は逆位で、79の甕は横位で、80の瓶は破損した状態でいずれも竈東袖東部の床面から出土している。75の壺は正位で、77・78の甕は横位でいずれも竈の燃焼部から出土している。73の壺は正位で、81の瓶は破損した状態でいずれも竈西袖西側の床面から出土している。74の壺は覆土中層から出土している。82の長頸甕は覆土中から出土した細片が接合したものである。M 4の鍔先は、竈の覆土中から出土している。

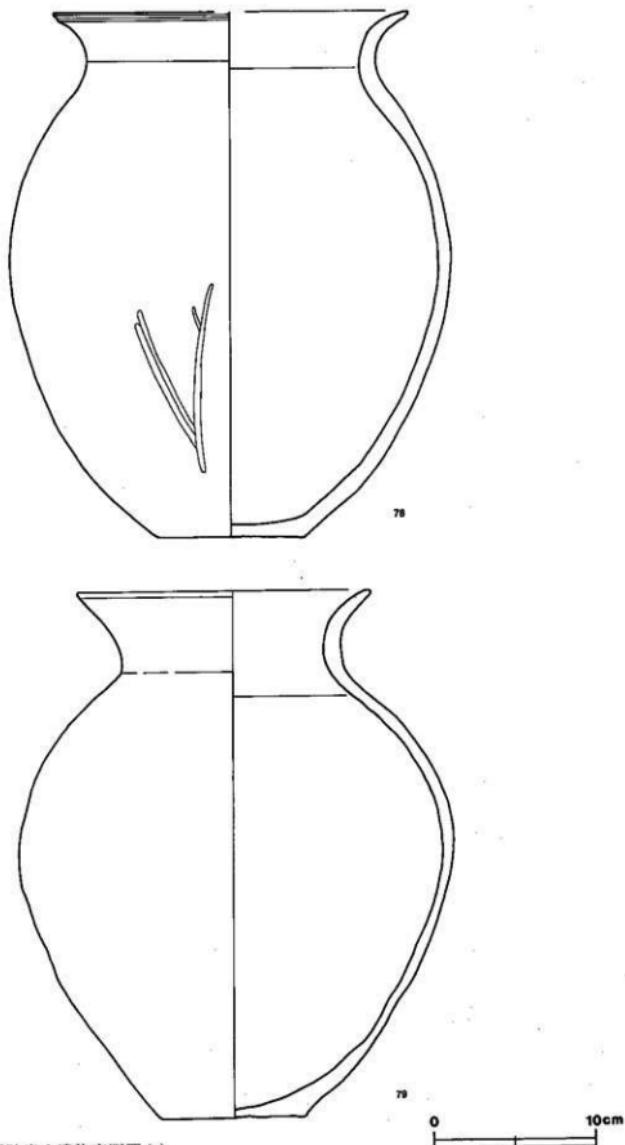
所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



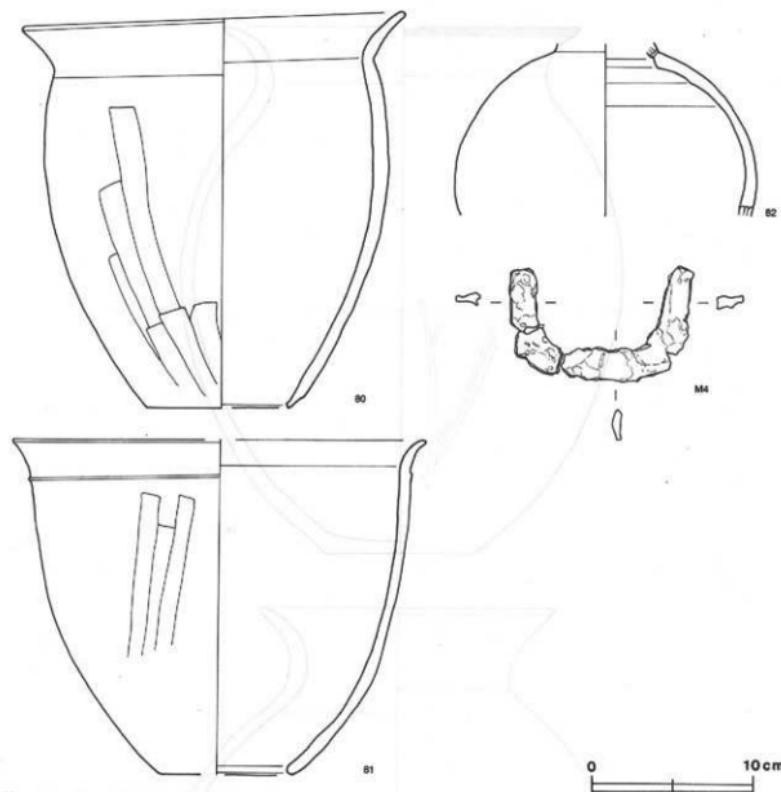
第32図 第14号住居跡実測図



第33図 第14号住居跡・出土遺物実測図



第34図 第14号住居跡出土遺物実測図(1)



第35図 第14号住居跡出土遺物実測図(2)

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 70	坏 土師器	A 14.7 B 4.4	口縁部一部欠損。体部は内擣して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英 橙色 普通	95% 内・外面削離多 P L 12
71	坏 土師器	A 13.4 B 5.8	体部一部欠損。体部は内擣して立ち上がり、口縁部との境に縫を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。内面黒色処理。	長石・石英 橙色 普通	95% 内・外面削離多 P L 12
72	坏 土師器	A 12.8 B 4.7	底部から口縁部にかけての破片。体部は内擣して立ち上がり、口縁部との境に縫を持つ。口縁部は直立し、端部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・小纏 橙色 普通	65%
73	坏 土師器	A 12.7 B 4.2	底部から口縁部にかけての破片。体部は内擣して立ち上がり、口縁部との境に縫を持つ。口縁部は直立し、端部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 小纏 橙色、普通	50% 内・外面削離多
74	坏 土師器	A [13.2] B (4.1)	底部から口縁部にかけての破片。体部は内擣して立ち上がり、口縁部との境に縫を持つ。口縁部は直立し、端部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	50% 内・外面削離多

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 75	壺 土師器	A 17.0 B 6.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内 側して立ち上がり、口縁部との境に縫 を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 小窓 橙色、普通	95%，外面焼付着 内・外面剥離多 P L 12
76	楕 土師器	A [17.8] B 10.8 C 8.0	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内側気味に立ち上がり り、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。内面黒色処理。	長石・石英・赤色粒子 小窓 橙色、普通	70%，外面焼付着 内・外面剥離多 P L 12
77	甕 土師器	A 15.8 B 13.3 C 6.6	体部・口縁部一部欠損。平底。体 部は内側気味に立ち上がり、口縁 部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 小窓 橙色、普通	80%，外面焼付着 内・外面剥離多 P L 12
第34図 78	甕 土師器	A [21.8] B 32.5 C 9.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部 は内側気味に立ち上がり。口縁部は外反し、 窪部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 下位ヘラ磨き。	長石・石英・紫雲 にぶい橙色 普通	80%，外面焼付着 内・外面剥離多 P L 12
79	甕 土師器	A 18.0 B 32.5 C 8.8	体部・口縁部一部欠損。平底。体 部は内側気味に立ち上がり、口縁 部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英・小窓 橙色 普通	80%，外面焼付着 内・外面剥離多 P L 12
第35図 80	瓶 土師器	A 23.1 B 24.4 C 8.6	底部一部欠損。無底式。体部は内 側して立ち上がり。口縁部は外反 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後ナデ。外面ヘラ削り。	長石・石英・小窓 にぶい橙色 普通	95%，外面焼付着 P L 12
81	甕 土師器	A [25.2] B 20.5 C [8.0]	底部から口縁部にかけての破片。体 部は内側して立ち上がり、口縁部との 境に縫を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ナデ。外面ヘラ削り。	長石・石英・赤色粒子 小窓 にぶい赤褐色、普通	60%，外面焼付着 外側剥離多 P L 12
82	甕 陶器	B (10.5)	体部片。最大径18.2cm。体部は内 側して立ち上がる。頸部は強く屈 曲して立ち上がる。	体部内面横ナデ。外側ナデ。	長石 灰オリーブ 普通	10% 外面上位に自然釉 P L 12

図版番号	種別	計測値				器形の特徴	現存率	備考
第35図M 4	鉢 先	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	馬蹄形	80%	

第15号住居跡（第36・37図）

位置 調査区の中央部, D 2 d0区。

重複関係 中央部を第107・108号土坑に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸6.10m, 短軸6.00mの方形である。

主軸方向 N - 28° - W

壁 壁高は15~20cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅14cm, 深さ6cmほどの規模を持ち、北部・西部・東部の壁下を巡っている。断面形はU字型である。

床 平坦である。炉の西側に高まりを持つ硬化面が広がっている。北部床面から炭化物・炭化粒子・焼土粒子
が検出され、一部赤変している。

炉 東壁寄りの中央部に位置する。火床面は長径80cm, 短径65cmの梢円形である。床面より10cmほど掘りくぼ
められ、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1 増赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、焼土小ブロック少量。
2 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土大ブロック・焼土小ブロック
中量

ピット 4か所（P 1 ~ P 4）。P 1 ~ P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1 ~ P 4は径25~30cmの
円形、深さはいずれも70cmほどである。P 2は第108号土坑の底面から検出されている。P 1 ~ P 4は、位置
や規模から主柱穴と考えられる。

覆土 7層からなる。上層は整地により削平されている。締まりがあることやブロック状に堆積していること
から人為堆積と考えられる。

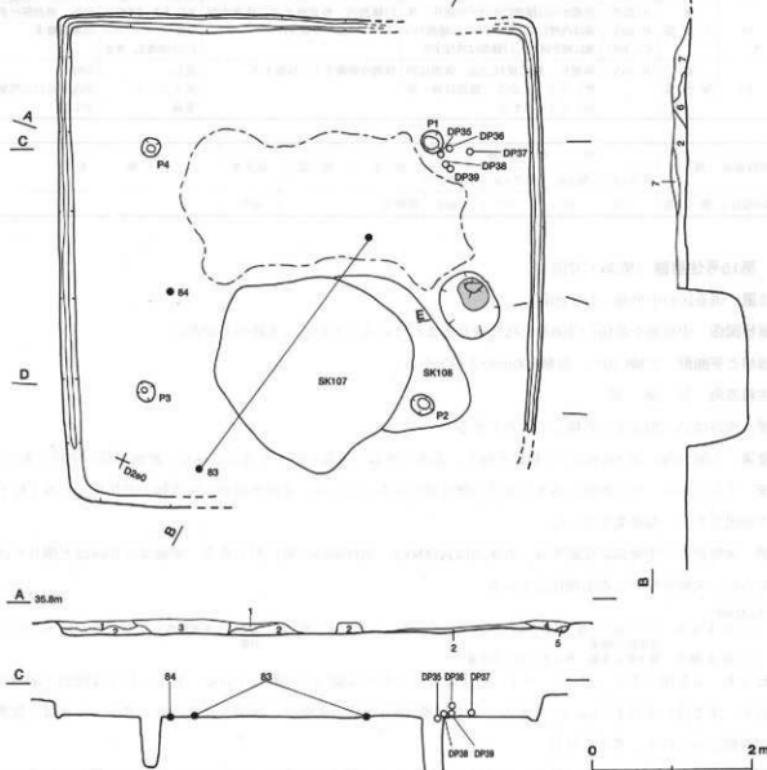
土層解説

1 淡 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量	4 暗 褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
2 暗 褐 色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量	5 橙暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
3 暗 褐 色	ローム大粒子多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子微量	6 暗 褐 色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量
		7 暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

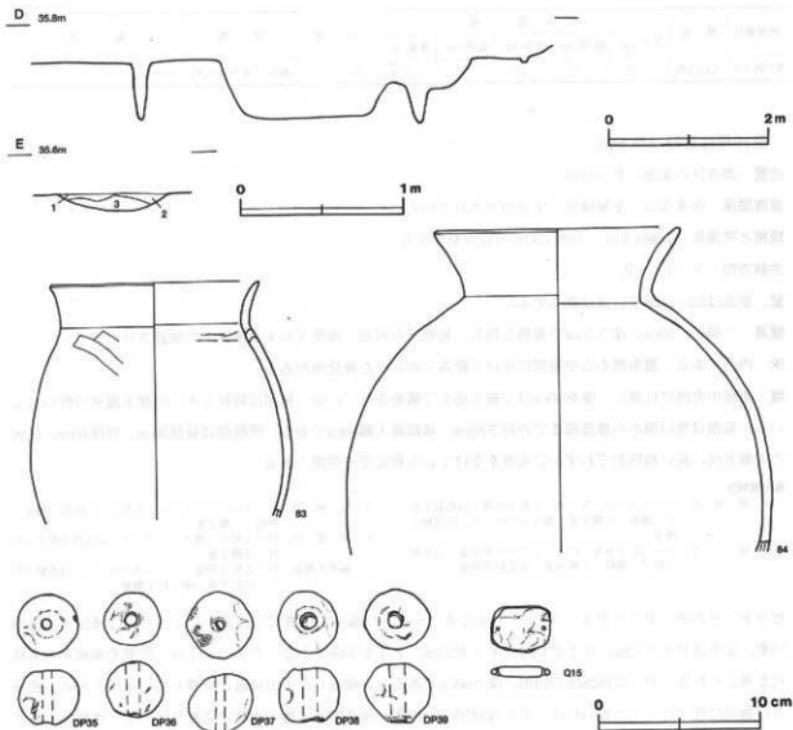
遺物 土器片200点、土製品(球状土錘)5点、石製模造品(双孔円板)1点が出土している。第37図83・84は土器である。84の壺は硬化面南側の床面から出土している。83の壺は南壁際の床面と炉西側の床面から出土した破片が接合したものである。D P35~39は球状土錘で、いずれも炉北西側の床面からまとまって出土している。

所見 北部床面から炭化材が検出され床面の一部が赤変していること、さらに覆土下層から焼土粒子が検出されたことなどから焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から5世紀後葉~6世紀前葉と考えられる。

④



第36図 第15号住居跡実測図



第37図 第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 83	甕	A 12.7	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外側へラ削り後ナデ。	長石・赤色粒子にぶい橙色 普通	50%、外側糊付着 内面剥離多
	土師器	B (14.5)				
84	甕	A 14.8	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外側へラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子・小穢 橙色、普通	50%、外側糊付着 内・外側剥離多
	土師器	B (19.8)				

図版番号	種別	計測値			器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚S(cm)	孔径(cm)				
第37図DP35	球状土錐	3.7	3.3	0.7	44.2 無文。穿孔円形。	長石、石英、橙	98%	P L16、糊付着
DP36	球状土錐	3.4	3.3	0.8	31.0 無文。穿孔円形。	長石、石英、にぶい橙	98%	P L16、糊付着
DP37	球状土錐	4.0	3.6	0.5	53.8 無文。穿孔円形。	長石、赤褐色	98%	P L16、糊付着
DP38	球状土錐	3.7	3.3	0.9	47.4 無文。穿孔円形。	長石、石英、橙	98%	P L16、糊付着
DP39	球状土錐	4.1	3.6	1.0	48.8 無文。穿孔円形。	長石、石英、赤褐色	98%	P L16、糊付着

図版番号	種別	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)			
第37図 Q15	双孔円板	3.6	2.7	0.7	0.2	11.8	滑石	縫合、兩丸長方形 PL16

第16号住居跡（第39図）

位置 調査区の北部, B 3 h9区。

重複関係 南東部は、平場構築により削平されている。

規模と平面形 長軸4.40m, 短軸3.50mの長方形である。

主軸方向 N - 45° - W

壁 整高は50~55cmで、ほぼ直立する。

壁溝 上幅15~20cm, 深さ5cmの規模を持ち、北壁下の西部、西壁下および南壁下で確認された。

床 凹凸である。竈南側から中央部にかけて踏みしめられた硬面がある。

竈 北壁中央部に位置し、壁を50cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と土、小砾を混ぜて作られている。規模は焚口部から煙道部までの長さ85cm, 袖部最大幅80cmである。燃焼部は長径50cm, 短径40cm, 住居の主軸方向に長い楕円形でわずかに火熱を受けている程度で不明瞭である。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量、白色粘土粒子・砂粒・小砾少量、燒土小ブロック・炭化粒子微量	3 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・白色粘土粒子・砂粒・小砾少量
2 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、白色粘土粒子・砂粒・小砾少量、炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子・燒土小ブロック・白色粘土粒子・砂粒・小砾少量
		5 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・白色粘土粒子・砂粒少量、燒土粒子微量

ピット 6か所 (P 1 ~ P 6)。P 1 ~ P 4は各コーナーに偏って位置している。P 1 ~ P 4は径28~32cmの円形、深さはP 1が42cm, P 2が48cm, P 3が53cm, P 4が36cmである。P 1 ~ P 4は、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 5は径28cmの円形、深さ63cmである。南壁寄りの中央付近に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと思われる。P 6は径36cmの円形、深さ23cmで竈の南側に位置している。性格は不明である。

覆土 12層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

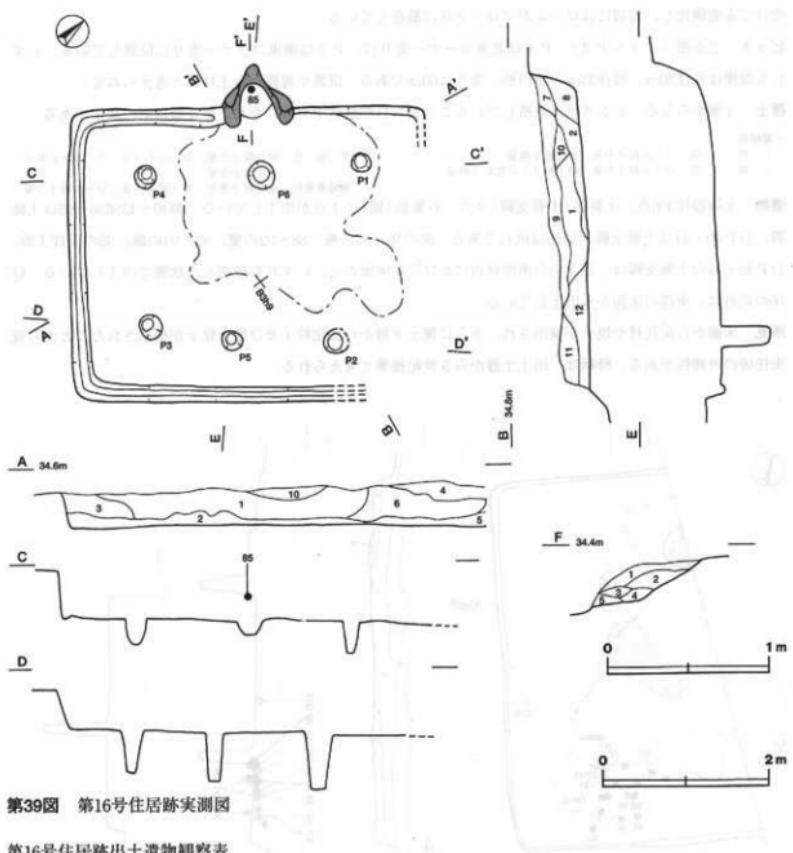
1 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量	7 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・燒土粒子・粘土粒子・小砾少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量	9 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化物・炭化粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化物・炭化粒子少量、燒土小ブロック微量	10 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
6 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	12 暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量、燒土小ブロック・炭化物微量

遺物 土師器片28点が出土している。第38図85は土師器の壺で、竈煙道部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第38図 第16号住居跡出土遺物実測図



第39図 第16号住居跡実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 85	土器	A [20.6] B (6.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母に富む黄褐色 普通	10%

第17号住居跡（第40図）

位置 調査区の西部。D 2 b8区。

規模と平面形 西部は調査区域外である。確認できたのは南北4.66m、東西2.20mである。平面形は不明である。

主軸方向 N -27° - E

壁 壁高は20~30cmで、ほぼ直立する。

床 平坦である。炉から床面中央部にかけて硬化面が広がっている。東部には炭化材や焼土が散在している。

炉 炉の中心は調査区域外にあるために、一部を確認した。床面を5cmほど掘り窪めている。火床面は火熱を

受けで赤変硬化し、周辺にはロームがブロック状に散在している。

ピット 2か所 (P 1～P 2)。P 1は北東コーナー寄りに、P 2は南東コーナー寄りに位置している。いずれも規模は長径30cm、短径23cmの楕円形、深さは60cmである。位置や規模から主柱穴と考えられる。

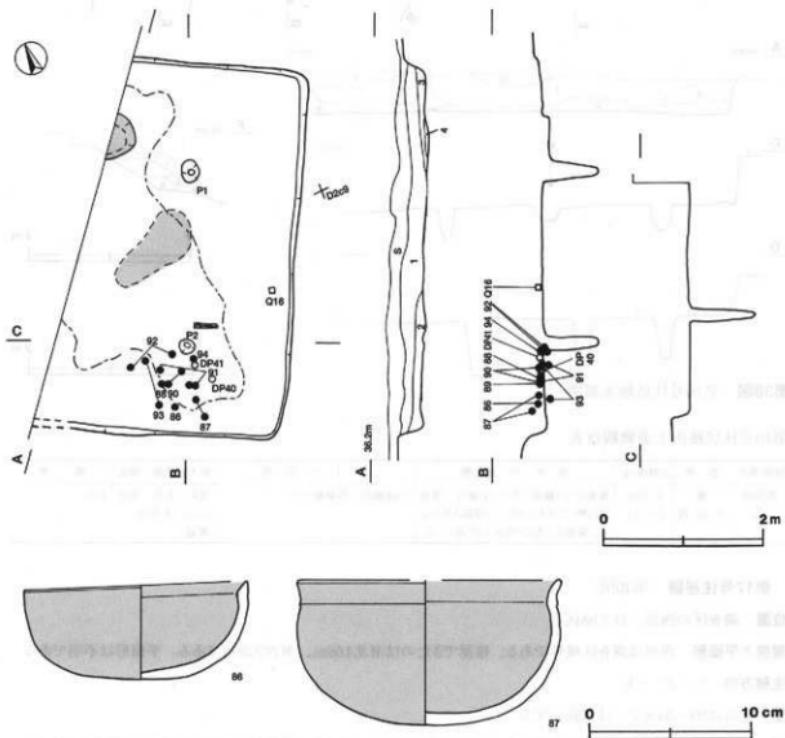
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。なお、第4層は炉の覆土である。

土層解説

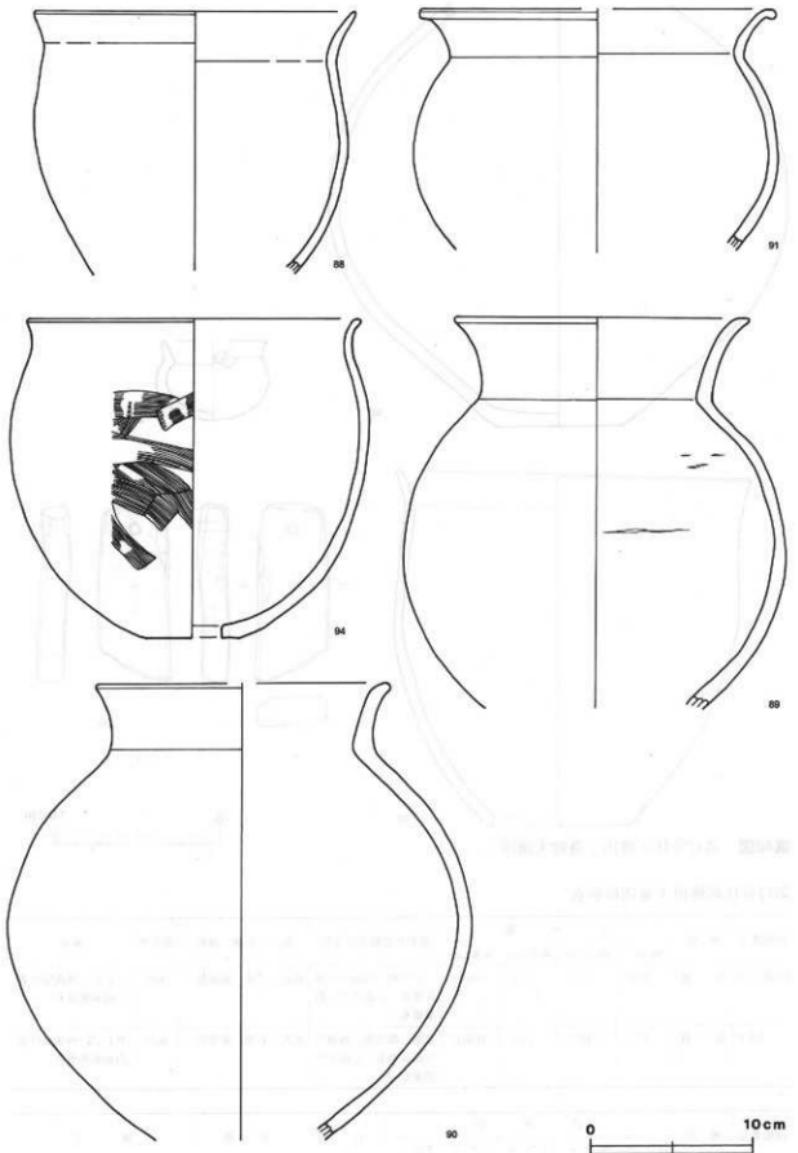
1 開	色 ローム粒子中量、炭化粒子微量	3 黒 褐 色 炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
2 開	色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗暗赤褐色 炭化粒子多量、焼土粒子中量、ローム粒子少量

遺物 土師器片300点、土製品(土製支脚)3点、石製品(砥石)1点が出土している。第40～43番86～95は土師器、D P 40・41は土製支脚、Q 16は砥石である。86の壺、87の瓶、88～92の甕、93・94の瓶、95の手捏土器、D P 40・41の土製支脚は、P 2から南壁周辺にかけての床面から、いずれも破損した状態で出土している。Q 16の砥石は、東部の床面から出土している。

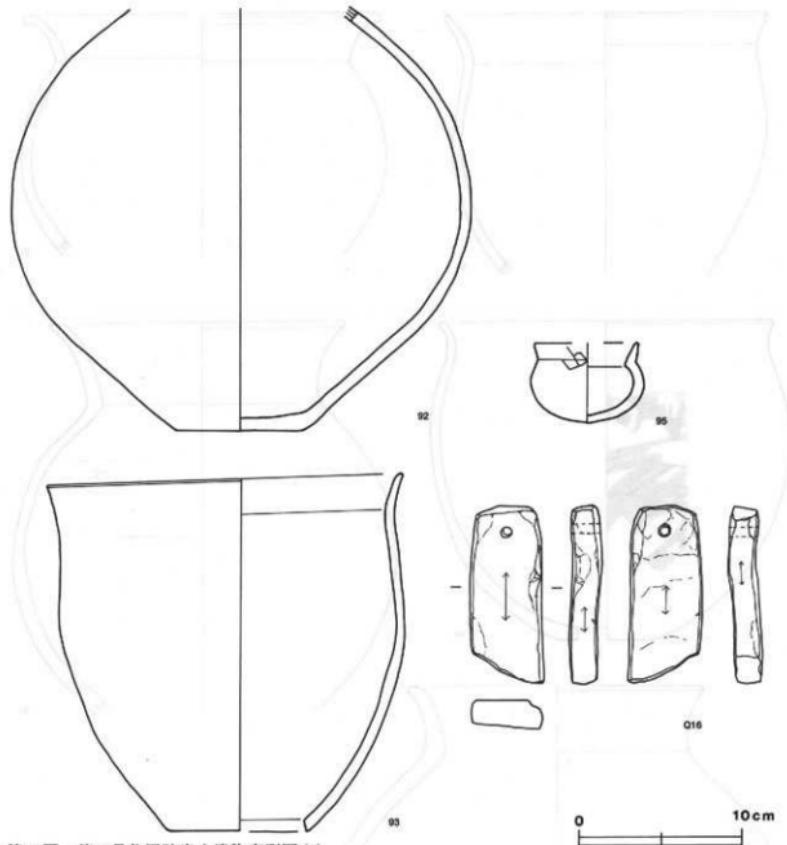
所見 床面から炭化材や焼土が検出され、さらに覆土下層から炭化粒子及び焼土粒子が検出されたことから焼失住居の可能性がある。時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第40図 第17号住居跡・出土遺物実測図



第41図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)

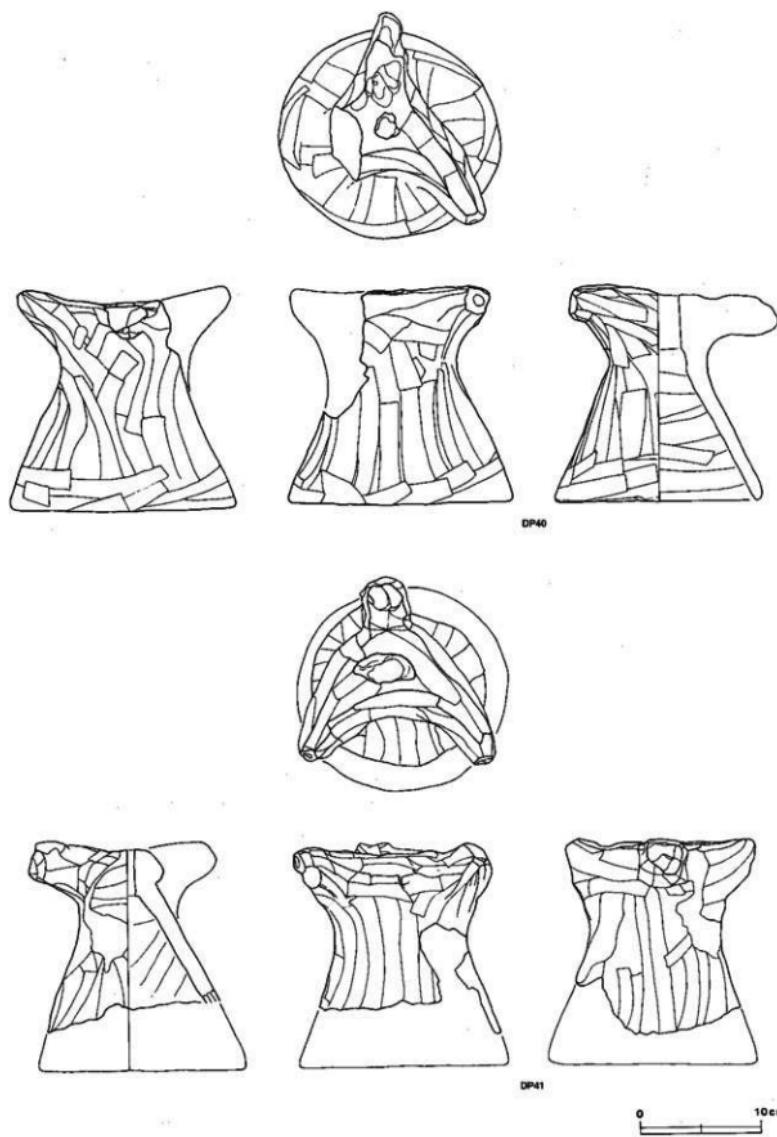


第42図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		幅(cm)	高さ(cm)	基部(cm)	重量(g)				
第42図DP40	支脚	18.2	17.2	17.4	1780.0	一部欠損。外面ヘラ削り痕有。上部ナデ、指頭痕有。	長石・石英、赤褐色	90%	P L 15、外面焼付着内面被熱痕有
DP41	支脚	15.5	(15.7)	(14.3)	(1820.0)	基部一部欠損。外面ヘラ削り痕有。上部ナデ、指頭痕有。	長石・石英、赤褐色	80%	P L 15、外面焼付着内面被熱痕有

図版番号	種別	計測値				石質	特徴	備考	
		長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)				
第42図Q16	砥石	11.0	4.5	2.2	0.9	158.9	砂岩	4面使用	P L 16

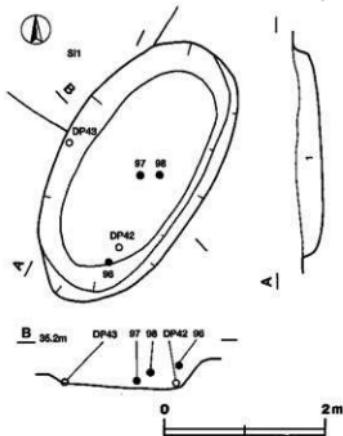


第43図 第17号住居跡出土遺物実測図(3)

第17号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40回 86	环土師器	A 13.8 B 6.1	口縁部一部欠損。体部は内側して立ち上がり、内面の口縁部との境に緩を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り痕有。内・外面赤彩。	長石・石英 明赤褐色 普通	90% 内・外面剥離多 P L 13
87	碗土師器	A [16.2] B 9.0	体部・口縁部一部欠損。体部は内側して立ち上がり、内面の口縁部との境に緩を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り痕有。内・外面赤彩。	長石・石英 明赤褐色 普通	80% 内・外面剥離多 P L 13
第41回 88	壺土師器	A 19.8 B (16.1)	体部から口縁部にかけての破片。 体部はほぼ球形を呈する。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 橙色 普通	80% 内・外面剥離着 内・外面剥離多 P L 13
89	壺土師器	A 17.9 B (24.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部はほぼ球形を呈する。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英 橙色 普通	70% 外面剥離多 P L 13
90	壺土師器	A [17.8] B (28.1)	体部から口縁部にかけての破片。 体部はほぼ球形を呈する。口縁部は緩やかに外反し、縁部に裏みを持つ。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	70% 外面剥離多 P L 13
91	壺土師器	A [21.2] B (14.8)	体部から口縁部にかけての破片。 体部はほぼ球形を呈する。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面 ヘラ削り痕有。	長石・石英 橙色 普通	30%、外面剥付着 外面剥離多 P L 13
第42回 92	壺土師器	B (26.1) C 7.8	底部から体部にかけての破片。平底、最大径を中位に持ち、扁平な球形を呈する。	体部内・外面ヘラ削り痕有。	長石・石英 明赤褐色 普通	50%、外面剥付着 外面剥離多 P L 13
93	瓶土師器	A 21.7 B 22.1 C 8.5	体部および口縁部一部欠損。無底式。 体部は内側して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石 橙色 普通	60%、外面剥付着 外面剥離多 P L 13
第41回 94	瓶土師器	A 20.4 B 19.6 C 6.0	体部および口縁部一部欠損。平底。 体部はほぼ球形を呈する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ハケ調整。	長石・雲母・小穂 橙色 普通	80% 外面剥離多 P L 14
第42回 95	手握土器	A [6.4] B 4.9	底部から口縁部にかけての破片。 体部は扁平な球形で、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。	長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	40% P L 14

(2) 土坑



第44図 第101号土坑実測図

第101号土坑（第44図）

位置 調査区の中央部, D 3 d3区。

重複関係 第1号住居跡の南西コーナー部を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.60m、短軸1.86mの精円形である。

主軸方向 N-32°-E

壁面 壁高は35cmで、緩やかに立ち上がる。

底面 全体に柔らかく、平坦である。

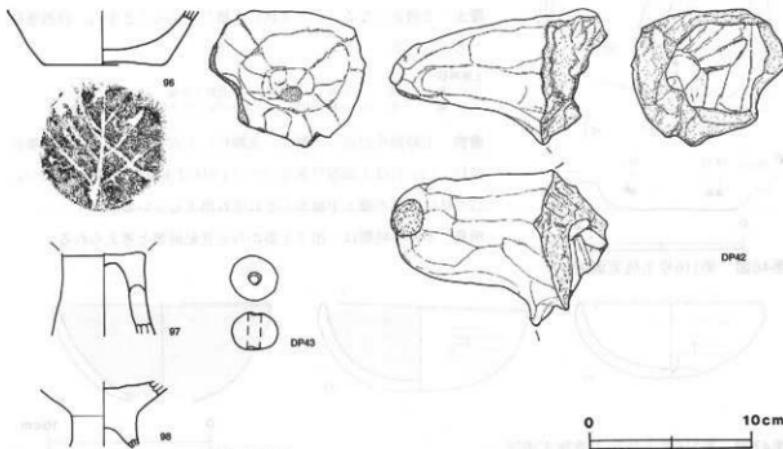
覆土 単一層である。一度に埋め戻されたように堆積している。

土壤解説 1層 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片21点が出土している。第45回～98土師器、D P 42・43は土製品である。96の壺底部片は南コーナー部の覆土上層から、D P 42の支脚は南コーナー部の

覆土下層から、それぞれ出土している。97・98の高坏は中央部の覆土中層から、DP43の球状土錘は北西部コーナー部の底面からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀と考えられる。



第45図 第101号土坑出土遺物実測図

第101号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 96	高坏 土器	B (3.3) C 7.3	底部から体部にかけての破片。平底。 体部は外傾して立ち上がる。	体部外面へラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 褐色 普通	10%、外側剥離多 内・外側剥離多
97	高坏 土器	E (5.1)	脚部の破片。脚部は円筒状で、裾部はハの字状に広がる。	脚部外面へラ削り痕有。	長石・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	10% 内・外側剥離多
98	高坏 土器	B (4.0) E (2.0)	脚部から环部にかけての破片。环部は外傾して広がる。	脚部外面へラ削り痕有。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	5% 内・外側剥離多

図版番号	種別	計測値			器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		幅(cm)	高さ(cm)	基部(cm)				
第45図DP42	脚	(13.4)	(8.4)	—	(556.0) 基部片。ヘラ削り痕有。 上部ナデ。	長石・石英、赤褐色	10%	外側剥離多 内側剥離多

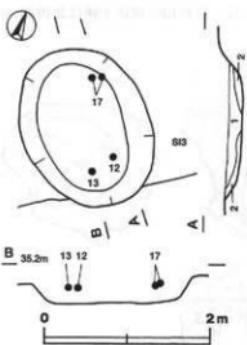
図版番号	種別	計測値			器形の特徴及び文様	胎土・色調・調整	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)				
第45図DP43	球状土錘	2.9	2.1	0.8	16.8 無文。穿孔円形。	長石・石英、にぶい橙	98%	埋付着

第116号土坑（第46図）

位置 調査区の中央部、D 3f1区。

重複関係 第3号住居跡を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸1.84m、短軸1.54mの梢円形である。



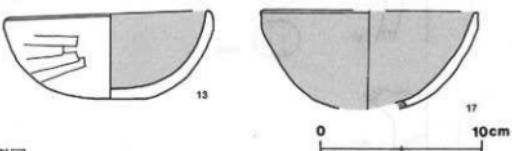
第46図 第116号土坑実測図

主軸方向 N-40°-W
 壁面 壁高は20~25cmで、緩やかに立ち上がる。
 底面 平坦で、軟質である。
 覆土 2層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説
 1 層 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
 2 層 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量

遺物 土器片21点、土製品（支脚片）1点が出土している。第47図
 図12・13・17は土器である。12・13の壺は南東部の覆土中層から、17の壺は北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第47図 第116号土坑出土遺物実測図

第116号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 12 土器	壺	A 11.2 B 4.6	体部は内縁して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英・赤色粒子 赤褐色 普通	100% 外面焼付着 P L 14
13 土器	壺	A 12.4 B 5.2	口縁部一部欠損。体部は内縫して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外縁横ナデ。体部外面ヘラ磨き、内面ナデ。内面赤彩。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	95% P L 14
17 土器	壺	A [13.3] B (6.0)	底部から口縁部にかけての破片。体部は内縫して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外縁横ナデ。内・外面赤彩。	長石・石英・赤色粒子 明褐色 普通	30% 内・外面剥離多

3 中・近世の遺構と遺物

今回の調査により、検出された中近世の遺構は土塁2基、火葬土坑3基、竪穴状遺構4基、土坑5基、粘土貼土坑12基である。これらの遺構の分類基準は下記に示した。

火葬土坑、粘土貼土坑、竪穴状遺構、土坑はおもに第1号土塁の内側、またはその周辺部から多く検出されている。なお、粘土貼土坑については、平面図と土層断面図および一覧表にて記載する。

火葬土坑 土坑の中に入骨（骨片等）と焼土、炭化物等が遺存するもの。火葬施設か火葬墓かは不明。

竪穴状遺構 平面形が方形・長方形、あるいは円形で、底面が平坦であるか、縮まりが認められるもの。ピットを持つものもある。

粘土貼土坑 円形または楕円形の掘り方に、粘土を貼り付けた土坑。

土坑 何らかの遺物が、検出された土坑。

(1) 土壘

調査区中央部に位置し、矩形に巡らせた土壘を第1号土壘、その南側に位置し直線的な土壘を第2号土壘とした。なお、第1号土壘の北側に位置する土壘を第3号土壘としたが、調査区域外のために、全体図に平面形のみを図示した。

第1号土壘 (第48・49・50図)

位置 調査区の中央部、B 3 a1区。

重複関係 第8号住居、第10号住居の上に構築されていることから、本跡の方が新しい。

確認状況 本跡は、伐開作業時に北側中央部および南側中央部を重機により削平されていた。土壘上には、大木があった。西土壘は、東土壘よりも若干高く、四隅はさらに高くなっている。土壘内への出入り口部は確認できない。西土壘中央部と東土壘南部は、若干窪んだ形状をしている。北西コーナー部の盛土は、土壘内へ崩れて流れ落ちた状況であった。

規模と平面形 本跡は矩形に土壘を巡らせており、内側はローム面まで掘り込み平坦にしている。東土壘と西土壘は並行関係にあり、その向きは南北の軸にはほぼ平行である。北土壘と南土壘も並行関係にあるが、東西の軸には平行ではない。したがって平面形は、長方形にはならず平行四辺形である。北東コーナー部・北西コーナー部・南西コーナー部はやや突出している。東土壘は、長さ37m、基底の幅4~7m、西土壘は、長さ45m、基底の幅4~7m、北土壘は、長さ35m、基底の幅4~6m、南土壘は、長さ35m、基底の幅3.5~5mである。基底からの高さは北東コーナー部が1.2m、南東コーナー部が1.6m、南西コーナー部と北西コーナー部が2.6mである。

盛土 東土壘は、ロームをわずかに掘り下げ平坦にした後、積み上げられており、3層~7層はいずれも縮まりがあり、版築された層である。1・2層は版築後、搔き上げられて積み上げられた層である。

南土壘は、7層~9層にかけて縮まりが認められる。東土壘同様、ロームを掘り下げ平坦にした後、土壘西側から積み上げられている。8層から、石棺の石材と見られる雲母片岩の切石が検出された。

北土壘は、1・2層とも縮まりではなく、版築の行為は確認できない。土壘内を平坦にした後、搔き上げられて構築されたと考えられる。

東土壘層解説 (S P A)

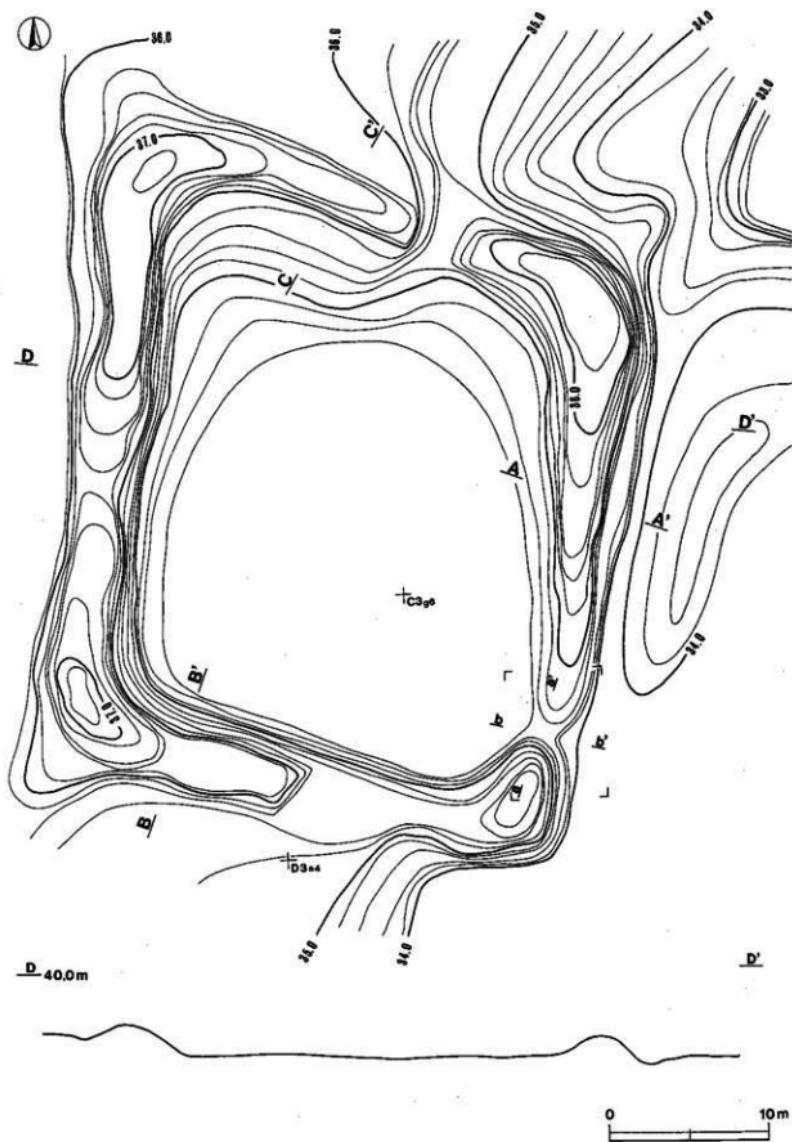
1	褐	色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量	5	暗	褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック
2	暗	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量	6	黑	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
3	暗	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	7	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
4	黑	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量	8	極	暗褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量

南土壘層解説 (S P B)

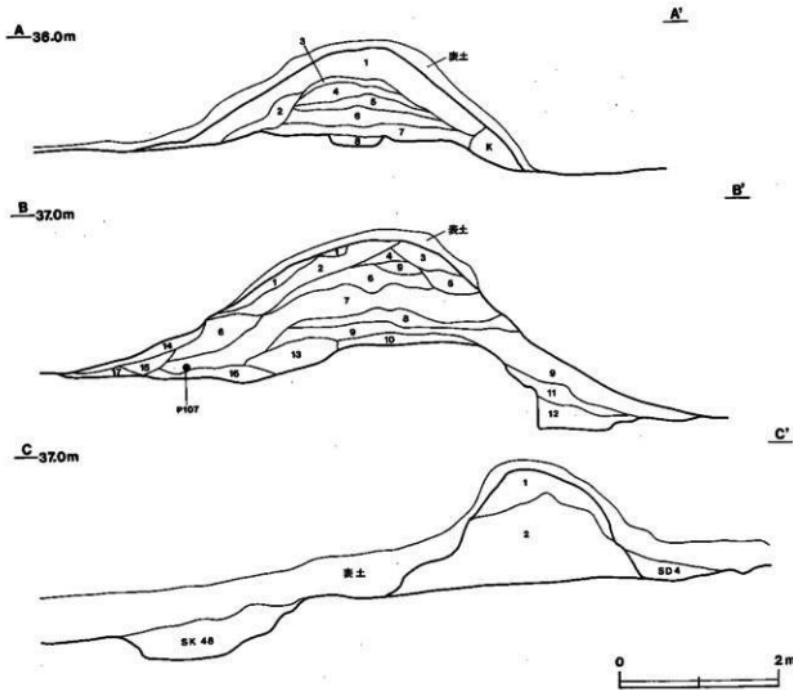
1	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量	10	明	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量
2	褐	色	ローム小ブロック中量、ローム粒子少量	11	暗	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
3	褐	色	ローム粒子少量	12	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
4	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量	13	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量、雲母片岩微量
5	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	14	暗	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
6	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、小礫微量	15	暗	褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
7	暗	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	16	暗	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
8	暗	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、雲母片岩微量	17	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量
9	褐	色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量	18	黑	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量

北土壘層解説 (S P C)

1	褐	色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量	2	暗	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
---	---	---	-----------------------------	---	---	----	--------------------



第48図 第1号土星実測図



第49図 第1号土星土層断面図

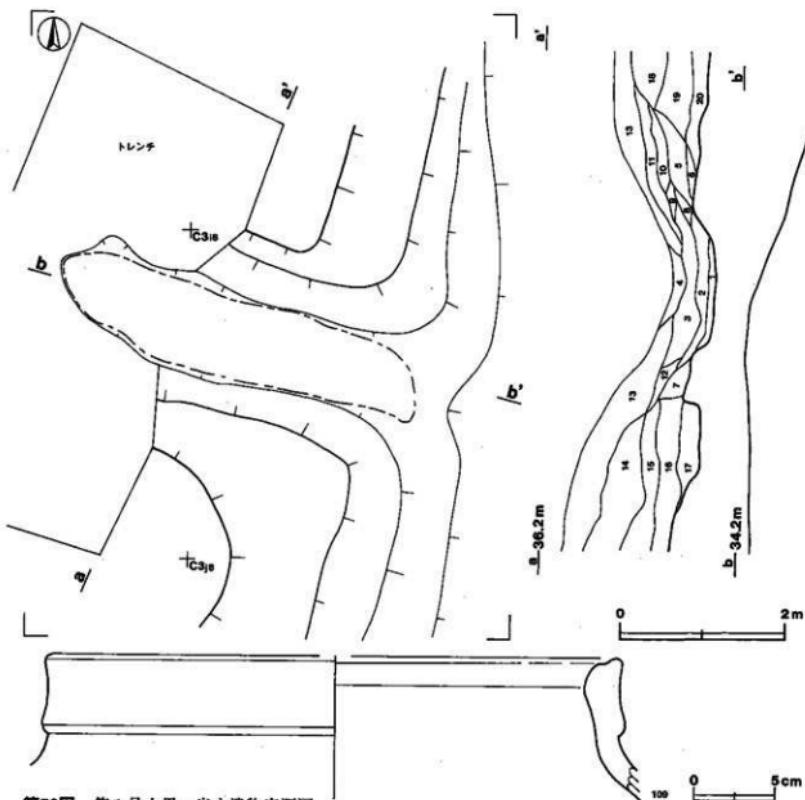
出入り口施設 東土星の南部の一段低くなっている部分をトレンチ調査することにより検出された。土星を横断するようにあり、幅はおよそ1.6mで断面形はU字状をしている。底面は硬化しており、土星内へ続いている。硬化した範囲は、長さ約4.7m、幅約1.2mである。第1層は硬化面を形成し、第5・6・7層は出入り口施設の構築時に積み上げられた層である。第14層から20層は、土星の盛土である。

出入り口部土層解説 (S P a)

1 黒褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量	11 黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土小ブロック微量
2 増褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量	12 黒褐色	ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
3 増褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量	13 増褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
4 褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム大ブロック微量	14 増褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
5 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量	15 増褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
6 明褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック中量	16 黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土小ブロック微量
7 増褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量	17 黒褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子微量
8 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量	18 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
9 暗暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量	19 増褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量
10 増褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量	20 暗暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック微量

遺物 南土壘の盛土中から、陶器片 1 点が出土している。第50図107は常滑の壺の口縁部で、口径約36cmほどと推定される。胎土はにぶい橙色、色調は暗赤褐色で全対に鉄軸がかかっている。

所見 土壘の構築時期は、出土した常滑片が第 9 形式と考えられることから、15世紀前半以降と考えられる。また、検出された出入り口施設は、埋没状況及び土壘を掘り込んでいる状況から、土壘構築時には存在しなかったと考えられる。



第50図 第1号土壘・出土遺物実測図

第2号土壘（第51図）

位置 調査区の中央部、D 3 a4区。

確認状況 本跡は、伐開作業時に重機により北側と南側、および盛土の上部を削平されていた。

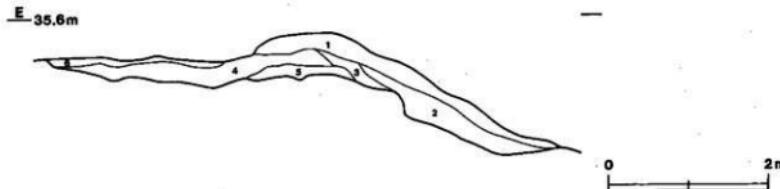
規模と平面形 規模は、長さ約13.2m、基底の幅約3m、高さ約1.2mである。断面の形状はカマボコ形である。

土壘の長軸方向は、第1号土壘の東土壘と同じである。

盛土 ローム面をわずかに掘り下げ平坦にした後、第5層から積み上げられている。第4層には網まりが見られる。

第2号土壘土層解説 (S P E)	
1	暗褐色 ローム粒子中量
2	褐色 ローム粒子多量
3	褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
4	褐色 ローム粒子多量, 烧土粒子・炭化粒子少量
5	褐色 ローム粒子多量
6	褐色 ローム粒子多量, 烧土小ブロック・焼土粒子微量

所見 遺物が出土していないことや重複関係がないことから、土壘の構築時期や性格は不明である。



第51図 第2号土壘土層断面図

(2) 土 坑

ア 火葬土坑

第78号土坑 (第52図)

位置 調査区の北部, B 3 b1区。

確認状況 トレンチ試掘により検出された。西部は試掘の際に削平されている。

規模と平面形 長径1.50m, 短径0.36mの梢円形である。

長径方向 N - 82° - W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。被熱により、わずかに赤変している。

覆土 10層からなる。覆土に骨粉が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量, 烧土小ブロック微量	6	暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 烧土小ブロック・焼土粒子微量
2	暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化材少量, 骨片微量	7	暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3	板暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量	8	暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 烧土粒子・炭化粒子微量
4	板暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量, 烧土小ブロック・炭化材・炭化物微量	9	暗赤褐色 ローム粒子多量, 烧土小ブロック中量, 烧土中ブロック・炭化粒子少量, 炭化材・炭化物骨粉微量
5	板暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 烧土粒子・炭化物・粘土粒子微量	10	黒色 ローム粒子多量, 烧土粒子多量, 炭化材・炭化物・骨粉微量

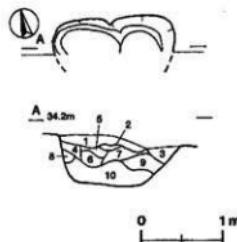
所見 本跡は、底面が赤変していること、覆土から骨片・焼土・炭化物が出土していることから、火葬土坑である。時期は、不明である。

第104号土坑 (第53図)

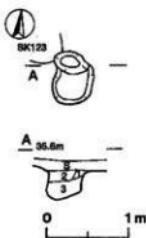
位置 調査区の中央部, D 3 b1区。

重複関係 第123号土坑と重複している。覆土上層は整地により搅乱されていることから、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径0.62m, 短径0.45mである。上部が整地により搅乱されていることから、平面形は不明である。底部は梢円形で、深さは34cmである。



第52図 第78号土坑実測図

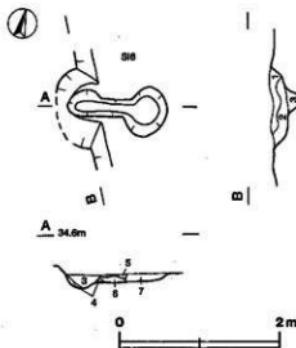


長径方向 N - 8° - E
壁面 外傾して立ち上がる。
底面 西部が低く傾斜をしている。わずかに炭化粒子が認められる。

覆土 3層からなる。覆土に骨粉が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説
1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒 炭化粒子多量、炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子・骨片・骨粉少量
所見 本跡は覆土から骨片・焼土・炭化物が出土していることから、火葬土坑である。時期は、不明である。

第53図 第104号土坑実測図



第125号土坑（第54図）

位置 調査区の南部、D 2 b1区。

重複関係 本跡が第6号住居を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径1.53m、短径1.27mである。上部が抜根時に擾乱されていることから、平面形は不明である。底部の形状はT字状である。

長径方向 N - 62° - W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 西部は窪み、中央から東部にかけては平坦である。被熱により、わずかに赤変している。

第54図 第125号土坑実測図

覆土 7層からなる。覆土に骨粉が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説
1 暗褐色 ローム粒子少量
2 黑色 炭化物・炭化粒子多量、ローム粒子少量
3 黑色 炭化粒子多量、炭化物中量、ローム粒子少量
4 黑色 炭化粒子多量、ローム粒子少量
5. 暗暗褐色 炭化粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・骨片少量
6. 暗暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量、骨片微量
7. 暗褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子少量

所見 本跡は覆土から骨片・焼土・炭化物が出土していることから、火葬土坑である。時期は、不明である。

イ 堅穴状遺構

第107号土坑（第55図）

位置 調査区の中央部、D 2 d0区。

重複関係 第15号住居跡、第108号土坑を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

規模と平面形 一辺が2.4mほどの円形である。

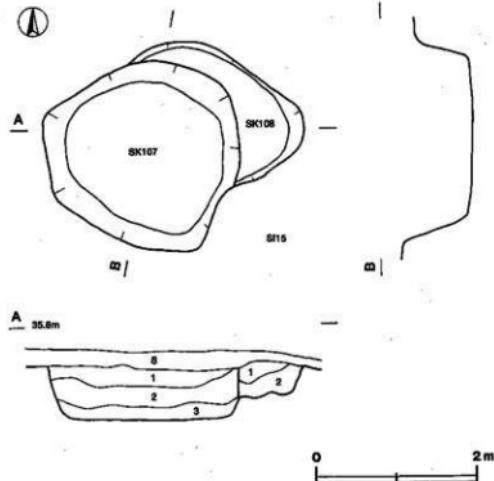
壁面 壁高は60cmで、ほぼ直立する。

底面 平坦で中央部に縮まりがある。

覆土 3層からなる。焼土・炭化物・粘土を含んでいることから人為堆積と考えられる。

土層解説		1 白 色 ローム粒子中量、風化物・炭化粒子・粘土粒子少量、ローム小ブロック・泥土粒子微量	2 黒 色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
		3 黄 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量	

所見 本跡は遺物が出土していないことから、時期や性格は不明である。



第55図 第107・108号土坑実測図

第108号土坑（第55図）

位置 調査区の中央部、D 2 d0区。

重複関係 第15号住居跡を掘り込み、第107号土坑に掘り込まれていることから、第15号住居跡より新しく、第107号土坑よりも古い。

規模と平面形 一辺が2.0mほどの方形、または円形と考えられる。

壁 壁高は40cmで、外傾して立ち上がる。

底面 凹凸で、縁まりは認められない。南部から第15号住居跡の柱穴が検出されている。

覆土 2層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1 白 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム 中ブロック少量

所見 本跡は遺物が出土していないことから、時期や性格は不明である。

第109号土坑（第56図）

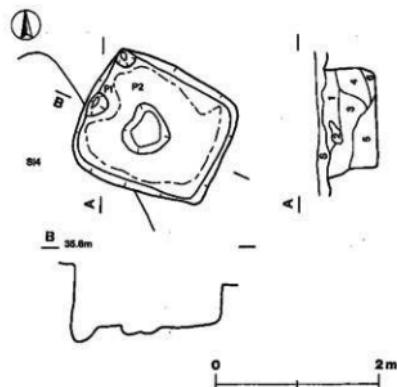
位置 調査区の中央部、D 2 e9区。

規模と平面形 長軸18m、短軸1.5mの長方形である。

長軸方向 N - 38° - E

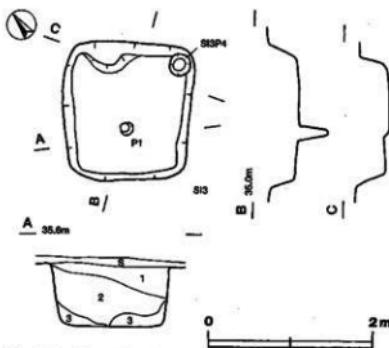
壁 壁高は65cmで、ほぼ直立する。

底面 中央部に径50cmほどの窪みがある。窪みの周辺には顯著な縁まりがある。



第56図 第109号土坑実測図

所見 本跡は遺物が出土していないことから、時期や性格は不明である。



第57図 第114号土坑実測図

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
2 褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量

所見 本跡は遺物が出土していないことから、時期や性格は不明である。

ウ　土　坑

第18号土坑（第58図）

位置 第1号土星の内側、C 3 f3区。

規模と平面形 径1.65mほどの円形、深さ33cmである。

壁 壁高は33cmで、緩やかに立ち上がる。

底面皿状である。

ピット 2か所 (P1・P2)。P1は底面西部の壁際に位置し、長径32cm、短径21cmの梢円形で、深さ20cmである。P2は北西コーナーに位置し、径22cmの円形で、深さ15cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 6層からなる。ブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

十一

1	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子少量
2	暗	褐色	ローム粒子微量、ローム小ブロック少量
3	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、焼土粒子微量
4	暗	褐色	ローム小ブロック多量、ローム中ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
5	暗	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
6	黑	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

第114号十坑（第57図）

位置：渋谷区の中央部、JR 2号線。

重複関係 第3号住居跡を掘り込んでいることから、第3号住居跡より新しい。

規模と平面形 二辺が16mほどの方形である。

體 體高は82cmで、ほぼ直立する。

底面 北東コーナー壁際から底面へ降りるよう
に、スロープ状の高まりがある。

ピット 1か所。P 1は底面の中央部に位置し、径16cmの円形で、深さ38cmである。性格は不明である。

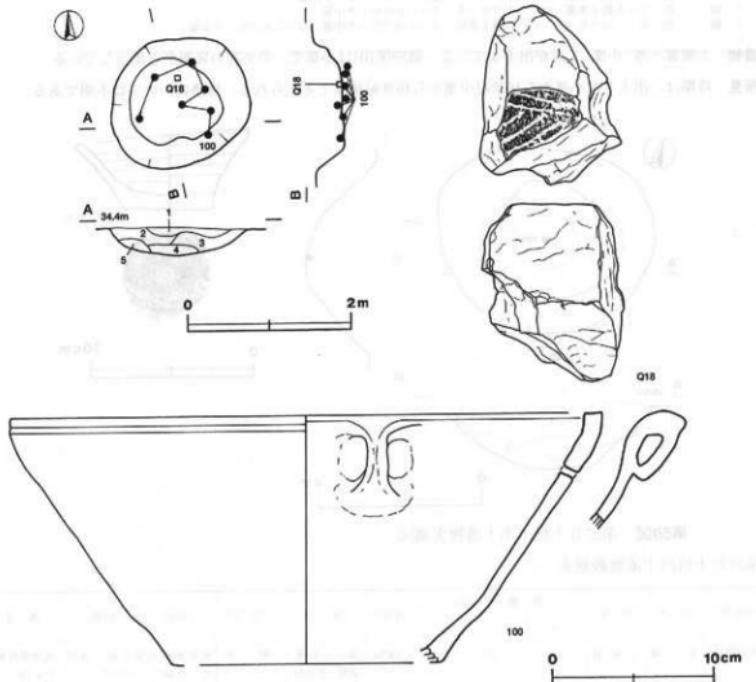
覆土 5層からなる。ブロック状に堆積していること、粘土ブロックが含まれていることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 級	色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量	中ブロック少量
2 級	色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、粘土ブロック微量	ローム小ブロック・ローム粒子多量、粘土ブロック微量
3 級	色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム	ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 土師質土器(内耳鍋)1点、石製品(石臼)1点が出土している。第58図100は内耳鍋で、底面から出土した破片が接合したものである。Q18は石臼の破片で底面から出土している。

所見 時期は、出土した内耳鍋から15世紀後半から16世紀前半と考えられる。性格については不明である。



第58図 第18号土坑・出土遺物実測図

第18号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)			残存率	胎 土	色 調	器形・手法の特徴	備 考
			A	B	C					
第58図100	内耳鍋	土師質	363	153	[166]	20%	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	棕 色	体部は外傾し、口縁部は直立する。	外面焼付着 PL14

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				石 質	現存率	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第58図Q18	石臼	—	—	(10.8)	(8723)	凝灰岩	10%	金属器による擦痕有。PL16

第27号土坑（第59図）

位置 第1号土壙の内側、C 3 e3区。

規模と平面形 長径2.7m、短径2.25mの楕円形、深さ77cmである。

長径方向 N - 71° - W

壁 断面形はU字状で、緩やかに立ち上がる。

底面 盔状である。

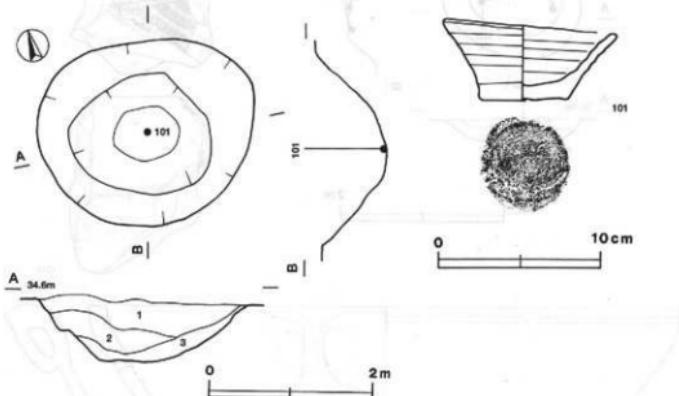
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
2	褐	色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
3	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量

遺物 土師質土器（小皿）1点が出土している。第59図101は小皿で、中央部の底面から出土している。

所見 時期は、出土した小皿から16世紀中葉から16世紀後葉と考えられる。性格については不明である。



第59図 第27号土坑・出土遺物実測図

第27号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)			残存率	胎 土	色 調	器形・手法の特徴	備 考
			A	B	C					
第58図101	小 皿	土 师 質	10.8	5.0	5.4	100%	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙 色	底部回転糸切り痕。体部内・外側クロナデ。	外側墨付着 P.L.14

第33号土坑（第60図）

位置 第1号土壙の内側、C 3 d3区。

重複関係 東部を第34号土坑に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 径1.45mほどの円形と考えられる。深さは55cmである。

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 盔状である。

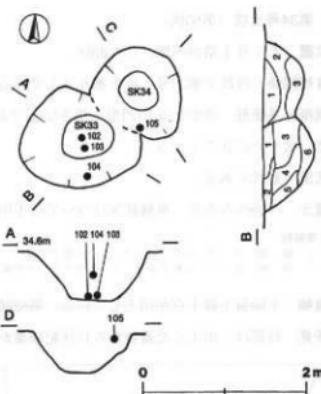
覆土 6層からなる。ブロック状に堆積していることが
ら、人為堆積と考えられる。

土層解説

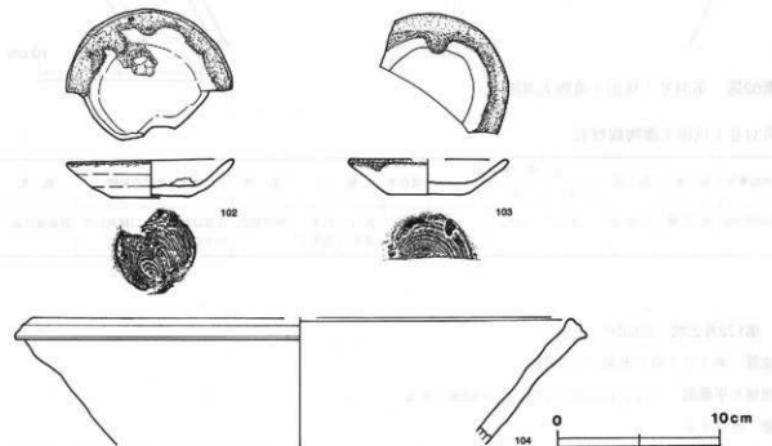
1層	色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
2層	色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
3層	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
4層	褐	ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック少量
5層	色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量
6層	色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量

遺物 陶器片3点が出土している。第61図102・103は小皿で、いずれも中央部の底面から出土している。104は常滑の片口鉢片で、覆土中層から出土している。

所見 本跡から出土した片口鉢は第10型式または第11型式、小皿は16世紀中葉以前の挟み皿と考えられる。したがって、時期は15世紀後葉から16世紀中葉と考えられる。性格については不明である。



第60図 第33・34号土坑実測図



第61図 第33号土坑出土遺物実測図

第33号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 形	器質	計測 値 (cm)				残存率	胎 土 色	胎 軸	文様・特徴	産地・年代	備 考
			A	B	C	D						
第61図 102	挟み皿	陶器	10.3	2.4	4.8	—	60%	黄 灰 暗 オリーブ	縁部灰軸 底部回転糸切り痕。	廻戸・美濃系 16C代	P L14. 内面 にトナン痕有	
103	挟み皿	陶器	[9.8]	2.2	4.4	—	50%	灰 黄	縁部灰軸 底部回転糸切り痕。	廻戸・美濃系 16C代	P L14	
104	片口鉢	陶器	[33.0]	(7.8)	—	—	5%	にぶい褐色 にぶい赤褐色	口縁端部断面「T字状」を呈する。	常滑 10型式		

第34号土坑（第60図）

位置 第1号土壙の内側、C 3 d3区。

重複関係 西部で第33号土坑を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

規模と平面形 径が1.2mの円形、深さ55cmである。

壁 細やかに立ち上がる。

底面 扁状である。

覆土 3層からなる。堆積状況については不明である。

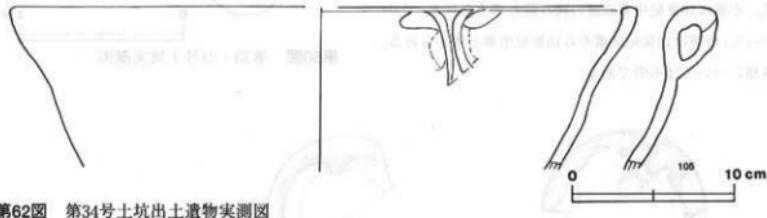
土層解説

- | | |
|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |

- | | |
|-------|----------------------|
| 3 黄褐色 | ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量 |
|-------|----------------------|

遺物 土師質土器1点が出土している。第62図105は内耳鍋で、覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土した遺物から15世紀後葉から16世紀中葉と考えられる。性格については不明である。



第62図 第34号土坑出土遺物実測図

第34号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)			残存率	胎 土	色 調	器形・手法の特徴	備 考
			A	B	C					
第62図105	内耳鍋	土師質	[37.2]	(10.2)	—	5%	長石・石英・雲母・赤色粒子	暗赤褐色	体部は外傾し、口縁部は直立する。	外面漆付着

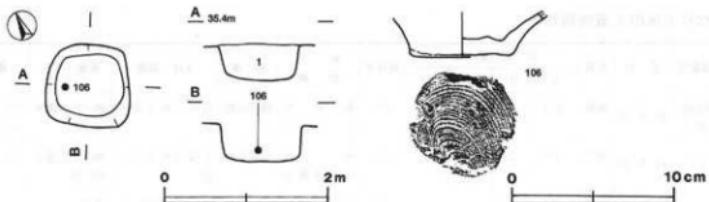
第122号土坑（第63図）

位置 第1号土壙の南側、C 3 j1区。

規模と平面形 一辺が1.05mの方形、深さ42cmである。

壁 直立する。

底面 平坦である。



第63図 第122号土坑・出土遺物実測図

覆土 1層である。一度に埋め戻された層とみられることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 棚 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量

遺物 土師質土器(小皿)1点が出土している。第63図106は小皿で、中央部の底面から出土している。

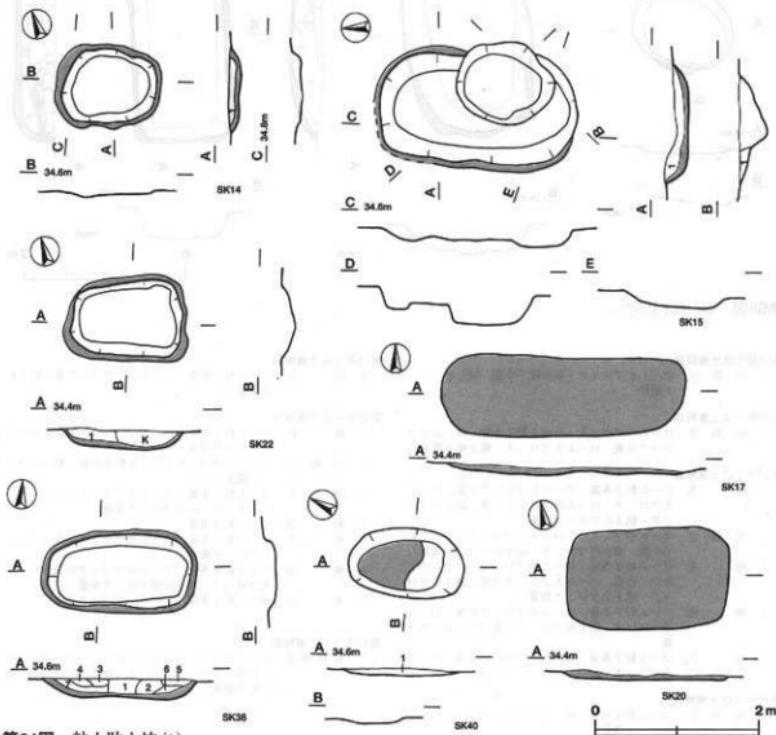
所見 時期は、出土した小皿から16世紀中葉から16世紀後葉と考えられる。性格については不明である。

第122号土坑出土遺物観察表

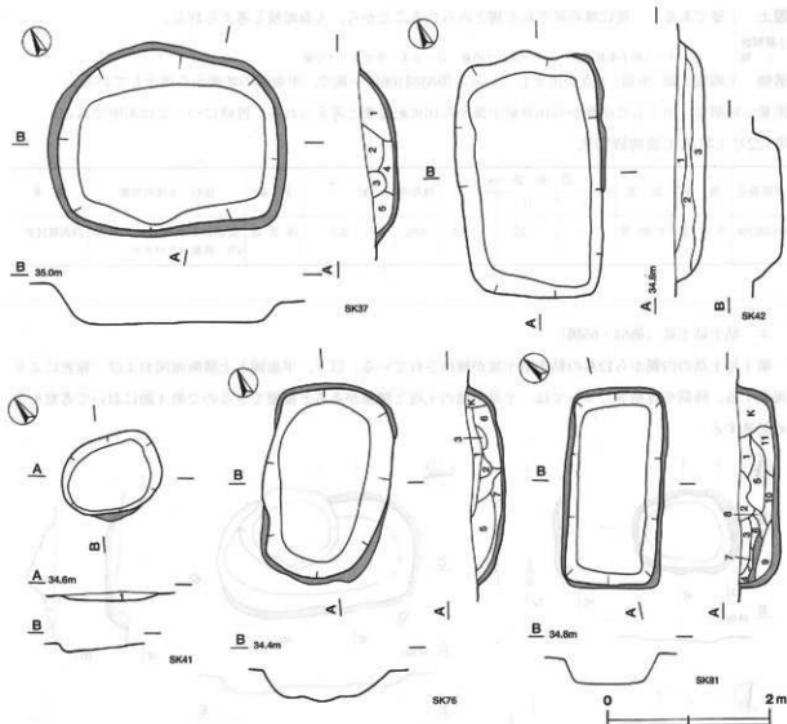
国版番号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)			残存率	胎 土	色 調	器形・手法の特徴	備 考
			A	B	C					
第63図106	小 皿	土 師 質	—	(2.7)	5.9	20%	長石・雲母	浅 黄 色	底部回転糸切り痕。体部 内・外側ロクロナギ。	内面保付着

エ 粘土貼土坑(第64・65図)

第1号土壙の内側から12基の粘土貼土坑が検出されている。以下、平面図と土層断面図および一覧表により掲載する。時期や性格等については、土壙や他の土坑と関係があると推察できるので第4節において考察を含め記述する。



第64図 粘土貼土坑(1)



第65図 粘土貼土坑(2)

第14号土坑土層解説

- 暗褐色 ローム小ブロック・粘土粒子中量、粘土小ブロック微量

第22号土坑土層解説

- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量。ローム大ブロック・粘土粒子微量

第37号土坑土層解説

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量、粘土中ブロック・粘土小ブロック微量

- 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量、粘土中ブロック・粘土小ブロック微量

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、粘土中ブロック・粘土小ブロック微量

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量

第40号土坑土層解説

- 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、粘土中ブロック微量

第15号土坑土層解説

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、粘土粒子微量

第38号土坑土層解説

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

- 褐色 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、粘土小ブロック微量

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック多量

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック微量

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量

- 褐色 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

第41号土坑土層解説

- 無褐色 色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量

第42号土坑土層解説

- 1 黄 色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子多量、粘土小ブロック少量
- 2 黄 色 粘土小ブロック多量、ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
- 3 喙 棕 色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量、粘土小ブロック微量

第76号土坑土層解説

- 1 黄 色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
- 2 黄 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、粘土小ブロック微量
- 3 棕 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
- 4 棕 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック微量
- 5 喙 棕 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 6 喙 棕 色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 7 喙 棕 色 ローム粒子多量
- 8 喙 棕 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 9 喙 棕 色 ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 10 喙 棕 色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 11 喙 棕 色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量

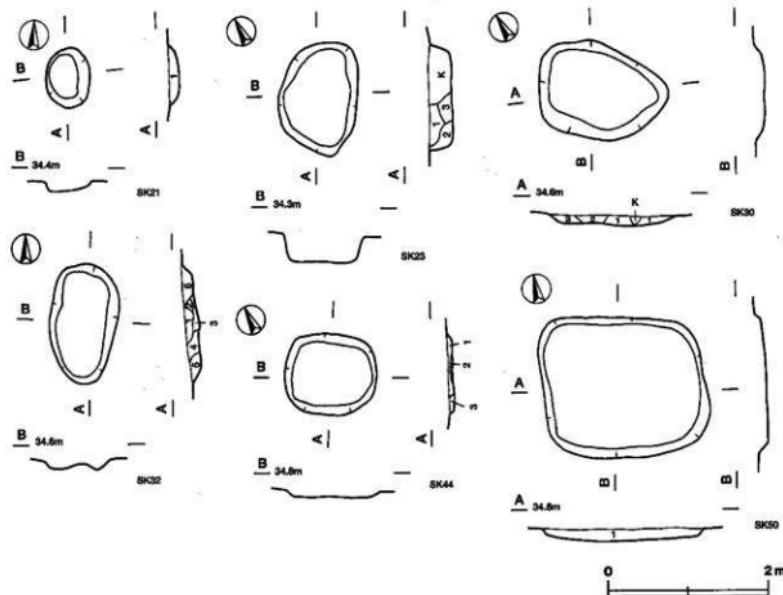
第81号土坑土層解説

- 1 喙 棕 色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 2 喙 棕 色 ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 3 喙 棕 色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
- 4 喙 棕 色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 5 喙 棕 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
- 6 喙 棕 色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 7 喙 棕 色 ローム粒子多量
- 8 喙 棕 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 9 喙 棕 色 ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 10 喙 棕 色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 11 喙 棕 色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量

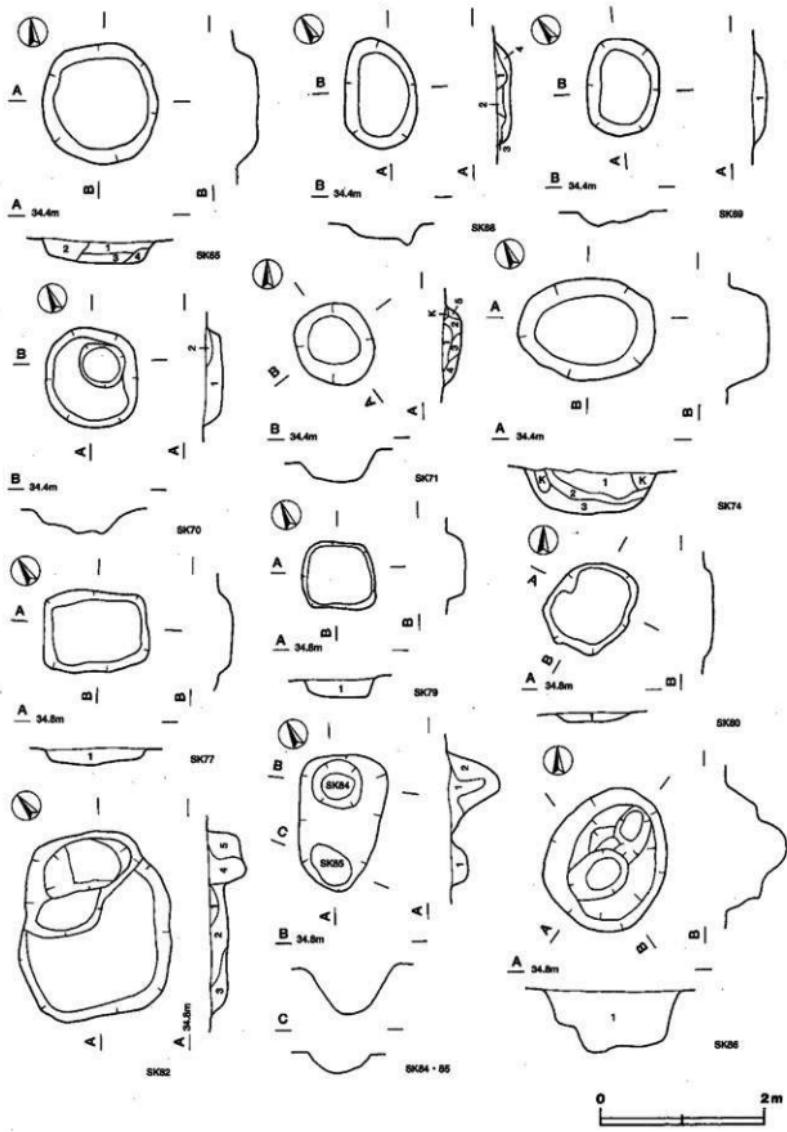
4 その他の遺構 (第66~71図)

検出された遺構の中には、遺物が出土していないために時期不明の土坑(44基)と溝(4条)がある。これらの遺構については、平面図と土層断面図及び一覧表にて記載する。

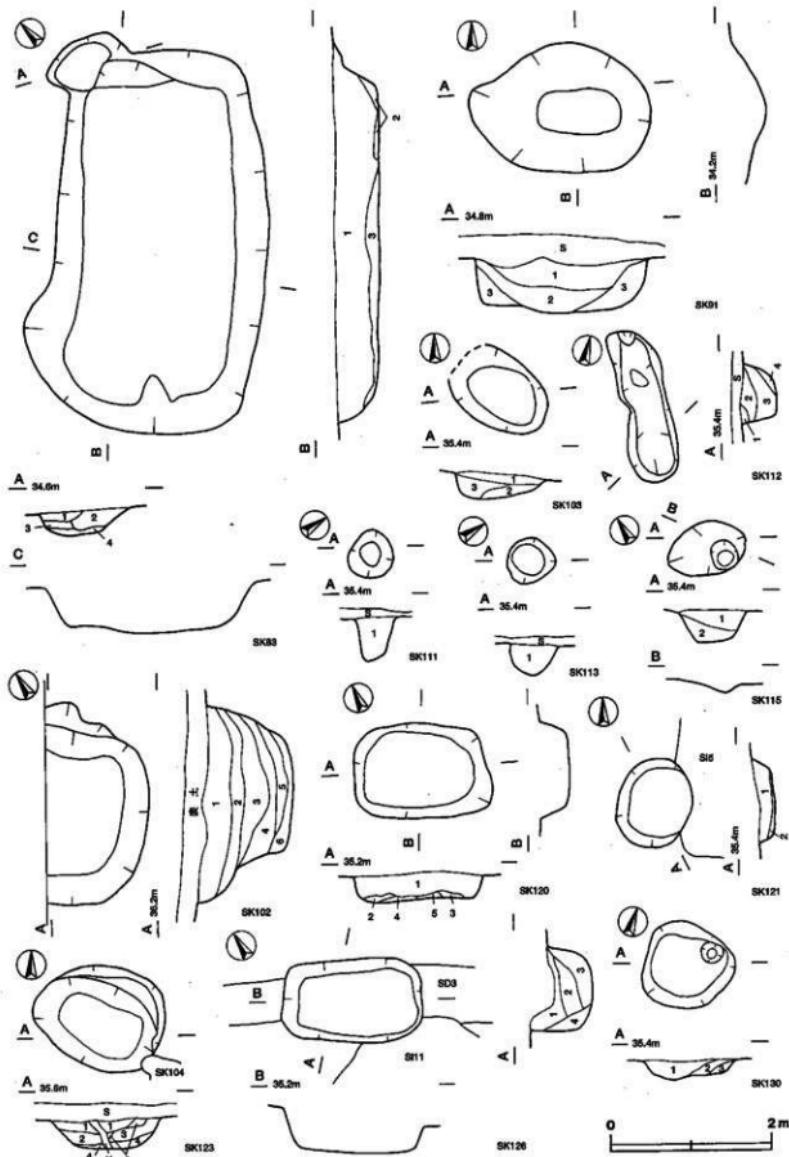
(1) 土坑



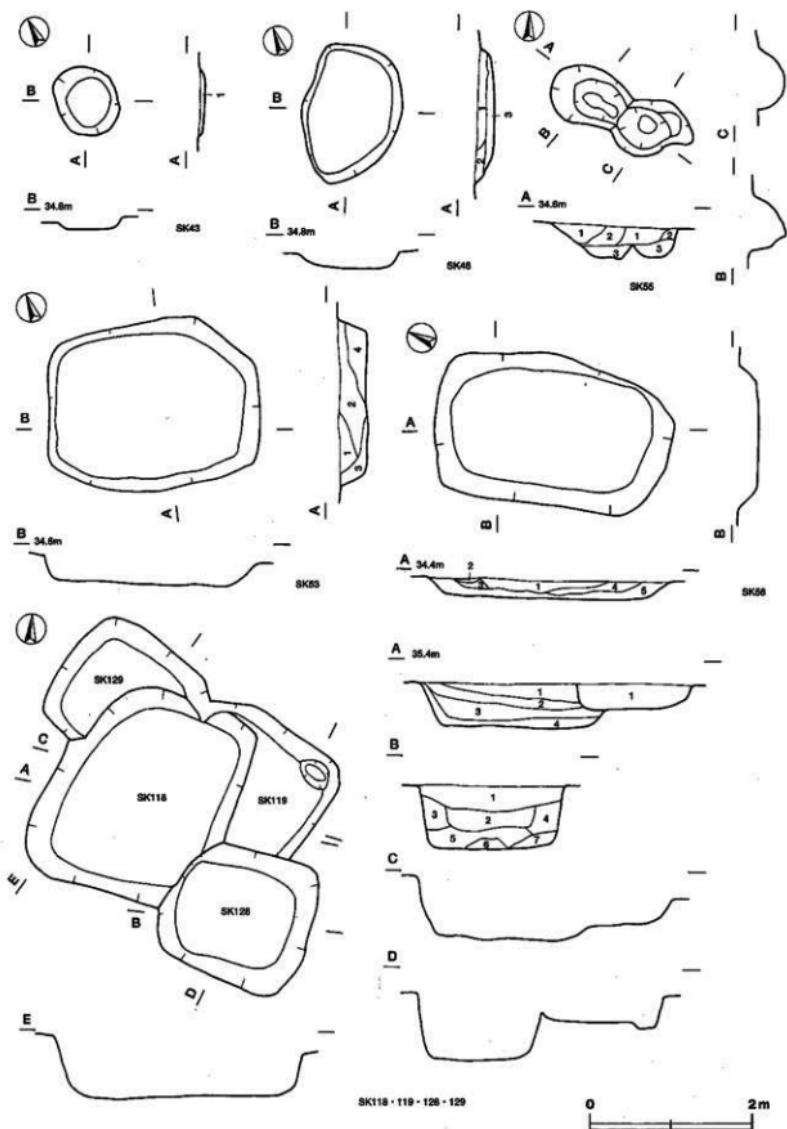
第66図 その他の土坑(1)



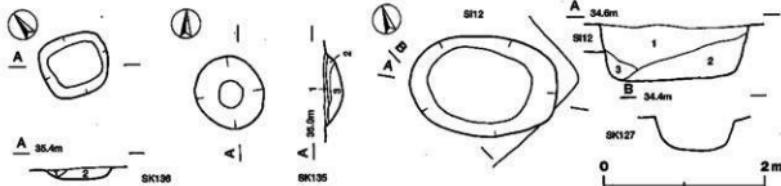
第67図 その他の土坑(2)



第68図 その他の土坑(3)



第69図 その他の土坑(4)



第70図 その他の土坑(5)

第21号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、粘土小ブロック少量

第23号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・焼土中ブロック・炭化物微量

2 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・粘土小ブロック微量

3 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量

第32号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量

2 埋褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

3 埋褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

4 埋褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

5 埋褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

6 埋褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

第48号土坑土層解説

1 明褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土中ブロック多量

2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

3 褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子少量

第53号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量

2 褐色 ローム中ブロック多量、ローム小ブロック中量、粘土小ブロック少量

3 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

4 明褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量

第56号土坑土層解説

1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量

2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、燒土粒子微量

4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量

第68号土坑土層解説

1 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量、ローム中ブロック微量

第70号土坑土層解説

1 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム大ブロック微量

2 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量

第30号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量

2 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

3 埋褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

第43号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム粒子多量

第44号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

2 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

3 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量

第50号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

第55号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

2 埋褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

3 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

第65号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

2 埋褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

3 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、粘土粒子微量

4 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

第69号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

第71号土坑土層解説

1 埋褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量

2 埋褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

3 埋褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量

4 埋褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

5 埋褐色 ローム粒子多量

第74号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量
- 2 黒 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 墓 梶 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

第80号土坑土層解説

- 1 黒 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子微量

第82号土坑土層解説

- 1 暗 梶 梶 色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、粘土大ブロック微量
- 2 灰 梶 色 粘土大ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 墓 梶 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 4 暗 暗 梶 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量
- 5 暗 梶 色 粘土小ブロック中量、ローム小ブロック・粘土粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

第86号土坑土層解説

- 1 墓 梶 色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土大ブロック多量、粘土粒子少量

第102号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 梶 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 3 梶 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 4 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、燒土小ブロック・燒土粒子少量
- 5 梶 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子中量
- 6 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子中量

第112号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 2 梶 色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 3 墓 梶 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
- 4 墓 梶 色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

第116号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量、粘土小ブロック微量
- 2 梶 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量、粘土中ブロック微量
- 3 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック中量
- 4 梶 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量

第121号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 2 梶 色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量

第123号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 2 梶 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 3 梶 色 ローム粒子多量、炭化粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 墓 梶 色 ローム粒子・炭化粒子中量、燒土小ブロック・燒土粒子・炭化物少量

第127号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・ローム小ブロック中量
- 2 暗 暗 梶 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、燒土小ブロック微量
- 3 墓 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量

第77号土坑土層解説

- 1 梶 暗 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

第83号土坑土層解説

- 1 梶 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 梶 色 ローム粒子少量
- 3 梶 暗 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第84号土坑土層解説

- 1 暗 暗 梶 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック多量、粘土小ブロック少量
- 2 梶 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土小ブロック多量

第85号土坑土層解説

- 1 黒 梶 色 ローム中ブロック多量、燒土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒 梶 色 ローム粒子中量、燒土粒子微量
- 3 梶 梶 色 ローム粒子少量

第91号土坑土層解説

- 1 梶 梶 色 ローム粒子・粘土粒子多量、粘土小ブロック微量
- 2 梶 梶 色 粘土小ブロック多量、ローム粒子・粘土粒子少量、粘土小ブロック微量
- 3 墓 梶 色 ローム粒子・粘土中ブロック・粘土粒子少量、粘土小ブロック微量

第111号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量

第113号土坑土層解説

- 1 墓 梶 色 ローム小ブロック・粘土粒子中量

第115号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、粘土粒子微量
- 2 墓 梶 色 ローム小ブロック少量、粘土粒子微量

第119号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量

第120号土坑土層解説

- 1 墓 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量、炭化物・炭化粒子微量
- 2 黒 梶 色 炭化物・炭化粒子多量、ローム粒子少量
- 3 黒 梶 色 炭化物・炭化粒子多量、ローム粒子・灰少量
- 4 明 暗 灰 黑 色 灰多量
- 5 未 梶 色 燃土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量

第126号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量、燒土小ブロック・炭化物微量
- 2 墓 梶 色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 梶 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 4 墓 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・燒土粒子微量

第130号土坑土層解説

- 1 梶 色 ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 2 梶 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 梶 色 ローム粒子中量

第128号土坑土層解説

- 1 黄 色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
- 2 暗褐 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 3 黄 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 4 褐 色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 5 黄 色 ローム粒子多量、ローム大ブロック微量、ローム中ブロック少量
- 6 暗褐 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 7 暗褐 褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

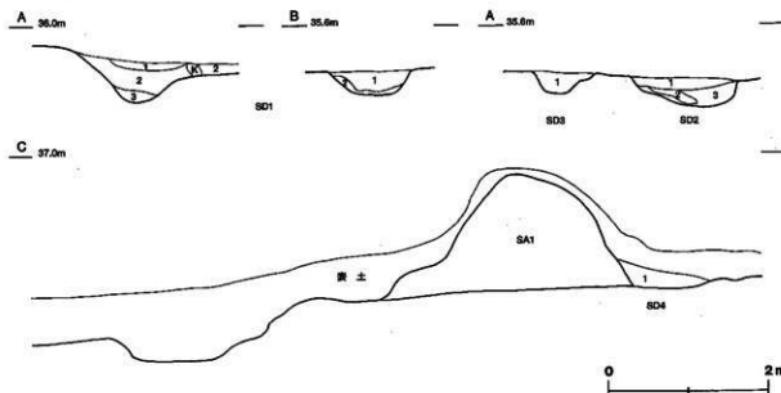
第131号土坑土層解説

- 1 黄 色 ローム粒子微量
- 2 暗 色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 暗褐 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、燒土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、燒土小ブロック微量

第135号土坑土層解説

- 1 暗褐 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、燒土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、燒土小ブロック微量

(2) 溝



第71図 第1～4号溝土層断面図

第1号溝土層解説 (S P A)

- 1 黄 色 ローム粒子多量、炭化粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 褐 色 ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 3 黄 色 ローム粒子多量

第1号溝土層解説 (S P B)

- 1 黄 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 2 黄 色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

第2号溝土層解説

- 1 黑褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 3 黄 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

第3号溝土層解説

- 1 黄 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

第4号溝土層解説

- 1 黄 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

5 津賀城跡遺構一覧表

表2 住居跡一覧表

編 號 號	位 置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長緯×短緯)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設			覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)	
							壁 厚 (cm)	柱 穴 (cm)	柱 穴 (cm)				
1	D3c2	N-50°-E 方	形	5.80×5.50	20~30	凹凸	—	4	1	—	甃	人為 土師器(环-高-甃)	本蔵-SK101
2	D2b0	N-45°-W 長方形		7.72×9.93	10~30	平坦	—	4	1	1	甃	自然 土師器(环-高-甃), 土製品(環状土罐)	S5→本蔵-SK114·116
3	D3e1	N-32°-W 長方形		8.66×7.57	15~40	平坦	金周	4	—	3	—	自然 土師器(环-高-甃), 石製品(砾石), 瓦製品(瓦孔円筒)	本蔵-SK130·131
4	D2e9	N-25°-W 方 形		5.22×4.95	17~30	凹凸	—	4	1	—	甃	自然 土師器(环-高-甃), 石製品(砾石-骨築率), 瓦製品(瓦孔円筒)	本蔵-SI3·SK121·SD1
5	D2g0	N-10°-E 方 形		5.25×5.25	5~25	平坦	—	3	1	1	甃	自然 土師器(环-高-甃)	

位 置 番 号	主軸方向	平 面 形	規 模 (m) (長軸×短軸)	標 高 (cm)	底 面	内 部 施 設				覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古～新)	
						壁 溝	主柱穴	火 坑	炉 竈	防風穴			
6	D3j1	N-28°-E	方 形	6.50×6.00	20-40	平坦	一部	4	1	1	炉	— 自然 土器(环)	本跡→SK125
7	E2c6	N-41°-E	英方形	5.62×5.52	30-72	平坦	全周	4	1	—	竈	— 自然 土器(环-甕-瓶), 土製品(球状土錐)	SI13→木蔵→SK117
8	C33	N-45°-W	不明	3.74×3.05	10-20	平坦	—	1	—	竈	— 不明 土器(环-甕-壺-瓶), 土製品(球状土錐)	本跡→SA1	
9	D2h7	N-26°-W	方 形	5.84×5.76	18-35	平坦	—	4	1	—	竈	— 自然 土器(环), 順應器(竈), 土製品(車狀土錐)	
10	C36	不 明	不明	[6.60] × —	20	不明	—	3	—	—	不明	— 自然 土器(环-甕)	本跡→SA1・SD4
11	D28	N-25°-W	方 形	6.60×6.50	20-28	平坦	一部	4	—	—	炉	— 自然 土器(环), 土製品(球状土錐-管状土錐)	本跡→SI12・SI14
12	E2a8	N-22°-W	方 形	7.32×6.56	20-50	平坦	一部	4	1	—	不明	— 自然 土器(环-高环-甕), 手捏土器, 土製品(球状土錐)	SI1→本跡→SK127
13	E2a6	N-18°-W	方 形	7.66×7.43	40	凹凸	全周	4	—	—	竈	— 自然 土器(环-甕), 順應器(竈), 土製品(球状土錐), 石製品(砾石), 瓷造品(白玉)	本跡→SI7・SI14
14	D27	N-17°-W	長方形	5.80×4.80	12-28	凸凹	—	4	1	—	竈	— 自然 土器(环-甕-壺), 順應器(長颈瓶), 鉄製品(歛先)	SI11・13→本跡
15	D2d0	N-28°-W	方 形	6.10×6.00	15-20	凹凸	一部	4	—	—	炉	— 人為 土器品(甕), 土製品(球状土錐), 石製品(瓦孔板)	本跡→SK107・108
16	B3h9	N-45°-W	英方形	4.40×3.50	50-55	平坦	一部	4	1	1	竈	— 自然 土器(甕)	
17	D2b8	N-27°-E	不明	4.66×(2.20)	20-30	平坦	—	2	—	—	炉	— 自然 土器(环-甕-瓶), 土製品(支脚)	

表3 黏土貼土坑一覧表

土坑 番号	位 置	長 径 方 向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古～新)	
				長径(輪)×短径(輪)(m)	深さ(cm)						
14	C 3 f2	N-66°-W	椭 圆 形	1.29	0.99	13	緩 斜	凹 凸	人 為	—	本跡→SK16
15	C 3 f3	N-8°-E	椭 圆 形	2.50	1.49	13	緩 斜	平 坦	人 為	—	
17	C 3 f4	N-82°-W	椭 丸 長 方 形	2.90	0.95	—	緩 斜	平 坦	人 為	—	
20	C 3 f5	N-81°-W	椭 丸 長 方 形	2.00	1.15	—	緩 斜	平 坦	人 為	—	
22	C 3 g5	N-75°-W	椭 丸 長 方 形	1.43	0.97	17	緩 斜	平 坦	人 為	—	
37	C 3 c3	N-90°-W	椭 圆 形	[2.90] × 2.33	38	緩 斜	直 状	人 為	—		
38	C 3 d4	N-82°-E	椭 丸 長 方 形	1.91	0.99	18	緩 斜	直 状	人 為	—	
40	C 3 d5	N-22°-E	椭 圆 形	1.44	0.80	14	緩 斜	平 坦	人 為	—	
41	C 3 d5	N-74°-W	椭 圆 形	1.17	1.00	14	緩 斜	平 坦	人 為	—	
42	C 3 c5	N-21°-E	椭 丸 長 方 形	3.00	1.69	38	緩 斜	直 状	人 為	—	
76	C 3 b6	N-29°-E	椭 圆 形	2.43	1.56	37	緩 斜	直 状	人 為	—	
81	B 4 b5	N-60°-E	椭 丸 長 方 形	2.24	1.24	48	垂 直	平 坦	人 為	—	

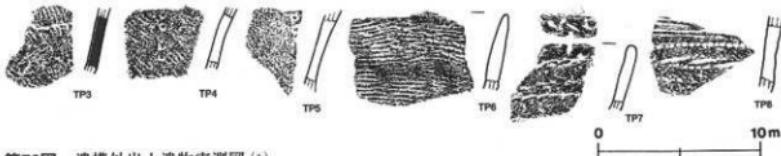
表4 土坑一覧表

土坑 番号	位 置	長 径 方 向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古～新)	
				長径(輪)×短径(輪)(m)	深さ(cm)						
21	C 3 f4	N-3°-W	椭 圆 形	0.73	0.53	12	緩 斜	直 状	不 明	—	第1号土壙内
23	C 3 h6	N-34°-E	椭 圆 形	1.36	0.94	13	垂 直	平 坦	人 為	—	第1号土壙内
30	C 3 e3	N-41°-W	椭 圆 形	1.60	1.11	12	緩 斜	凹 凸	不 明	—	第1号土壙内
32	C 3 d4	N-6°-E	椭 圆 形	1.46	0.82	13	緩 斜	凹 凸	人 為	—	第1号土壙内
43	C 3 c5	N-20°-W	椭 圆 形	0.88	0.78	12	外 缓	平 坦	不 明	—	第1号土壙内
44	C 3 c4	N-57°-W	椭 圆 形	1.11	0.98	9	緩 斜	平 坦	不 明	—	第1号土壙内
48	C 3 z4	N-65°-W	椭 圆 形	1.68	1.24	20	緩 斜	直 状	人 為	—	第1号土壙内
50	C 3 b5	N-81°-W	椭 丸 長 方 形	1.99	1.72	15	外 缓	平 坦	人 為	—	第1号土壙内
53	C 3 d6	N-70°-W	椭 丸 長 方 形	2.58	2.08	31	緩 斜	平 坦	自 然	—	第1号土壙内
55	C 3 e6	N-61°-W	椭 圆 形	1.28	0.78	42	緩 斜	凹 凸	不 明	—	第1号土壙内
56	C 3 e6	N-14°-W	椭 丸 長 方 形	2.95	1.82	22	外 缓	平 坦	人 為	—	第1号土壙内

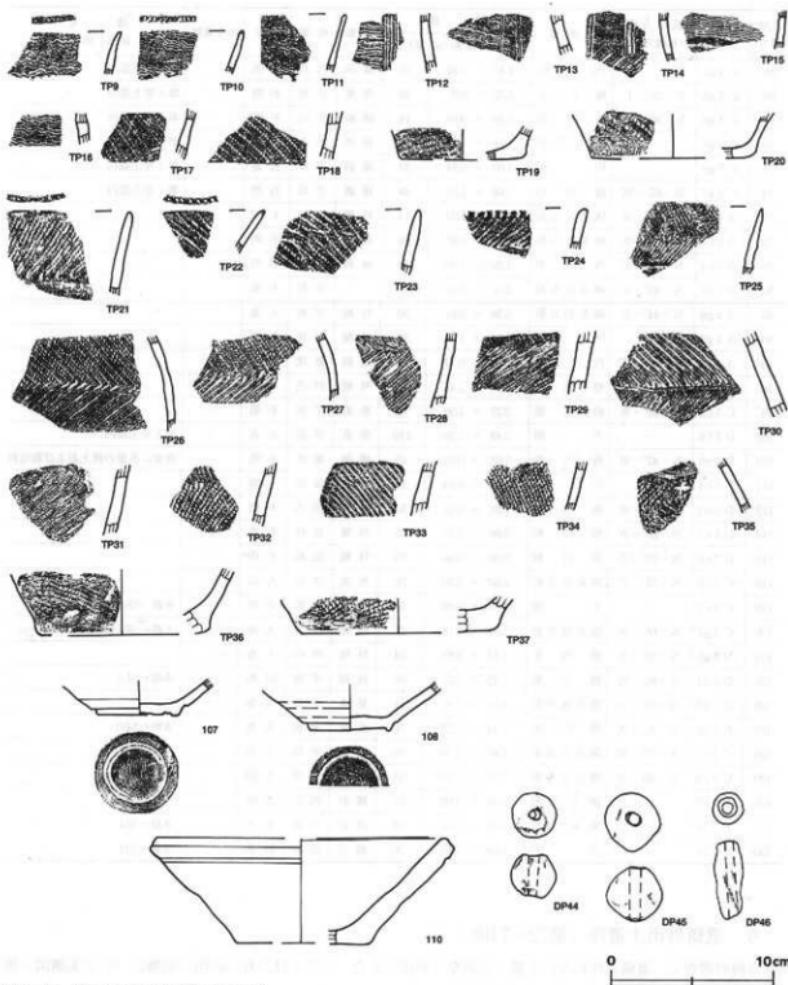
土坑 番号	位 置	長径 方向 (長軸 方向)	平 画 形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出土遺物	備 考 新旧関係
				長径(輪)×短径(輪)(m)	深さ(cm)					
65	C 3 g5	—	円 形	1.47 × 1.40	25	緩 斜	凹 凸	不明	—	第1号土壙内
68	C 3 g6	N-28°-E	椭 圆 形	1.37 × 0.87	20	外 傾	平 坦	不明	—	第1号土壙内
69	C 3 g6	N-36°-E	椭 圆 形	1.19 × 0.89	14	緩 斜	凹 凸	不明	—	第1号土壙内
70	C 3 g6	—	隅 丸 方 形	1.18 × 1.11	28	緩 斜	凹 凸	不明	—	第1号土壙内
71	C 3 g7	—	円 形	1.03 × 0.94	32	緩 斜	平 坦	人為	—	第1号土壙内
74	C 3 g7	N-67°-W	椭 圆 形	1.68 × 1.26	48	緩 斜	平 坦	自然	—	第1号土壙内
77	A 4 b4	N-56°-W	隅 丸 長 方 形	1.31 × 1.03	14	外 傾	平 坦	不明	—	
79	A 4 b4	N-58°-W	隅 丸 長 方 形	0.89 × 0.80	25	緩 斜	平 坦	不明	—	
80	A 4 i 4	N-51°-E	椭 圆 形	1.20 × 1.00	10	緩 斜	平 坦	不明	—	
82	A 4 h7	N-43°-E	隅 丸 長 方 形	2.37 × 1.82	—	—	平 坦	不明	—	
83	A 4 g6	N-44°-E	隅 丸 長 方 形	5.36 × 2.61	59	外 傾	平 坦	人為	—	
84	A 4 g7	—	円 形	1.06 × 1.04	58	外 傾	皿 状	不明	—	
85	A 4 g7	N-36°-W	円 形	0.76 × 0.72	21	緩 斜	皿 状	不明	—	
86	A 4 g7	N-40°-E	椭 圆 形	1.70 × 1.48	73	外 傾	凹 凸	不明	—	
91	C 3 j 5	N-87°-W	椭 圆 形	2.27 × 1.56	73	垂直	平 坦	不明	—	
102	D 2 f5	—	不 明	2.48 × (1.26)	110	垂直	平 坦	人為	—	第1号土壙内
103	D 3 b6	N-47°-W	椭 圆 形	1.28 × 0.86	33	緩 斜	皿 状	不明	—	底面に多量の洗土および炭化材
111	D 3 e1	—	円 形	0.58 × 0.54	27	—	皿 状	不明	—	
112	D 3 e1	N-29°-W	椭 圆 形	1.88 × 0.47	40	外 傾	凹 凸	不明	—	
113	D 3 e1	N-20°-W	椭 圆 形	0.60 × 0.53	15	外 傾	皿 状	不明	—	
115	D 2 e0	N-72°-W	椭 圆 形	0.98 × 0.66	23	外 傾	皿 状	不明	—	
118	C 2 i 0	N-21°-E	隅 丸 長 方 形	2.60 × 2.20	76	垂直	平 坦	人為	—	
119	C 3 i 1	—	不 明	(1.67) × (0.99)	35	外 傾	平 坦	不明	本跡→SK119	
120	C 3 g1	N-66°-W	隅 丸 長 方 形	1.64 × 1.18	37	外 傾	平 坦	人為	本跡←SK118	
121	D 2 g9	N-26°-E	椭 圆 形	1.13 × 0.89	24	外 傾	凹 凸	人為	—	本跡←SD3
123	D 2 b1	N-62°-W	椭 圆 形	1.53 × 1.27	56	外 傾	平 坦	自然	—	本跡←SI5
126	D 2 h9	N-62°-W	隅 丸 長 方 形	1.70 × 1.02	51	垂直	平 坦	人為	—	
127	E 2 a9	N-45°-W	椭 圆 形	1.24 × 1.22	70	垂直	平 坦	人為	—	
128	C 2 i 0	N-72°-W	隅 丸 長 方 形	1.81 × 1.49	76	垂直	平 坦	人為	—	本跡←SI12
129	C 2 j 0	N-60°-W	隅 丸 長 方 形	(1.55) × (1.51)	31	緩 斜	平 坦	不明	—	本跡←SK128
130	D 2 f8	—	隅 丸 方 形	1.08 × 1.02	24	緩 斜	凹 凸	不明	—	本跡←SK118
131	D 2 f8	—	隅 丸 方 形	0.88 × 0.80	18	緩 斜	平 坦	不明	—	本跡←SI4
135	F 2 f6	—	円 形	0.89 × 0.88	20	緩 斜	皿 状	自然	—	本跡←SI4

6 遺構外出土遺物（第72～74図）

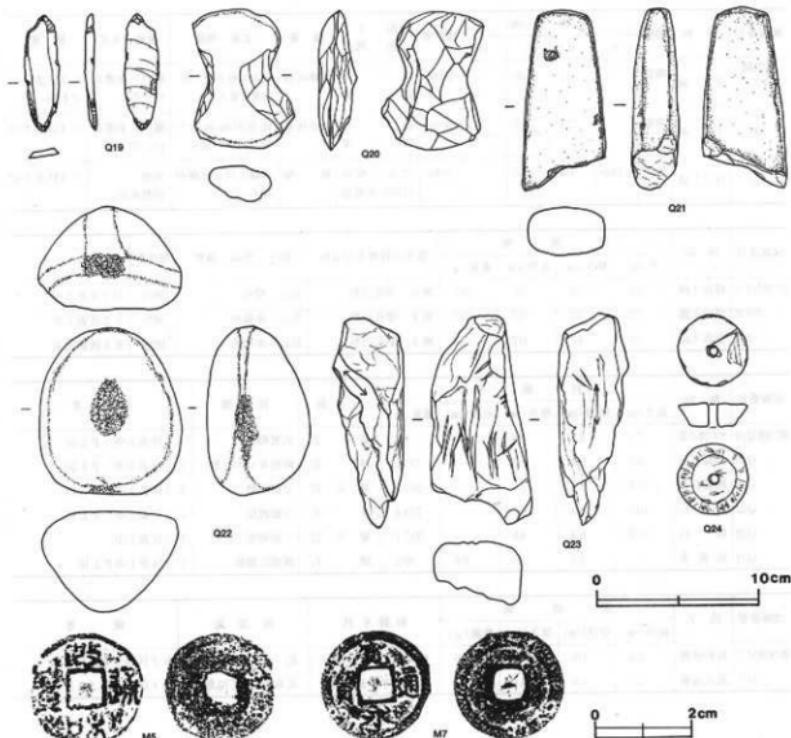
今回の調査で、遺構に伴わない土器・石器などが出土した。ここではこれらの出土遺物について実測図・拓影図および一覧表を掲載する。



第72図 遺構外出土遺物実測図(1)



第73図 遺構外出土遺物実測図(2)



第74図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表

回版番号	時 期	形 式	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
第72回 TP 3~8	繩 文 時 代 前 期 前 末 前 期 中 末	黒 漆 式 諸 磚 式 洋 鳥 式	TP 3は刷部片で縄文が施されている。胎土に纖維を含む。 TP 4・5は頭部から口部にかけての板片である。単節縄文が施され、環方向に円形の竹管文が施されている。 TP 6~8は口縁部片である。TP 6には捺条文が、TP 7には波状貝紋が、TP 8は貝紋文と牛段竹管による平行沈継が施されている。	E 2区表土中 PL15 E 2区表土中 PL15
第73回 TP 9~37	彌 生 時 代 後 期 後 末	十 王 台 式 不 明	TP 9~11は口縁部片。TP 12~16は刷部片。TP 17~18は刷部片。TP 19~20は底部片である。TP 9~11の形状は縦や外に反している。いずれも3本。または4本の縄状工具により波状文が施されている。TP 9の口唇部には縄文原体による押压が、TP 10の口唇部にはヘラ状工具による削みが施されている。TP 12~13には縦方向の平行沈継と波状文が、TP 14には縦方向の平行沈継が、TP 15~16には波状文がそれぞれ施されている。TP 15には隆起が貼られている。TP 17~20には附加条縄文が施されている。底部の文様は不明である。 TP 21~25は口縁部片。TP 26~35は刷部片。TP 36~37は底部片である。TP 21の口唇部には縄文原体による押压が、TP 22の口唇部にはヘラ状工具による削みが施されている。TP 26~29、TP 30~31はそれぞれ同一器体である。いずれも附加条縄文が羽状に施されている。TP 35には波状文が施されている。TP 36~37には附加条の縄文が施されている。底部の文様は不明である。	C 3区表土中 PL15 C 3区表土中 PL15

図版番号	器 形	器質	計 測 値 (cm)				残存率	胎 土 調	胎 面	文様・特徴	産地・年代	備 考
			A	B	C	D						
第73図 107	平 瓶	陶器	—	(2.2)	5.0	—	20%	浅 浅	黄 黄	内面灰釉 底部鉛糸切り痕。 内面に貫入。	蘆戸・美濃系 15C代	C 3 区表土中 P L14
108	平 瓶	陶器	—	(2.9)	[5.0]	—	50%	浅 浅	黄 黄	内面灰釉 底部鉛糸切り痕。 内面に貫入。	蘆戸・美濃系 15C代	C 3 区表土中
110	片口鉢	陶器	[18.0]	6.4	[8.0]	—	10%	にぶい橙色 にぶい赤褐色	铁 铁	口縁下位に沈縫が 通る。	常滑	C 3 区表土中 10型式か

図版番号	種 別	計 測 値				器形の特徴及び文様	胎 土・色調・調整	現存率	備 考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第73図 D 24	球状土錠	2.8	2.6	0.6	18.1	無文。穿孔円形。	長石、橙色	98%	D 2 区表土中
D 25	球状土錠	3.5	3.3	0.7	34.7	無文。穿孔円形。	長石、赤褐色	98%	E 2 区表土中
D 26	管状土錠	1.9	4.7	0.7	13.4	無文。穿孔円形。	長石、赤褐色	98%	E 2 区表土中

図版番号	種 別	計 測 値					石 質	特 徵	備 考
		長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第74図 Q 19	ナワ形石斧	7.1	2.2	0.8	—	8.8	頁岩	灰黄褐色	C 2 区表土中, P L16
Q 20	打製石斧	8.5	6.2	2.3	—	125.1	砂岩	断面カマボコ形	C 2 区表土中, P L16
Q 21	磨製石斧	(11.1)	5.1	3.1	—	(263.3)	凝灰岩	全面研磨	B 3 区表土中, P L16
Q 22	磨 石	10.2	8.8	6.5	—	774.4	砂岩	3面使用	C 2 区表土中, P L16
Q 23	砥 石	(12.9)	6.4	4.5	—	(317.1)	凝灰岩	2面使用	B 3 区表土中
Q 24	鍛 鋼 草	—	4.3	1.5	0.6	39.2	滑石	側面に削痕	C 2 区表土中 P L16

図版番号	銘 名	計 測 値				初 鋒 年 代	鋲 造 地	備 考
		銘径(cm)	穿径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第74図 M 5	政和通寶	2.3	0.8	0.1	2.6	政和元年(1111年)	北 宋	E 2 区表土中, P L16
M 7	寛永通寶	2.3	0.8	0.1	2.4	元禄10年(1697年)	武藏野国江戸亀戸	A 4 区表土中, P L16

第4節 まと め

今回の調査によって、堅穴住居跡17軒、土坑62基、溝4条、土塁2基が確認された。ここでは、調査した中・近世の遺構と津賀城との関係を調査結果や関連史料から考察し、さらに古墳時代の堅穴住居跡の検出状況と出土した遺物について、その特徴を記述することによってまとめとする。

1 津賀城

(1) 構造の概要

津賀城は、東北から北浦へ向けて半島状に突き出す台地に立地する平山城である。津賀城の立地する台地は、標高33~36mで、各方面からそれぞれ谷が入り込むことにより、西台地(郭I)、中央台地(郭II)、東台地(郭III)から形成されている。主郭は郭Iに立地し、東側に堀切を挟んで郭II、さらに東側の郭IIIと連なる。以前は郭Iの南部にも、台地があったが土採りにより削平され、形状は不明となっている。

(2) 各郭の状況

主郭が立地する郭Iは、舌状台地端部に位置する。台地の西部と北部は、北浦湖岸から続く低地が入り込み谷を形成している。比高は25mほどである。

土壘に囲まれた主郭部分は、長径90m、短径25~35mほどで椭円形の長径方向を「く」の字状に屈曲させたような形状をしている。主郭を取り囲む土壘は、基部幅3~4m、高さは2~3.5mである。南側の土壘は「く」の字状に開いて開口し、この部分は南側の郭Ⅱと連携していることから虎口と考えられる。虎口の前方の帯曲輪には、土盛りの痕跡が残っており、土橋があったことが推測される。さらにその前方には郭Ⅰと郭Ⅱを分断する堀切が南北に延びている。

土壘上部から6~7m低いところに幅8mほどの帯曲輪が巡っている。南側は土採りにより削平されている。この曲輪から斜面をさらに17~19mほど下った地点が谷部となっている。この斜面の北西部には長さ30m、幅6mほどの平場が、南東部には堀切に沿って一辺が15mほどの方形の平場が、さらに南西部には長さ20m、幅3~4mほどの縱堀がある。

今回の調査区域は、郭Ⅲの部分である。第1号土壘と南側に隣接する第2号土壘は、主郭から郭Ⅱを挟んで南東へ150mほどの郭Ⅲの中央部に位置する。標高は33~37mである。第1号土壘は矩形に土壘を巡らせ、内側は掘り込まれて平坦な構造になっている。古墳時代の住居跡が検出された土壘の南側は、土壘構築時に整地、または土採りをされて平坦になった可能性が高い。これは住居跡の覆土が、広範囲にわたり整地または搅乱されていたことから裏付けられる。したがって土壘は、内側から積き上げられた土と南部の土を盛り土して構築されたと考えらる。

土壘の四隅は、やや突出する形状をしており、他の部分よりも高くなっている。この土壘を内側から観察すると、西隅は1.8~2.2m、その他の部分は1.5~1.8mの高さで均一に巡っている。しかし、土壘の外側から観察すると西側は0.6~1.0m、東側は1.8~2.4mほどの高さになる。土壘が一種の防衛的な機能を持つ施設であるならば、西側よりも東側に防衛の重点を置いて造られた施設と考えることができるが、第1号土壘の内側からは、掘立柱建物等の構造物の存在を示すような遺構は検出されなかった。また、第2号土壘についても両端が削平されており、その性格や第1号土壘との関連については不明である。

郭Ⅲの北側には郭Ⅲと台地を区画するように、西側斜面には長さ約20m、幅約5mほどの縱堀が、東斜面には長さ20m、幅4mほどの土壘¹⁾が現存している。この土壘から帶曲輪が台地の東斜面に沿って南方へ延び、台地南端へ回り込むように続いている。また、この曲輪の中央部、第1号土壘の北東部には15m×15mほどの方形の平場があり、腰曲輪の様相を示している。さらに西斜面の縱堀からも帶曲輪が台地の西斜面に沿って南方へ延び、郭Ⅱから郭Ⅰへ回り込むように続いている。これらの平場・曲輪は、津賀城の構成の一環と考えられる。

次に土壘が機能していた時期について考えてみたい。南側の土壘から常滑の甕の口縁部片が出土している。この甕は第9形式期のものであることから、南側土壘の構築時期は15世紀前半以降である。さらに、後述する土壘内から検出された土坑の中には、流れ出した土壘の盛土を掘り込んでいるものがある。土壘内の土坑は、いくつかに分類できるが、ほぼ同時期のものと考えられ、これらの土坑の中には、15世紀後葉から16世紀後葉の遺物を出土しているものがある。したがって、第1号土壘が何らかの機能を有していた時期は、15世紀前半から16世紀後半までと考えられる。

(3) 土坑

土壘の内側やその周辺から検出された土坑は、堅穴状遺構・火葬土坑・遺物を有する土坑・粘土貼土坑に分類できる。これらの土坑は、中・近世の墓跡とされる遺構からまとまって検出されることが多い。調査区域内においては、骨片が検出されたにすぎないが、遺物を有する土坑は土坑墓で、その他の土坑とともに墓域を形成していたと考えられる。時期は、出土遺物から15世紀後半から16世紀後半までを考えることができる。



第75図 津賀城縄張り図

(4) 文献史料から

津賀城主が、津賀氏であったかどうかの真偽は不明である。その津賀氏が、最初に文献に現れるのは14世紀後半である。「鹿島大使役記」²⁾には元中7年（1390年）、鹿島幹重に代わって鹿島津賀幹能が大使役に任じられたと記されている。また、14世紀後半のものとされる「常陸国海夫注文」³⁾には「かけさきの津、つか知行分」「ぬまりの津、つか知行分」とある。したがって津賀氏は、このころある程度の勢力を持ち鹿島地方に在していたのは明らかである。系譜については不明であるが、当時、鹿島地方は鹿島氏をはじめ、林氏、立原氏、春秋氏等の鹿島一族が館を構え、それぞれに領地を所有していたことから津賀氏も鹿島一族であると考えられる。

また、国分胤政書状⁴⁾には下総の矢作城主である国分胤政が天正6年11月に鹿島郡津賀に移り、同14年3月に帰城したと記されている。さらに畠田旧記⁵⁾には、「津賀殿、宮中より生害との報で要害を開ける。（天正7年・1579年）」「大炊正殿、津賀の要害を出て、江戸の東福寺へ行く。（天正10年・1582年）」という記述がある。文書中の要害のいずれかが津賀城であるならば、津賀城はこの時期に廃城になったと考えられる。

(5) 小結

調査区域は津賀城の郭Ⅲの部分にあたり、東斜面に確認された曲輪・平場は、南方からの勢力に対する防衛施設と考えられる。15世紀前半以降に構築された第1号土塁は、この曲輪・平場の内側に位置していることから、主郭と何らかの関連を持った施設であると考えられる。

その後土塁は、何らかの理由で内部に墓域が形成されることにより、その性格を墓域を区画するものへと変わっていったと考えられる。

2 古墳時代の集落

調査区域から検出された豎穴住居跡は、狭い台地の中央に重なるようにして立地している。時期は出土遺物から、5世紀中葉から6世紀後葉である。おもに集落が形成された時期は、6世紀前葉（6軒）から中葉（7軒）である。これらの住居跡は、いずれも方形または長方形を呈し、その主軸方向を北からやや西に傾けている。規模は、4m前後のものと7m前後の比較的大型のものに分類される。これらの立地や時期、さらに規模や形状は、北側に隣接する五安遺跡、さらには西平遺跡にも認めることができる様相である。また、球状土錐の出土数が多いこともこれらの遺跡との共通点で、漁労を生業の一部としていたことが推察される。したがって当集落は、西平・五安遺跡とともに谷津を取り囲むように形成された一連の集落と考えられる。ただ、当遺跡においては住居の時期の下限が6世紀後葉であるのに対し、西平・五安遺跡では奈良・平安時代の住居跡が検出されている点に相違がある。

5世紀中葉に位置づけられる第17号住居跡から出土した二つの土製支脚は、特異な形状をしている。支脚は円錐形の脚の上部前方に「U字状」の壺を支える腕が付き、後方に把手が付いている。前方の腕部分は、被熱により赤変している。使用時は、この二つを向かい合わせて炉の上に据え、壺を支えていたものと考えられる。このような支脚の一部は、第3・10号住居跡、第101号土坑からも出土しており、今後他の遺跡からも出土することが考えられる。当時の人々がどのような方法で炉と煮炊具を使用していたのかを示す良好な資料のひとつである。

註

- 1) 五安遺跡においては、第1・2・3号溝として報告されている。茨城県教育財團 「国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書1 西平遺跡五安遺跡」『茨城県教育

財團文化財調査報告』第165集 2000年

- 2) 「安得虎子」(『龍ヶ崎市史中世史料編』所収) 龍ヶ崎市育委員会 1995年
- 3) 「香取大福宜文書」(『龍ヶ崎市史中世史料編』所収) 龍ヶ崎市育委員会 1995年
- 4) 「大日本古文書」三(『龍ヶ崎市史中世史料編』所収) 龍ヶ崎市教育委員会 1995年
- 5) 「畠田旧記」(『玉造町史』所収) 玉造町教育委員会 1985年

参考文献

- ・茨城県立歴史館 「茨城県史料考古資料編奈良・平安時代」 茨城県 1992年
- ・茨城県史編さん中世史部会 「茨城県史料中世編Ⅰ」 茨城県 1970年
- ・大野村史編さん委員会 「大野村史」 大野村教育委員会 1983年
- ・鹿島町史編さん委員会 「鹿島町史第一巻」 鹿島町教育委員会 1972年
- ・瀬戸市史編纂委員会陶磁史部会 「瀬戸市史陶磁編」 四 瀬戸市史編纂委員会 1993年
- ・茨城県教育財団 「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書5 前田村遺跡J・K区」『茨城県教財団文化財調査報告』第147集 1999年
- ・大川清ほか 『日本土器辞典』 雄山閣 1996年
- ・櫻村宣行 「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2号 茨城県教育財団 1992年
- ・櫻村宣行ほか 「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 1999年
- ・永井久美男編 『中世の出土銭』 兵庫県藏銭調査会 1994年
- ・白田正子 「茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について一つくば市古屋敷遺跡の出土例を中心にして」『研究ノート』7号 茨城県教育財団 1998年
- ・藤沢良祐 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—』瀬戸市埋蔵文化財センター創立5周年記念シンポジウム 1996年
- ・吉原作平 「中世墓域の検討—谷和原村西ノ脇遺跡を例に見て—」『研究ノート』5号 茨城県教育財団 1996年
- ・中・近世研究班 「茨城の常滑V」『研究ノート』9号 茨城県教育財団 2000年

写 真 図 版



第1号土壙確認状況



第1号住居跡
遺物出土状況

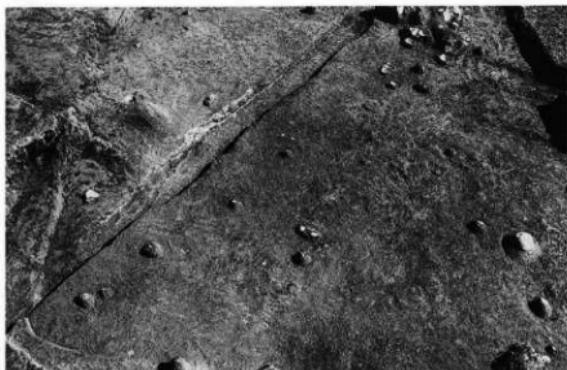


第3号住居跡
完 壕



第3号住居跡
遺物出土状況

PL 2



第4号住居跡
遺物出土状況



第7号住居跡
遺物出土状況



第7号住居跡
完 塚



第7·11·12·13·14号住居跡
完 堀



第11号住居跡
完 堀



第12号住居跡
完 堀



第13号住居跡
竈土層断面



第13号住居跡
完 壁



第14号住居跡
遺物出土状況



第14号住居跡
完 堀



第17号住居跡
遺物出土状況



土坑確認状況



第18号土坑
遗物出土状况



第33号土坑
遗物出土状况



第109号土坑
完 壁

第1号土壠出入口施設
確 認 状 態



第1号土壠
北側土層断面



第2号土壠
土 層 断 面



PL 8



SI2-7



SI2-8



SI3-14



SI4-22



SI1-3



SI1-6

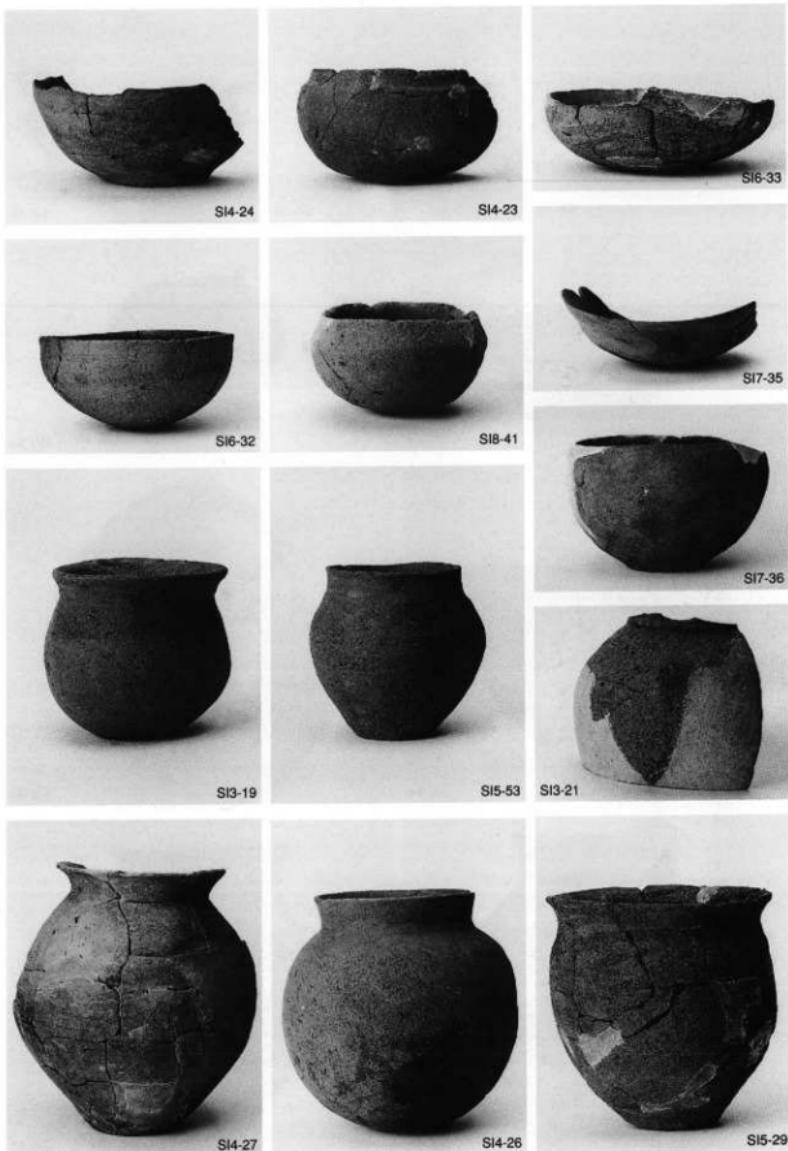


SI1-5



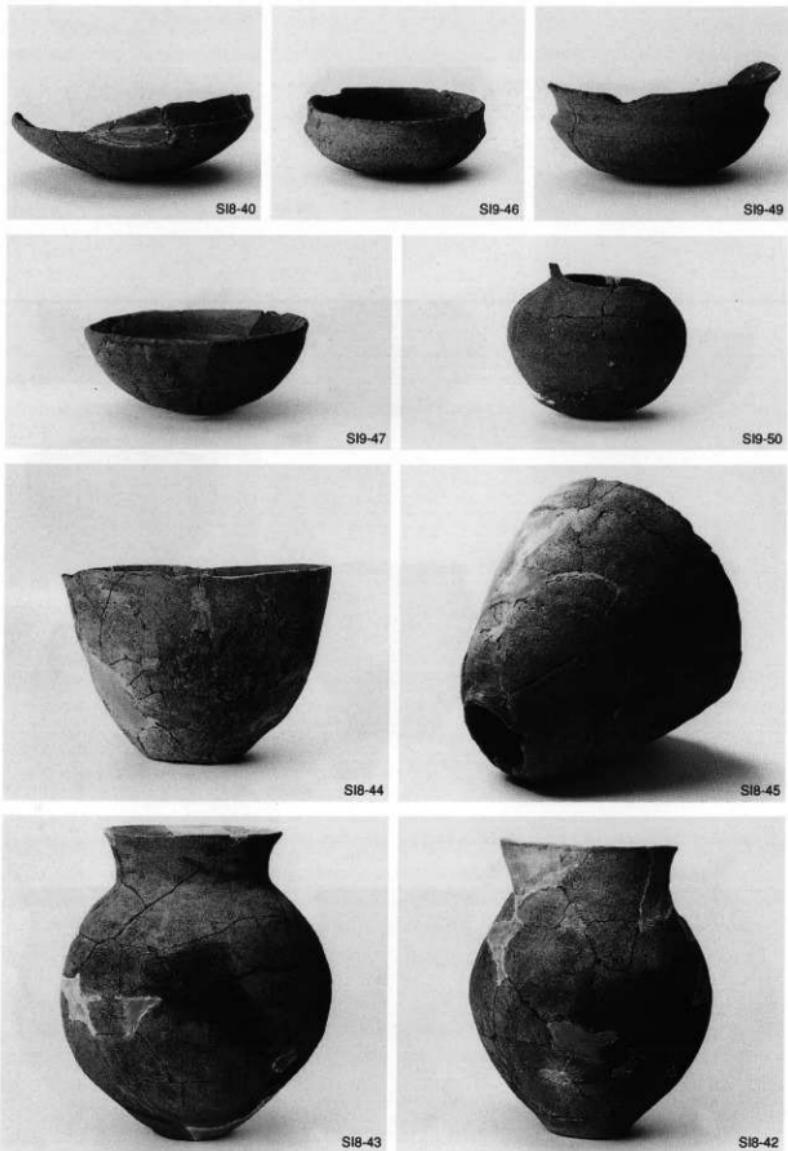
SI3-20

第1·2·3·4号住居跡出土遺物



第3·4·5·6·7·8号住居跡出土遺物

PL10



第 8 • 9 号住居跡出土遺物



SI11-55



SI12-58



SI12-60



SI13-65



SI12-61



SI13-67



SI12-63



SI10-52

第10・11・12・13号住居跡出土遺物

PL12



SI14-70



SI14-71



SI14-75



SI14-77



SI14-82



SI14-80



SI14-78



SI14-79

第14号住居跡出土遺物



SI17-86



SI17-87



SI17-88



SI17-91



SI17-90



SI17-89



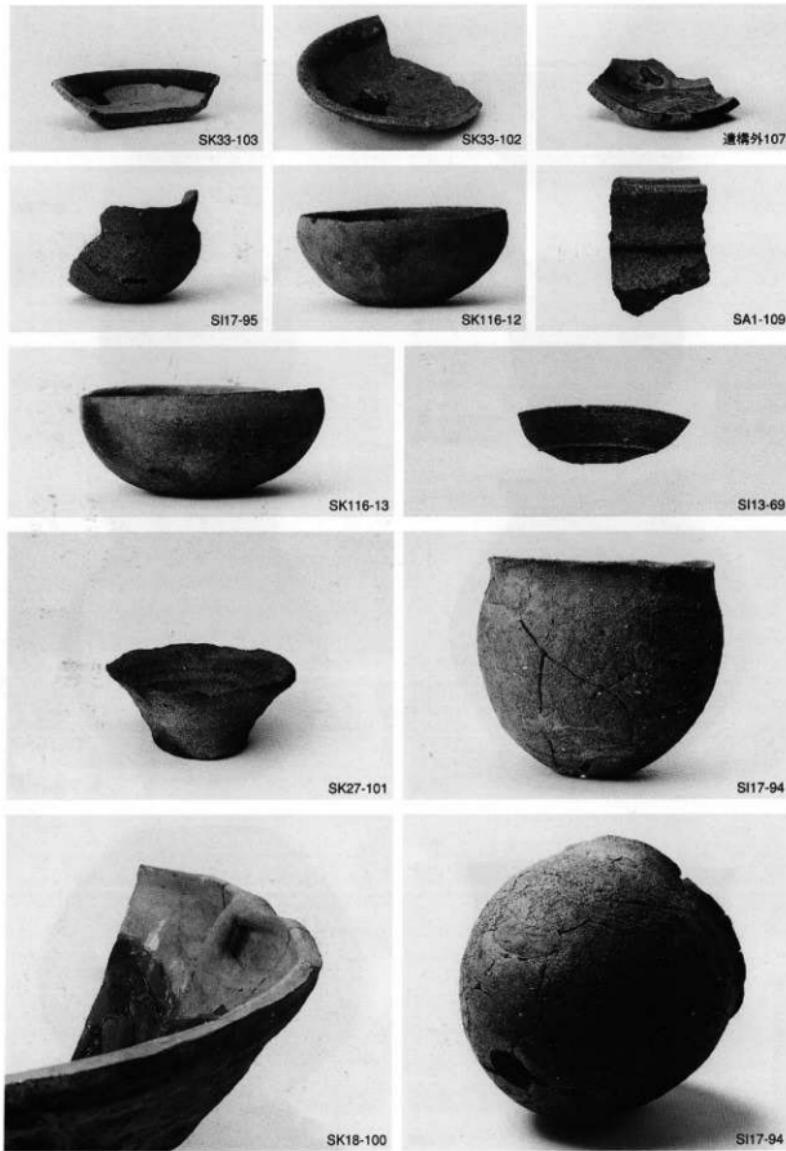
SI17-93



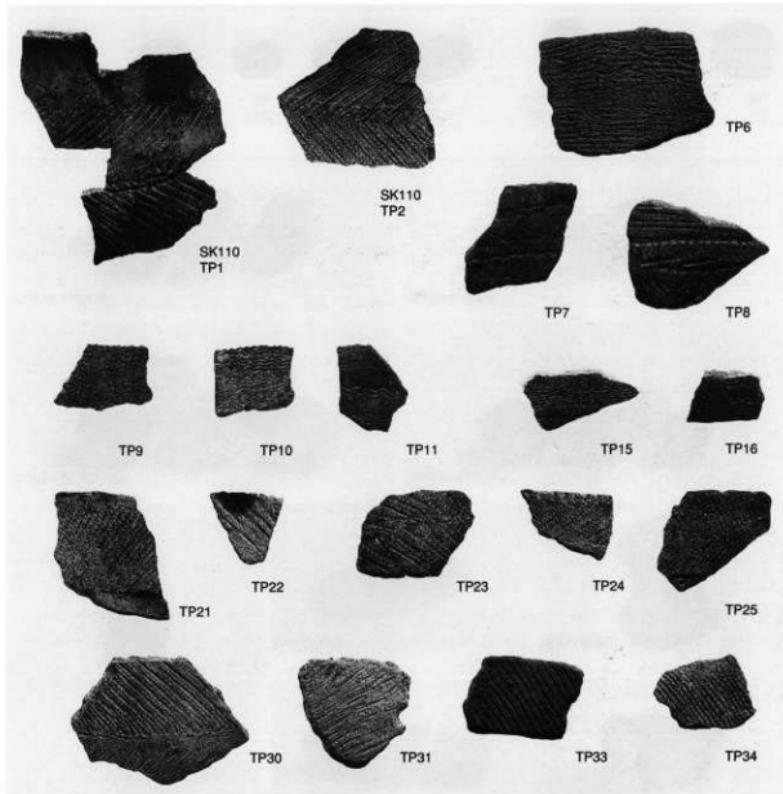
SI17-92

第17号住居跡出土遺物

PL14



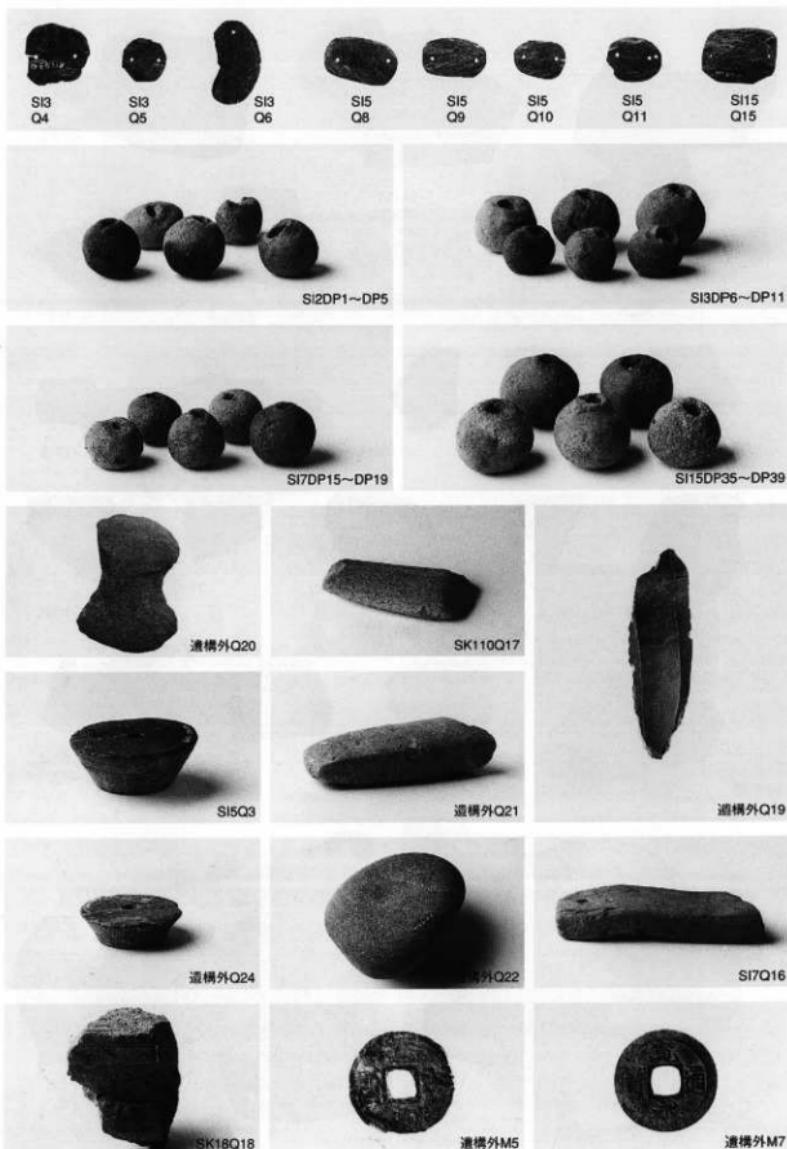
第13・17号住居跡出土遺物, 第18・27・33号土坑出土遺物, 第1号土壙出土遺物, 遺構外出土遺物



SI17-DP40・41

第17号住居跡出土土製支脚，第110号土坑出土遺物，遺構外出土遺物（縄文・弥生土器片）

PL16



住居跡・土坑および造構外出土遺物（石品・石製品・土製品・古銭）

茨城県教育財団文化財調査報告第173集
国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線
道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書2

津賀城跡

平成13(2001)年3月15日 印刷

平成13(2001)年3月21日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 あけぼの印刷社
〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号
TEL 029-227-5505

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第173集

津賀城跡遺構全体図

津賀城跡遺構全体図

